

Annual Report 2023

Laboratory of Regional Design with Ecology

Hosei University

法政大学 エコ地域デザイン研究センター

2023年度報告書

表紙 ポルトフィーノ（イタリア・リグーリア州）
裏表紙 ブラーノ島（イタリア・ヴェネト州）
写真 兼担研究員 福井恒明

はじめに

今年度も年度末が近づき、法政大学エコ地域デザイン研究センター（以下「エコ研」と言います。）の年度の報告をまとめる時期となった。一年前のこの時期には COVID-19 の危機的な猛威は収まり、長かったトンネルの先が見えてきた時期であり、エコ研の活動についてもその重要な活動である対象とするフィールドでの地元の方々との交流などの再開に期待がもたれた時期でもあった。

2023 年度に入り COVID-19 の位置づけも変わり多くの面で日常が戻り、エコ研の活動も以前の姿に近いものとなりつつある。一方コロナ禍時代に発達したリモート会議の技術と慣れは私たちの新しい道具となった。エコ研では主要メンバーにより運営委員会という名の会議を毎月実施しており、コロナ禍の下ではこの会議もリモート開催としていた。昨年度のこの稿において、これが一部対面を取り入れたハイブリッド形式にて開催可能となって良かったという内容に触れた。ところが、今年度の中途からまたこの会議はリモート方式としている。そう、私たちは新しい道具を手にいれ、その便利さに慣れ、会議の性格や内容に依って会議の方式を選択できるようになった。多分これは時代が進んだのだと思う。この年度末報告書の他に私たちは年度末報告会を開催しており、昨年度なども対面で教室に集まるメンバーの他、リモート参加を加えていたが、今年度については、遠隔の地に本務があり、報告会に来られないメンバーからは、リモートを会して研究発表をして頂く予定としている。コロナ前であったら、なんか味気なく、次善の方法という感じがしたが、現在は皆こういった方法に慣れ、特に抵抗感はないだろう。

すでに今年度の卒業研究や修士論文に係る研究について学生たちはそのように進めているが、この新しい道具は研究活動の多くの場面に新し

い可能性を生み出している。従来であれば手紙を出し、電話でお話を伺うとかの遠隔の地におられる方との情報のやりとりについて、「伺うこともできますがリモートでも可能でしょうか」というようなお願いの仕方が普通になり、特に先方に失礼なことでは無くなった。先方の多くはその位の内容でしたらわざわざお越しいただかなくともリモートで十分に対応可能ですよ、と仰って下さることも多い。一方この便利さを間違えて使い、本来現地で確かめるべきものをリモートで扱うことには慎重になるべきであるが、この新しい道具は使い方さえ間違わなければ、研究活動の範囲を容易に広げることが可能とするだろう。

などなど私たちはあの辛かった COVID-19 との戦いの中からも新しい可能性などを見つけ出して新たな生活を送っていくべきだろう。エコ研の活動についてもこのような新たな気持ちを持って、皆で推進して参りたい。

末尾になりますが、今年度についても熱心に活動して下さった兼担研究員、客員研究員の皆様、学生諸君、エコ研事務局の倉本前課長・三木課長・宮崎様他、学内外からサポートして下さった皆様に感謝申し上げます。また、継続的なご支援をいただいている総合資格学院様に心より御礼申し上げます。

今後も皆様のエコ研へのご支援をよろしくお願い申し上げます。

2024 年 2 月 29 日

法政大学エコ地域デザイン研究センター
センター長 高見公雄

目次

はじめに

1 プロジェクト報告

テリトリーオブジェクト 4

- 武蔵野・多摩プロジェクト(1)多摩川源流プロジェクト (神谷博 他)
 - (2)グリーンインフラプロジェクト (神谷博、石神隆)
 - (3)雨水基準制度シンポジウム (神谷博)

- 瀬戸内プロジェクト (樋渡彩、陣内秀信)
- 斐伊川、島根半島プロジェクト (高見公雄)
- 斐伊川流域のテリトリー (堀川洋子)
- 佐原域学連携プロジェクト (小島聡)
- 江戸東京周辺プロジェクト (根崎光男、馬場憲一)

東京都心プロジェクト 30

- 外濠市民塾 (福井恒明)
- 千代田学事業「橋詰空間等を活用するウォークブル滞留空間創出の検討と運営実験」(高見公雄)

2 関連研究 (2022 年度報告会第 1 部) 36

- 「市街地整備推進による自然・地形変化の経緯に関する研究-「水の郷日野」を中心に-」(志村綾音)
- 「近世以降の佐原における地域構造の形成」(志村遥奈)
- 「都市近郊型酪農と白牛酪～江戸の乳製品から学ぶ持続可能な酪農～」(櫻井空斗)
- 「銭湯から考える『まちの継ぎかた』」(栗生はるか)
- 「隅田川かわてらす『ASAGE CAFE 浅草蔵前』」(阿部彰)

3 「アーバンとルーラルの対と融」(2022 年度報告会第 2 部) 56

- 「『アーバンとルーラルの対と融』～テリトリーと今日的課題」(陣内秀信)
- 「懐かしい未来に向けて～地域循環を取り戻す～」(石神隆)
- 「地域からの発信で活性化する～イタリアとあわら温泉の事例から～」(小堀哲夫)
- パネルディスカッション：陣内秀信・石神隆・小堀哲夫・小島聡・根崎光男・木村純子

4 基調講演録：第 47 回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー 84

- 「新たな地域主義の構想に向けて」(2022 年 12 月 17 日開催)より
- 「石牟礼道子の世界と地域の未来～生命たちの賑わいを感じ取れるか?～」(田中優子)

5 研究業績 116

研究業績

6 活動報告 134

活動報告

法政大学エコ地域デザイン研究センター メンバー ※2024 年 3 月現在

1 プロジェクト報告

Project Report

武蔵野・多摩プロジェクト報告(1)多摩川源流プロジェクト
Musashino-Tama project report 1 / project for Tamagawa source area project

神谷 博*¹ 鈴木 清*² 打集宣善*³
Hiroshi Kamiya Suzuki Kiyoshi Uchiatsume Nobuyoshi

キーワード：多摩川、丹波山村、古民家、実測調査、リノベーション

これまで多摩川源流プロジェクトは小菅村の活動が主であったが、今回は丹波山村の集落調査を行った。丹波山村から法政大学に村おこしへの協力要請があったことを受け、エコ研の多摩川源流プロジェクトの一環として取り組むこととなった。

1. 丹波山村の概況

丹波山村は青梅街道の柳沢峠に向かう最後の宿場であり、かつては武田信玄の黒川金山との関係もあり一時栄えていた。多摩川源流の水干に至る丹波川沿川の集落であり、笠取山登山などの拠点としてもにぎわった。その中心部である街道沿の街並みは、宿場の面影を残す建物群が多く残っているが、荒廃しつつある。近年になって一部の建物が保全再生されており、街並みとしての価値は高い。現在の時点で全国的に見ても伝統的建築がよくまとまって残っているが、これまでに建築的な調査がほとんど行われていない。そこで、建築の実測調査を行い図面として残すとともに、街並みの保全再生の提案と実践を目指す。



2. 調査概要

ー1. 調査項目

- ①個別建物の実測、図面化
- ②街並みとしての外観の連続立面図の作成
- ③路地奥の土蔵を含めた建物群の集落形態の調査
- ④湧水や井戸、用水などの水循環システム及び利用形態の調査

⑤伝承の発掘等、歴史の確認

ー2. 調査期間

初年度：先ず1棟の実測調査を実施する

次年度以降：街道に面する建物を順次調査する

ー3. 調査拠点

調査対象の空き家を村から借りる

そこで実測調査と図面化を行い、公開イベントなども行う

ー4. 関連調査

類例について、山梨県内を主として長野県なども含め比較検討を行う

峠を一つ越えた小菅村は既に調査しているが丹波山村とは特徴が異なっており、さらに周辺の上野原市の西原集落や青梅街道、甲州街道、中仙道などの宿場との比較検討を行う

ー5. 調査体制

丹波山村と連携し、法政大学OBの民家調査グループを中心に調査体制を組む

調査チームリーダー：神谷 博、鈴木 清

調査メンバー：金谷匡高、打集宣善、森川久美子他 大学研究室との連携を検討する

ー6. 調査費用

当面、調査チームの自主調査としてスタートする
並行して助成金等の資金調達を行う

3. 建築調査結果

丹波山村守屋邸実測調査まとめ(令和5年8月25日、26日)

建築年代 調査時に丹波山村役場職員から築後70年位が経つ家、という説明があり、1954年(昭和29年)頃に建設されたと考えられる。

ー1. 調査による判明事項

イ 大黒柱は1階の天井の上、2階の床下までで止まり、その上には伸びていない。

ロ 外観は2階建てのように建てられているが、内部は3層になっている。

ハ 正面に突き出して造られている千鳥破風の部分は虹梁、木鼻、斗組を備え、扇垂木を軒に配し町屋にしては特異な造りをなしている。玄関として創建時に造られたと考えられ、後世の増築とは考えにくい。詳しい意図は不明。

ニ 主屋の屋根および千鳥破風の突出部の屋根は、2階の壁に書かれた墨書により、平成16年5月に瓦状のステンレス板に葺き替えられた。ただし葺き替える以前の葺き材は不明である。

ホ 内壁外壁共新材で大壁式に改修されている為、柱径はごく部分的にしか確認できなかったが、座敷周りの柱は125mm角、2階南面の千鳥破風の屋根をうける柱は130mm角(管柱)、大黒柱は282mm×252mm、面取り9分のケヤキ柱であった。

ヘ 各部屋には長押が回っているが長押挽きされた長押ではなく、長方形断面のいわゆる構造長押が使われていた。

ト 2階へ昇る階段の位置は変更された形跡が見られる。現在の階段の2階開口部分に根太を取り外した痕跡が見られる。階段自体も蹴上寸法を小さく造り替えた階段が付けられている。

チ 2階と3階には間仕切り壁はなく、一間造りとなる。広さは梁間が5間(9,090mm)、桁行が7間(12,726mm)で広さは35坪ある。ただし3階の桁に近い部分は床に対してタルキがせまり、作業に適した空間とはなっていない。3階の小屋材、野地板および土壁を見る限り、煤で黒く変色しており、当初材がそのまま使われているとみられる。野地板の一部は張り替えられている。

リ 3階部分の妻側の柱割は5尺間(1,515mm)に割られ、2階の6尺間の柱割と違いを見せている。

ヌ 3階を作業空間として使うことを前提としているようで桁どうしを繋ぐ大梁または桁と小屋束を繋ぐ繋ぎ梁が省かれている。大梁の役割は3階梁(3階の床組を支える)が担っているはずだが、3階梁の端部は柱とどのような仕口で接続されているかは不明である。

ル 2階床組みは1階の天井があって確認できないが3階の床組みは露出していたため確認できた。桁から桁まで渡る大梁は2本しかなく、妻壁から2間半隔てた位置に渡される。大梁相互の間隔は

2間。中央で腰掛け蟻継ぎで継ぎ木され継手の直下に束柱が立てられる。大梁と直角方向に1間毎に小梁が掛けられる。小梁の長さは妻側は2間半、中央間は2間となる。大梁、小梁共角に製材された陸梁(ろくばり)が使われている。大引は梁間方向に1間毎に入れられる。床板は幅90mm×厚21mm、目透かし張りで箆の子状に張られている。おそらく2階の天井も同じ仕様であると推定されがこうした床の作り方は他の地域では養蚕を目的として建てられた家屋に特徴的にみられる。



—2. 今後の建築調査の課題

イ 丹波山村の古民家では便所を男性用、女性用に区別して作ることが行われたと、守屋さん以外の村民からうかがった。畑作地域での肥料としての汚水の保管と利用方法という点で見ると面白いかもしれない。

守屋邸では昭和20年代中ごろの建築なのでそれ以前の建築ではどうであったか。便所はかなり特色がある。

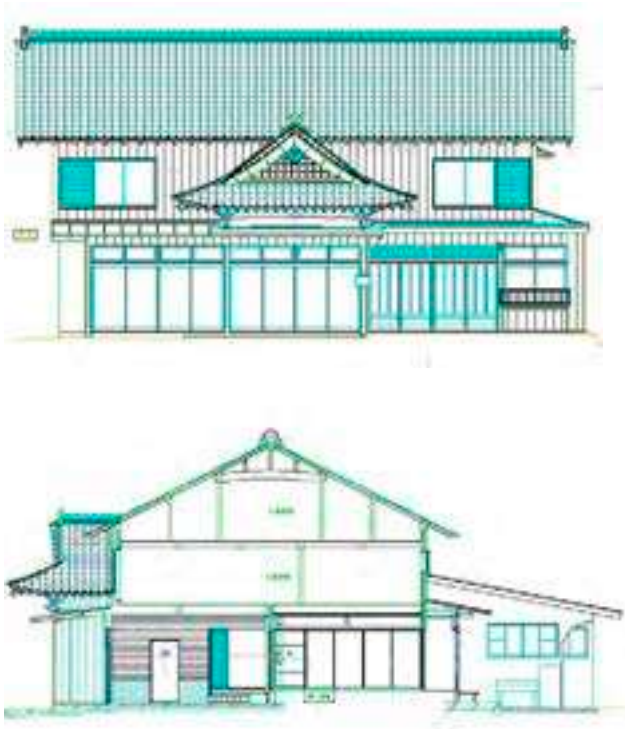
ロ 千鳥破風付き屋根の目的は、この千鳥破風屋根がこの家の玄関であるとするなら、一般の民家

ではこれほどまでの玄関はおよそ必要がない。何か商売上の理由で必要であったものか、あるいは寺社建築の技術に秀でたものが身近にいたものか。斗組、木鼻、葺股などの技法はかなり簡略化されたもとではある。扇垂木の技法は精査して木割に則った物かどうか検証してみないと詳細は判らない。

ハ 屋根。屋根の構造材はほぼ建てられた時のものと考えられるが、葺き材は何か。瓦葺きだったにしては小屋組みの部材が少なすぎる。屋根勾配は5寸勾配でそれは変わっていないと思われる。戦後間もなくの建物なので鉄板葺きであった可能性もあるが、その場合は勾配が3寸～4寸が一般的である。コバ板葺きも考えられるが、その場合も屋根勾配は緩い。聞き取り調査で出てくる可能性があるので注視していきたい。

ニ 創建時の間取りを復元考察してみると、十畳×3室、八畳×2室が整然と並ぶ間取りでその東側は土間となる。表側に間口2間、奥行き1間の玄関が付く。奥座敷にあたる十畳間にはトコ、違い棚と付け書院が付けられた申し分のない書院座敷をなしている。差し鴨居などは使われておらず、二間の開口部では吊り束と構造長押で済ませている。管柱状の大黒柱も長押や天井の取り合い部などから創建当初のものと考えられる。

ホ 生業は何だったのか。



4. 集落調査結果

丹波山村は多摩川本流上流部の丹波川に沿って走る青梅街道の沿道に主たる字がある。今回の集落調査は、中心部の字である丹波地区の予備調査を行った。



調査日は令和5年8月25日、調査内容は、路地奥の土蔵を含めた建物群の集落形態、及び湧水や井戸、用水などの水循環システムとその利用形態について概況の把握を行った。

ー1. 調査結果

イ 青梅街道の宿としての町並みは概ね残っていた。空き家が増える一方、再生も始まっていた。新築された村役場は街並みを踏まえたデザインとなっていた。

ロ 街道沿いの家屋で人が住んでいるところは少ない。店も多くは閉じている。建物は手が入っているものがほとんどだが、大きく改変しているものは少ない。

ハ 1軒だけ洋風建物があるが、医院として使われていたもの。隣の駐在所は立て替えた際に、山梨県の景観協議を行った案件で街並みに配慮してデザインされた。

ニ 空き家は村が買い取って管理しているものもいくつかある。公共用途で転用して使っているものもある。村役場は移転して街道沿いに新築され、街並みを意識したデザインになっている。

ホ 街道沿いの空き家再生は既に2件実施されている。喫茶、飲食店として使われており、デザインも和風となっている。他の空き家も旅館などがあり、建築的には見るべきものもある。

へ 歴史文化財は少ないが、村はずれには「おいらん堂」がある。黒川鶏冠山は武田信玄の時代に隠し金山として栄えたが、武田家滅亡とともに消滅した。抹殺されたおいらんが流れ着いて、村人が供養したという逸話が残っており、今もおいら

ん堂が維持されている。



ト 湧水は街道の北側の山裾からの湧水点が3か所あり、街道南側の川近くに1か所確認できた。それぞれの湧水ごとに生活単位ができており、水道の普及した現在も大切に使われている。北側の1か所は近年枯渇したが、近くでやや規模の大きいRC建築が建設されたことに伴い枯渇したとのこと。



チ 湧水からの導水施設は設置されていないが、水道が路地の要所に設置されており、かつて導水施設があった可能性がある。

リ 裏路地には排水路が整っており、急斜面地であることから雨水処理が重視されていることがわかる。汚水は奥多摩湖上流の水質管理のために山梨県内であるが東京都が施設整備している。

ヌ 表街道に対して南北両側に裏路地が並行して走っている。宿場としての表通りが寂れた状況にあるが、裏道が主たる生活道路になっている。蔵や店、庭なども裏通りに面してみられる。

ル 神社と寺院が1か所ずつあり、表通りからの参道の奥に位置している。神社は字の主水源とな

っている湧水地に立地している。湧水は共同管理されており、水舟が設置され日常の生活用水に用いられている。



ヲ 移設新築された村役場は、街道沿いに立地しており、現代建築だが伝統的町並みの景観に配慮したデザインとなっている。以前の庁舎はRC造の陸屋根で、小菅村からの間道の山道を下り切ったあたりの丹波川の右岸側にあった。字も丹波ではなかったので、街道の西端部に移ったことで村の重心が大きく変化した。丹波山村にとって今後の村づくりに重要な意味を持つと思われる。



－ 2. 今後の作業

今回は集落構造の概要を把握したにとどまったが、今後、集落平面図を作成して詳細な検討を行う。そこに給排水の水系構造を記入し、近代技術導入以前の姿の推定を行う。集落の水系構造は、隣接する小菅村と同様ではないかと推測していたが、沢水利用ではなく、湧水があることなど、基本的な構造が異なるように見えるので、これを解明していきたい。

*1法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員 *2民俗建築研究所 *3マヌ都市建築研究所

武蔵野・多摩プロジェクト報告(2)グリーンインフラプロジェクト

Musashino-Tama project report 2 / Green-infra project

神谷 博*1 石神 隆*2

Hiroshi Kamiya Takashi Ishigami

キーワード：グリーンインフラ、野川、世田谷、成城、脱炭素

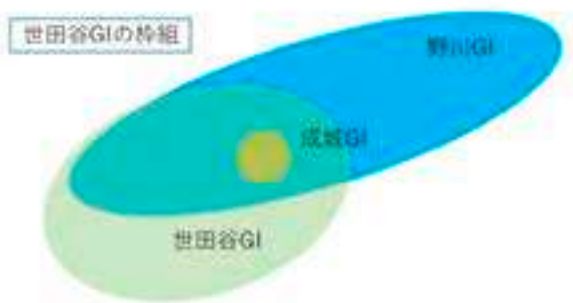
これまで法政大学エコ地域デザイン研究センターの野川グリーンインフラ (GI) プロジェクトとして活動してきた流れが、近年急速な広がりを見せ始めている。特にコロナ以降、世田谷区で表立って現場での動きが多く現れるようになってきた。世田谷 GI の状況について報告する。

【経緯】

2015年に成城地区でグリーンインフラ (GI) の勉強会が開かれた。これは全国でも最も早い市民によるグリーンインフラの取り組みであり、これが世田谷 GI 研究会、野川 GI 研究会に発展した。その後8年経ち、この間に世田谷区におけるグリーンインフラの取り組みが進展してきている。

世田谷区はグリーンインフラを施策に組み込み、(一財)世田谷トラストまちづくりとともに「自分でもできる雨庭づくり」の活動を始めている。地域団体や市民、NPO などもこれに連携して活動し、個人住宅における雨庭づくりの活動を進めており、雨庭の実践は増えてきている。

世田谷区は全国的に見てもグリーンインフラの取り組みが進んでおり、2023年度中にグリーンインフラガイドラインの公表が予定されている。現状は公共施設における事例が多くある一方で、面的に取り組む流域対策としての個人住宅の雨庭を普及させる制度はまだこれからといえる。こうした中、「世田谷グリーンインフラ学習会」が開催され、最新状況について意見交換が行われた。



【学習会】

開催日時：2024年1月25日

開催場所：成城ホール4階会議室

ー1. プログラム：

開会挨拶・趣旨説明：神谷 博

[報告1]地域の取り組み

①雨庭を持つ家：金子有太 (NPO 世田谷まちづくり市民評議会)

②喜多見の住宅の雨庭 NbS：尾崎昂嗣 (NPO 雨水まちづくりサポート)

③東京農業大学の雨庭ほか：福岡孝則 (東京農業大学准教授)

④東京都市大学の取り組み：横田樹広 (東京都市大学准教授)

[報告2]世田谷区のグリーンインフラ

①自分でもできる雨庭づくり WS：角屋ゆず (一般財団法人 世田谷トラストまちづくり)

②世田谷区のグリーンインフラの取り組み：世田谷区土木部豪雨対策・下水道整備課

[交流会]会場：成城自治会館

ー2. 報告内容概要

①雨庭を持つ家



街角の前庭の一部に雨庭を設けた家。見た目には小さな緑だが大きな雨水貯留浸透機能を持っている。

②喜多見の住宅の雨庭NbS



NbS (Nature based solutions) の考え方に基づく雨庭の実践であり、住宅の庭や小さな植え込み、車寄などに雨庭機能を持たせた実践。WS を行いながら普及活動も行った。

③東京農業大学の雨庭ほか



世田谷キャンパス経堂の森として、雨庭を中心に据えたエントランス広場が完成した。広場の計画・設計には造園科学科 ランドスケープデザイン・情報学研究室が協力し里山風景を再生して地域住民や子供たちも利用している。

④東京都市大学の雨庭ほか



二子玉川のキャンパス周辺の調査を行い、雨を浸み込ませる庭のデザインを学生や市民に理解しやすいように模型をつくって実験するなどの教育ツールをつくって雨庭の普及に努めている。

④自分でもできる雨庭づくり WS



世田谷グリーンインフラ学校は 2021 年から始まり、2023 年度には 3 回目を実施された。毎回定員を上回る応募があり抽選で選ばれる。応募者の多くが自分の家で雨庭の実践をするために来ており、毎回熱のこもった議論と実践が行われている。

⑤世田谷区のグリーンインフラの取り組み



世田谷区では「せたがやグリーンインフラライブラリー」を作成して、区内のグリーンインフラ施設の紹介を行っている。現在 30 事例が掲載されているが毎年増えている。

【今後の展開】

エコ研として野川グリーンインフラのシンポジウムを開催したのは 2015 年という早い時期であったがようやく成果が実り、脱炭素の議論と合わせた新たな展開も見え始めている。今回の学習会は世田谷 GI 研究会の内部意見交換会であったが、世田谷区、(一財) 世田谷トラストまちづくり、成城学園、東京農業大学、東京都市大学、成城自治会、NPO 雨水まちづくりサポートをはじめ主体となっているメンバーが揃い、今後の更なる協働が期待される。

客員研究員*1 客員研究員*2

武蔵野・多摩プロジェクト報告(3)雨水基準制度シンポジウム
Musashino-Tama project report 3 / Symposium on Rainwater Criteria Systems

神谷 博*1
Hiroshi Kamiya

キーワード：雨水、雨庭、水質、グリーンインフラ、生物多様性

グリーンインフラプロジェクトの一環として「第4回雨水基準制度シンポジウム/雨水活用の現状と基準や制度を考える」～グリーンインフラの進展を見据えて～を開催した。

【開催趣旨】

「水循環基本法」と「雨水の利用の推進に関する法律」（雨水法）が2014年に制定されて9年が経過した。この間、地球温暖化に伴い「極端気象」と呼ばれるような状況が加速している。雨の降り方も、豪雨や渇水が世界的に頻発するようになり、日本でも「グリーンインフラ」が2021年に国策化され、同年に「流域治水プロジェクト」が始まった。今や全ての人々が雨水制御や生物多様性に関わることが求められている。雨水との関りにおいて、その仕組みを整えることは大事だが、技術的な基準や推進のための制度などはまだ整っていない。どのような基準や制度などの仕組みを整えるべきか、その課題について議論を交わした。

【概要】

日時：2023年5月17日（水）10：00～17：00

会場：法政大学市谷校舎ボアソナードタワー
26階スカイホール

主催：法政大学エコ地域デザイン研究センター
公益社団法人雨水貯留浸透技術協会
特定非営利活動法人雨水まちづくりサポート
日本建築学会あまみずのこれからを考える小委員会

後援：国土交通省

<プログラム>

10：00 開会

【主催者挨拶・趣旨説明】雨水基準制度研究会

【挨拶】国土交通省

【基調講演】

講演1：「NbS（自然を基盤とした解決策）としての雨庭都市を目指して」

／森本幸裕（京都大学名誉教授）

講演2：「雨水利用に関する話題」

／榊原 隆（八千代エンジニアリング統括技師長）

12：00～13：30 昼食及び展示セッション

13：30

[報告1]自治体分科会「京都市における雨庭の取り組み」*リモート講演

／豊田幸宏（京都市建設局みどり政策推進室）

[報告2]雨にわ分科会「誰でもできる雨庭づくりWS」

／角屋ゆず（世田谷トラストまちづくりセンター主任）

[報告3]製品分科会／「雨水循環型壁面緑化システム」大林修一（㈱プラネット代表取締役）

15：50 休憩

16：00

[パネルディスカッション]

「雨水活用の現状と基準や制度を考える」

パネリスト：報告登壇者 及び 屋井裕幸（雨水貯留浸透技術協会常務理事）

コーディネーター：神谷 博（NPO 雨水まちづくりサポート理事長）

【内容】

講演1：「NbS（自然を基盤とした解決策）としての雨庭都市を目指して」



要旨／激甚災害とコロナ禍が示す地球環境危機

世界で進む対応：G7 自然協約：CBD-COP15・・・

NbSとしての雨庭の町づくり推進を産官学民で取り組むチャンス

生物文化多様性とNbSの親和性：温故知新

小規模分散自律型雨庭は景観生態学からも意義深い

推進政策は進んでいるようだが、未だにハードルも



概要／雨水利用の現状：雨水の利用の促進に関する法律（平成26年法律第17号）、雨水の利用の推進に関するガイドライン（平成28年7月）について

課題と提案：下水処理水の再利用と雨水利用の連携、従来の雨水貯留浸透施設からグリーンインフラへ

海外事例：インドネシア、インドの事例紹介

1. 京都市における雨庭の取り組み



雨庭とは、地上に降った雨水を下水道に直接放流することなく一時的に貯留し、ゆっくり地中に浸透させる構造を持った植栽空間（庭）のこと

雨水流出抑制、良好な景観形成、コミュニティの形成、生物多様性の保全、ヒートアイランド現象の緩和、水質浄化、身近な自然体験の場創出等

2. 誰でもできる雨庭づくりWS



長年、緑地・公園の保全や市民主体のまちづくりを推進してきている中で、グリーンインフラは環境保全や地域づくりにおいて重要なテーマであり、これまでの経験を活かせる。

一方で、市民にとってグリーンインフラは馴染みがなく、暮しのなかで取り入れたい「個人宅で取り組める雨庭」づくりの普及が重要。

3. 雨水循環型壁面緑化システム



雨水の貯留浸透性能が高く、植物の成長にも寄与する雨庭の実践。土壌基盤材に再生発泡ガラスカレットを用いることで高い空隙率を確保し保水性、通気性を高め維持管理が容易な雨庭をつくる。

4. パネルディスカッションとまとめ

グリーンインフラの普及に対して、その背景となっている地球環境への取り組みも進展している。脱炭素で世界に後れを取っている日本は生物多様性や雨水の基準づくりを急ぐ必要がある。ネイチャーポジティブ経済でも後れを取らないようにグリーンインフラへの取り組みの強化が望まれる。

客員研究員*1

瀬戸内テリトリーオに関する研究 大崎下島における沖友の変遷と因島八十八箇所霊場

A Study on the Setouchi Territory

A Case of The Changes of Okitomo on Osakishimojima and 88 Sacred Sites on Innoshima

樋渡彩*1、陣内秀信*2

Aya HIWATASHI, Hidenobu JINNAI

メンバー：樋渡彩・陣内秀信

キーワード：瀬戸内、テリトリーオ、大崎下島、因島、八十八箇所霊場

1.はじめに

本研究は瀬戸内海を中心とした地域構造を考察するものである。ほとんど記録のないような集落や小さなものに目を向けながら、瀬戸内のひとつの側面を浮かび上がらせることを目的とする。本稿では広島県の大崎下島と因島を取り上げる。大崎下島では、沖友という小さな集落の変遷について考察する。因島では、八十八箇所霊場から見た因島の特徴を考察する。

2.大崎下島の概要

現在の大崎下島はみかん栽培が有名で農業が盛んであることが知られる。また、御手洗が1994年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。本稿では沖友という小さな集落に焦点を当て、航空写真や絵図、地形図、おもにゼンリンから発行されている住宅地図などの資料を用いて、集落の変化を考察する。

2-1.江戸時代までの大崎下島

大崎下島の歴史は古く、局部磨製石斧が発見されているように、旧石器時代から人が住んでいた。当時の瀬戸内海は陸地であり、低地には湖が形成され、動物にとって住みやすい環境であった。大長の宇津神社にはナウマン像の化石が所蔵されており、大型動物も生息していたとされる。

縄文時代には、現在とほぼ同じ瀬戸内海が形成されてきたと言われており、三角島から安山岩製刃器が出土している。また、弥生時代では、大崎下島の南側から堀越遺跡が発見されており、高地性集落を築いていたという。堀越遺跡からは、多くの弥生土器が出土している。

江戸時代になると大崎下島が描かれたもの

がいくつかある。「御当国絵図面」には「大濱島」と記載され大長の地名も確認できる。(図1)「瀬戸内沿岸絵地図」には大長と久比の地名が記載されている(図2)。「芸備両国浦島絵図」には、各集落の地名が記載されており、「沖友」もわかる(図3)。また、御手洗から岡村島・大崎上島の大串に、大浜から豊島と三角島に航路があることが読み取れる。「幕末広島藩海防絵図」にも各集落の地名が記載されている(図4)。

1825年に作成された「芸藩通志」から、道路はおもに海辺に通っていることがわかる(図5)。また、大崎下島の中央部の谷にも内陸に向かう道路を確認できる。



図1 大崎下島全体
広島県立文書館寄託、三浦家文書、「御当国絵図面」、200904、1、部分



図2 大崎下島全体
広島県立文書館寄託、本河野家文書、「瀬戸内沿岸絵地図」、200908、36、部分



図3 大崎下島全体
広島県立文書館、平賀家文書「芸備両国浦島絵図」、8803、2762部分



図4 大崎下島全体
広島県立文書館、木村恒氏旧蔵文書、「幕末広島藩海防絵図」、200602、1、1、部分



図5 大崎下島の大長から沖友の辺り 1825年
芸藩通志、「大長島大長村」

2-2.1898年の大崎下島

1898年の地形図から、島のほとんどを山が占め、中央部には集落はないことがわかる。島の海側で、周縁部の平地に集落がある。

最も発展しているのは、島の東側にある御手洗である。その次は御手洗と同じく島の東側に位置している大長である。その他の集落では、ぽつぽつと分散されるように建物が描かれている。全体的に東側の方が発展していたことが読みとれる。

山には果樹園が広がっている。その多くが大崎下島の東側に分布していることから、島の東側は農業が盛んだったと推測される。

大崎下島で最も広い道路はおもに海岸線に沿って通っている。また、北から南に縦断する道路があり、谷を通っている。久比と沖友を結ぶ道路であることから重要な道路であったことがうかがえる。

2-3.江戸時代までの沖友

沖友には、沖友天満宮が立地している。この神社は、「971(天禄2)年7月初めて建つ」と記録されており、菅原道真が九州に戻る際に立ち寄り、建立したという^{注1}。標高0-4mに沖友天満宮が位置しており(図6)、この時代、現在の海拔4mが海面だったとされていることから^{注2}、建設当時から現在まで同位置の場合は、海上に建設されていた可能性がある。あるいは、かつては標高4m以上に位置し、現在の場所に移ったと考えられる。標高4mのラインは沖友小学校の裏の道にあたり、現在、祠が位置している。かつては、この辺りに沖友天満宮が立地していたのではないだろうか。

中世の頃、尾道では標高4-15mの間に、濃密な中世都市があったとされており^{注3}、沖友でも標高4-15mに居住地が位置している。

芸藩通志(1825年)には「沖友谷」と記載され、天満宮も描かれていることから、沖友の集落があったことがわかる(図7)。天満宮は現在の位置とほぼ重なり、天満宮を挟むように2つの河川(水路)が描かれている。

また、海岸に沿って描かれた道路は、沖友の西に位置する大浜と東に位置する御手洗を結ぶ道路であり、現在の大崎下島循環線に該当する。この道路から集落の奥に伸びる道も

描かれており、河川に沿って道がついている。現在、この河川は暗渠化されているが、その暗渠に沿った道も確認することができる。その道沿いに祠が位置している。

2-4.明治時代-1990年代 果樹園の広がる沖友

1898年の地形図から沖友の東側に位置する御手洗につながる道路が読み取れ、現在の大崎下島循環線に該当する(図8)。また、海岸沿いの道から沖友の集落の北側に伸び、2つに分岐している。一つは、北側に位置する久比、もう一つは西側に位置する大浜とつながる道路である。東側には住宅の塊を確認することができる。現在の道幅は2.1-3m未満となっており、集落のなかでも幅広の道である。現在でも久比に繋がる道路として引き継がれている。その一方で、大浜と繋がる道路については、現在、道路が無くなっている。

沖友の集落の東側には果樹園の地図記号があり、斜面地に広がっていることがわかる。現在は、ほぼ雑木林となっており、ところどころに柑橘系の畑がある程度である。1898年の地図には、集落と果樹園をつなぐ道路が記載されており、主要道路よりも幅の狭い道として分類されている。現在、その道を確認することができない。

1947年の空中写真1898年の地形図と比べると建物が増えている(図9)。また、沖友の集落の東側斜面地に果樹園が読み取れ、1947年には農業が盛んであったことがわかる。



図6 標高0-4mに位置する沖友天満宮
国土地理院「自分で作る色別標高図」



図7 沖友谷 1825年
芸藩通志、「大長島大長村」



図8 東側斜面に広がる果樹園
1898年
国土地理院の地形図に追記



図9 沖友 1947年
国土地理院の空中写真
に追記

1947-1970年の各年代の空中写真を見ると、変化が見られない。東側斜面地に果樹園が読み取れ、農業が行われていたことがわかる。

1982年の住宅地図から、北側に位置する久比につながる道路が読み取れる。沖友天満宮のすぐ東側を通るこの道路沿いには、「沖友分団」や「沖友農協」といった公共施設のほか、沖友説教場という宗教施設が立地している。沖友農協から沖友説教場の間には、住宅が密集して立地している。また、沖友天満宮のすぐ北側には「藤田商店」や、沖友分団の南側の「奥商店」の辺りは人が往来する重要な場所だったことがわかる。御手洗につながる海岸沿いの道路沿いには、「沖友集会所」が位置している。「沖友給油」があることからこの時代は自動車社会であることがわかる。また、「ソ」と記載されており、これは倉庫を意味する。沖友集会所と沖友給油の間には、倉庫が多く、みかん蔵だった可能性がある。

大浜につながる海岸沿いには、住宅は少なく、倉庫が多い。沖友港に面して「選果場」が立地している。海側に倉庫が多い理由の背景としては、この「選果場」との関係があると推測される。

集落と果樹園をつなぐ道路が11本読み取れる。ここから、みかん栽培がこの集落にとって重要であったことがうかがえる。山側には住宅や倉庫がない。大崎下島全体で農業が盛んであり、倉庫の多くが果物を保存・貯蔵しておく倉庫であることが推測される。

1982年の住宅地図より、「沖友小学校・幼稚園」と記載されている。沖友のこの時代は、小学校や幼稚園が成り立つほどの人口だったことが推測される。具体的には、1980年の大崎下島全体の世帯数が約1700、総人口が5000人であり、現在の倍以上であった^{注4}。

1982-1995年の各年代の空中写真は変化が見られない。また、1995年の空中写真でも沖友の集落の東側斜面地に少し果樹園が読み取れる。新たに集落の西側に、道路が確認でき、1984年から1995年頃にできたことがわかる。

2-5. 2000年代以降 用途変化が見られる沖友

2003年の住宅地図から、北側に位置する久比につながる道路沿いには、消防署や沖友説教場、沖友天満宮などの宗教施設が並んでい

る。住宅や商店も並んでいることから、集落のなかでも主要な道路であることがわかる。

集落と果樹園をつなぐ道路沿いは、住宅や倉庫が並んでいるが、山側になると住宅や倉庫がないことが読み取れる。

西側に位置する大浜とつながる道路沿いには、住宅は少なく、倉庫が多い。この道路の西側に、新しく道路が出来ており、北側に位置する久比につながる道路付近まで延長されている。

港には「JA広島ゆたか農協沖友支所」の建物がある。これまで「選果場」と記載されていた建物である。

東側に位置する御手洗につながる道路沿いには、住宅は少なく、倉庫が多い。1995年の住宅地図では、この道路沿いにガソリンスタンドがあったが2003年では無くなっている。

1982年から1995年までの住宅地図で「沖友小学校と幼稚園」と記載されていた場所が2003年の住宅地図には「豊町スポーツセンター、豊町ふれあい農産センター」と記載されている。また、1982年から1995年の住宅地図では、農協と記載されていた場所が、2003年の住宅地図には「ふれあいプラザ、沖友コミュニティセンター」と記載されていることから、この間に建物用途が変化したことがわかる。

2-6. 沖友の変遷のまとめ

以上の考察から、大崎下島の沖友において、大きく3つの時代に区切ることができた。

江戸時代以前は、神社や寺院などの宗教施設を中心とした集落であることが確認できた。多くの集落は、河川に挟まれ、標高4-15mの位置に広がっていたと推測した。

明治時代から1990年代頃までは、果樹園が広がっていたことがわかった。特に1970年代の空中写真から、農地が広がっていたことが読み取れた。みかん産業が盛んだったのは1980年代までであり、1980年代後半には衰退していった。

2000年代以降は建物の数の増減は見られなかったが、小学校や農協などの用途変化が見られ、果樹園の時代とは集落の性格が異なることが読み取れた。

3. 八十八箇所霊場から見た因島の特徴

次に因島における八十八箇所霊場の立地について着目し、因島の特徴を考察する。

八十八箇所霊場は、四国八十八箇所霊場由来し、四国にある空海に関連する仏教寺院88箇所の総称である。それを巡ることでご利益があることから、四国八十八箇所霊場を模写して各地に八十八箇所の巡礼地が創られた。

因島における八十八箇所霊場は、1912（明治45）年に遡る。島四国として、全島民の奉仕で創られたという。第1-23番は阿波（徳島県）、第24-39番は土佐（高知県）、第40-65番は伊予（愛媛県）、第66-88番は讃岐（香川県）である^{注5}。

本稿では、因島八十八箇所霊場の位置から、当時、住民がどのような場所を重要視していたのかを考察する。また、へんろ道は、現在、通行不可能な道もあるため、かつての道を把握することで、現在見えにくくなっている因島本来の特徴を捉えていく。

3-1. 霊場の形態

因島の霊場は10-25㎡程度の小規模な建物が多い（図10、11）。例えば、第72番は、3畳程で、人が数名入れるような場合もある。

屋根形状は、切妻、寄棟、方形、入母屋の4種類である（図12）。切妻は25箇所、寄棟は10箇所、方形は22箇所、入母屋は20箇所確認できた。方形は寺の敷地内か隣接する霊場で見られる。

3-2. 霊場の位置

霊場の位置について、集落との関係から考察すると、大きく3タイプに分けることがで



図10 第48番西林寺
撮影：上田健一朗

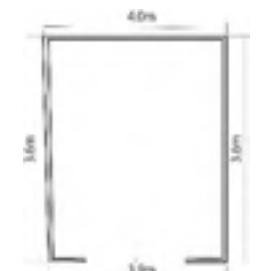


図11 西林寺 平面図
作成：上田健一朗



図12 屋根形状の種類
作成：上田健一朗

きる（図13、14）。

1. 集落と集落の間に位置する「独立タイプ」
2. 集落の中に位置する「中タイプ」
3. 集落の端に位置する「エッジタイプ」

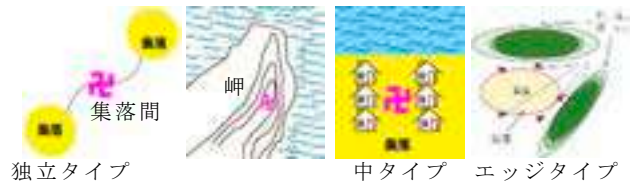


図13 八十八箇所霊場における集落との位置関係による分類
作成：上田健一朗

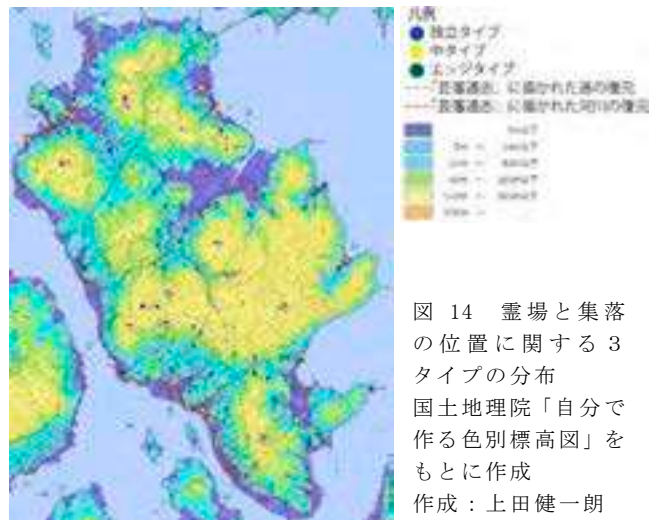


図14 霊場と集落の位置に関する3タイプの分布
国土地理院「自分で作る色別標高図」をもとに作成
作成：上田健一朗

3-2-1. 集落と集落の間に位置する「独立タイプ」

独立タイプは、集落と集落の間に位置し、集落から離れている。車道とは異なり、かつて人が通っていた道が浮かび上がる。88箇所のうち13箇所がこのタイプにあたる。このタイプは、集落と集落を繋ぐ道の途中に位置する事が多く、丘や山頂に位置するタイプも見られる。城跡にある霊場も確認できた。また、岬のような海を意識したと推測される場所に位置する霊場も見られた。

3-2-2. 集落の中に位置する「中タイプ」

集落の中に位置する霊場を「中タイプ」に分類した。88箇所のうち27箇所で見られた。

3-2-3. 集落の端に位置する「エッジタイプ」

集落の端に位置する霊場を「エッジタイプ」に分類する。88箇所のうち45箇所、3タイプのなかで最も多いことがわかる。

エッジタイプの多くが、地形を断面的に捉えた場合、「海—集落—霊場」という順になり、集落が比較的平らな所に広がり、その背後の山の麓に霊場が位置する（図15）。まるで、

集落を背後から守っているかのような配置である。さらに細分化すると、寺院の境内にあるタイプ、寺院に隣接するタイプ、溜池付近にあるタイプなど霊場の選定場所の傾向が見える(図16)。暗渠沿いにもあり、これはかつて集落の端を流れる水路の位置にあたる。なかには、城跡と集落を繋ぐ道にも配置されており、「独立タイプ」で見られたように城との関係もうかがえる。

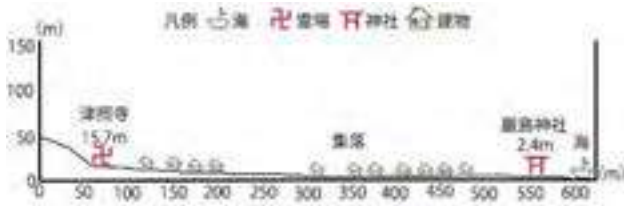


図15 鏡浦に位置する第25番津照寺から海までの概略断面図 作成：上田健一朗



図16 エッジタイプの細分類 作成：上田健一朗

3-3. 集落の分類

霊場の位置の3タイプをもとに、集落の特徴を見ていくと、次の3種類に分けられる。

1. 「中タイプ」で構成される集落
2. 「エッジタイプ」で構成される集落
3. 「中タイプ」と「エッジタイプ」で構成される集落

3-3-1. 「中タイプ」で構成される集落

「中タイプ」で構成される集落は、棕浦が挙げられる。棕浦は、因島の中で最も古い集落であり、北前船が寄港地として廻り船業で栄え、中世から近世まで広島藩の蔵入地であった^{注6}。また、海岸に集落ができたのは徳川期になって世が安定し、航海業者が定着するようになってからとされる^{注7}。1805年に廻船連中が金毘羅大権現を祀った^{注8}常夜灯がある。

海側の低地に集落が広がり、集落を囲むように山がそびえる。山には中世に建設された

海城があった(図14)。

棕浦には、霊場第27番の神峰寺と第28番の大日寺が位置している。神峰寺は、海に面した場所で海とのつながりがうかがえる。その背後には墓地が広がっている。大日寺は、良神社の隣にある。

3-3-2. 「エッジタイプ」で構成される集落

集落の周辺に位置する「エッジタイプ」で構成される集落は、中庄、外浦、鏡浦が挙げられる。いずれも因島の東側に位置している。ここでは中庄について見ていく。

中庄の名は、「中の御庄」に由来し、荘園時代の名残である。塩田開発が行われた^{注9}。

中庄は、低地部分が内陸部の奥まで入り込んだ、入り江のような形状である。霊場は標高14m以上に位置し、低地には霊場がない(図14)。1897年の地形図には、低地に建物が描かれておらず、田の記号が記載されており、居住地域でなかったことが読み取れる。

霊場第8番熊谷寺と第9番法輪寺は溜池の近くに位置しており、霊場が溜池付近に位置する典型例である。

第11番藤井寺は、島で最も古いとされる金漣寺(1449年)の境内に立地している。この寺は、宮地氏が村上氏の家門繁栄を祈願して、村上氏の氏寺として建立したものである。宮地氏は、年貢を運ぶ運搬船の船持で、運輸業による富裕層である^{注10}。

第12番焼山寺は、1528年に建立された成願寺の境内に位置し、第13番大日寺は、若八幡神社の境内に位置している。

このように中庄の霊場は、寺院の境内の中、溜池付近に位置する傾向を確認できた。

3-3-3. 「中タイプ」と「エッジタイプ」で構成される集落

「中タイプ」と「エッジタイプ」で構成される集落は、大浜、三庄、土生、田熊、重井が該当する。本稿では土生を取り上げる。

土生は造船業で有名だが、今日に見られるような発展は、霊場が設置された1912年よりも後である。それ以前は、製塩業が行われており、1825年の芸藩通志に「塩濱」と記載されている(図17)。1897年の地形図にも塩田が描かれている。ここは「長崎」という地名で、河川に沿って建物が分布している。

長崎に位置する「中タイプ」である第46番の浄瑠璃寺は、1897年の地形図から、霊場の位置には建物が無いことがわかる。長崎に位置する「エッジタイプ」である第45番岩屋寺は、集落の背後であり、水路沿いに位置する。

次に「箱崎」を見ていく。1897年の地形図から、土生で最も密集した街区が形成されていることがわかる。箱崎は、中世の揚げ浜式の塩田の跡地に密集して住居が形成され、区画ごとの面積がほぼ均一なのが特徴である。家船の漁民が住んだという。

「中タイプ」である第49番の浄土寺の付近には、芸藩通志に「社倉」が記載され、集落があったことがわかる。1897年の地形図から、箱崎の主要な道路沿いに建物が密集して建てられていることが読み取れる(図18)。浄土寺はその密集した建物群のすぐ北側で、この頃は建物が無いことが読み取れる。お堂の管理は巻幡氏がしている^{注11}。このことから、明治末に全島民の奉仕でつくられ、現在でも個人の管理が続いていると推測される。「巻幡」の名前は、浄土寺のはす向かいにあり、2022年の住宅地図で確認できる。



図17 長崎の塩濱
国立公文書館「芸藩通志」



図18 箱崎の密集街区
国土地理院(1897年)

3-4. 八十八箇所霊場から見た因島の特徴のまとめ

因島の霊場は、集落と集落の間に位置する「独立タイプ」、集落の中に位置する「中タイプ」、集落の端に位置する「エッジタイプ」に分類されることを確認した。

「独立タイプ」は、集落と集落の間であることが多く、現在の車道とは異なり、かつて人が通っていた道が浮かび上がった。また、山頂や城跡にある霊場や、岬のような海を意識した場所に位置する霊場も見られた。

「中タイプ」は、1897年の地形図で建物が密集している集落で見られた。これは生業による集落の発展を示している。また、同地形

図で空地となっている場所に新たに設置される傾向があることを確認した。さらに、個人管理している霊場を特定した。

「エッジタイプ」では、集落の背後に設置される傾向を把握した。寺社の境内もしくは隣接する霊場や、溜池付近の霊場など集落にとって重要な場所が明らかとなった。

4. おわりに

大崎下島では郷土史にも書かれないような「沖友」という小さな集落を取り上げた。地図資料などを用いながら変遷を追うことで島の時代の変化を読み解くことができた。時代の変化はほかの島にも共通すると考えられる。また、因島の八十八箇所霊場の位置から因島の特徴を読み解いた。小さな構造物ではあるが、島の個性が浮かび上がった。こうした小さなものにも目を向けることで、島の本来の特徴を読み解くことが可能だと考えられる。

今後も集落や小さな構造物にも目を向け、瀬戸内に眠っている価値を掘り起こしていく。

注

- 1) <https://ameblo.jp/hidsrod/entry-12556147476.html>
- 2) 陣内秀信、岡本哲志(編)『水辺から都市を読む——舟運で栄えた港町』法政大学出版社、2002年、p.306。
- 3) 同前。
- 4) 豊町教育委員会『豊町史 本文編』豊町教育委員会、2000年、p.21。
- 5) 因島観光協会(https://kanko-innoshima.jp/sightseeing_leisure/innoshima88、2023年12月27日検索)。
- 6) 青木茂『因島市史』因島市史編集委員会、1968年、p.138。
- 7) 同前書、pp.816、821。
- 8) 現地説明板、尾道市教育委員会。
- 9) 青木、前掲書、p.298。
- 10) 土井作治『図説 尾道・三原・因島の歴史』郷土出版社、2001年、p.100。
- 11) 現地説明板。

法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員*1
法政大学特任教授*2

斐伊川、島根半島プロジェクトの再起動

Restarting the Hii River and Shimane Peninsula projects

高見 公雄
Kimio TAKAMI

メンバー：灘英樹，丹治寛太

キーワード：斐伊川，出雲，松江，境港，潮汲み，島根半島，神有月，四十二浦

1. 研究の概要と目的

斐伊川，島根半島プロジェクトについては以下のような視点，目的から 2019 年度に立ち上げたものであったが，その年度末からのコロナ禍により立ち行かなくなっていた。今年度においてその再起動を期しており，本稿はその報告である。

島根県松江市は東洋のベニスと呼ばれる水の都であり既に堀などを活かした水辺まちづくりや水辺の活用が進んでいる。驚かされるのは水とまちの距離（高さ差）が近いことである。これは斐伊川の特性による。斐伊川は暴れ川としても名高い一方，宍道湖という巨大な遊水池をもっているとも言え，中流部の放水路事業と上流部でのダム建設が終えられ，松江市街地と斐伊川との新しい関係が造られつつある。一方合併により広大な市域を持つこととなった松江市の北部海沿いには四十二浦と呼ばれる一団の漁村集落があり，海と一体となった暮らしが営まれてきた。北側を海，南側を宍道湖に挟まれる松江市，そして下流河口部の境港市街地とも独特な水辺まちづくりの可能性を秘めており，特化した地域性を強く感ずる。当研究はこのような斐伊川の治水性能を踏まえた川沿い，そして島根半島の海沿いという地域を構成する二種類の水辺の双方に着目し，これを一体に捉えることでこの地域でしかなし得ない水辺まちづくりの可能性について研究することを目的としている。

2. 当プロジェクトが着目する地域資源

中核をなすものは二つの水辺，すなわち中国山地から流れ出てくる暴れ川の斐伊川と日本海。地元ではこれらを「島根半島・宍道湖中海ジオパーク」といった捉え方もある。これらの中から当プ

ロジェクトが着目している地域資源を順に見ていく。まずは斐伊川本体。



図1 斐伊川水系の基本的な治水対策

出典：出雲河川事務所資料

斐伊川はヤマタノオロチ伝説としても語られる暴れ川で，出雲地方の南，奥出雲方面から北上し斐川平野で東方に折れ，宍道湖～大橋川～中海を経て境水道から日本海に注ぐ河川である。江戸時代までは斐川平野において西方に折れ，大社湾に注いでいたと言われている。その地形を活用して斐伊川放水路が建設されたものと見られる。

見どころは実に多い。私たちの感心を特に引きつけたのは水の都松江市における市街地と水面の近さである。日本海側の地域は太平洋側に比べて総じて海面の干満差が小さく，斐伊川においても河口部の境水道において日の干満差は 70cm 程度と言われている。東京湾は概ね 2m であるからそ

の差は大きい。こちらの常識で見ていくとこんなに水が近くて大丈夫なのかと不安に思うほどである。



図2 松江市内の水辺, 水が近い

次には多様な水に囲まれていることである。地図で見るとそれぞれの水面のように思うが、実はこれらは極めてコンパクトな地域に存在しており車で走っていると宍道湖なのか日本海なのか迷うようなポイントすらある。個別にみれば穏やかな地形の中に悠々とある宍道湖に対し、島根半島北側の漁村群はまさにジオパークと呼ばれるに相応しい急峻な地形と海との接点にある。これが昔の国引き伝説を生み出したことにも納得がいく。



図3 斐伊川と日本海による多彩な水辺

出典：JAXA

そしてこの日本海との接点に点在する四十二浦と呼ばれる漁村にはそれぞれ小さいけれども厳かなる神社が鎮座している。潮汲みと呼ばれる作法に従ってこれら神社に参る。実に神秘的である。

これに関連して是非見ておきたい神社がある。松江市街地の南の外れにある神魂（かもす）神社である。私は45年ほど前、建築を学ぶ学生であった頃初めて神魂神社を訪れ、その衝撃は今でも忘れられない。のどかな郊外の自然豊かな環境の中に突然現れる超国宝。こちらは出雲国にのみ分布する大社造のなかの最古の遺構とされる。この衝撃が四十二浦の神社群を訪れる際もついて回るのである。



図4 神魂神社

3. プロジェクト再起動

このような盛りだくさんの視点を持ち、手元に大量の資料が埋もれたままとなっていたこのプロジェクトであるが、今年度一人の学生からの強い希望を発端に、研究室を挙げて現地へ赴くこととなった。また同じ時期に堀川洋子先生から奥出雲地方での食等に注目した研究が始められるなど、プロジェクトは再起動といえる状況となっている。



図5 四十二浦の第21番片句浦の八幡宮前で

斐伊川流域のテリトリー オ 出雲～奥出雲～松江をめぐる

Territory of the Hii River Basin
Traveling to Izumo, Okuizumo and Matsue

堀川 洋子*
Yoko HORIKAWA

キーワード：流域、テリトリー、斐伊川、松江、出雲、奥出雲、棚田、仁多米、不昧公、茶の湯、自治

1. はじめに

テリトリーとは、木村によると「1)地理的境界、2)気候・風土・地勢、3)歴史、4)伝統・文化、5)人の手で構成される」¹⁾と定義される。

陣内によると「都市と周辺の田園や農村が密接に繋がり、支え合って共通の経済・文化のアイデンティティを持ち、個性を発揮してきたそのまともまり」²⁾をいう。

筆者は、2024年1月14日～17日にかけて、斐伊川流域のテリトリーをもとめて、出雲～奥出雲～松江をめぐる。旅のような調査行程のきっかけは、法政大学エコ地域デザイン研究センターから「斐伊川・島根半島地域における水辺まちづくりの可能性」についての原稿を依頼されたことにある。斐伊川は、その源を島根県仁多郡奥出雲町の船通山（標高1,143m）に発し、起伏が穏やかな中国山地を下って、下流に広がる出雲平野を東に貫流し、宍道湖、大橋川、中海、境水道を経て日本海に注ぐ一級河川である。つねづね流域の視点から研究をおこなっている筆者は「斐伊川の水辺」ときくと、同時に、その上流域に意識がいく。島根県は面積の約90%が中山間地域であり³⁾、斐伊川の上流域には棚田が広がっている。松江市は日本有数の水辺都市であり、寿司、蛸井、鰻料理など、お米と水の幸を組み合わせた名物料理も多い。新鮮な魚介類に目がいきがちであるが、それらの味をひきたてるお米も大切といえよう。

松江は斐伊川流域に属することから、筆者は高見センター長に相談した上で、松江の水産物と斐伊川上流域の棚田米とのコラボレーションを探すフィールド調査を行うことにした。

2. 出雲大社への参拝（出雲市）

まず、どこの棚田米を調査対象にすべきかについて、島根県庁に問い合わせをおこなった。東の横綱といわれる魚沼産コシヒカリに対し、西の横綱といわれる奥出雲産コシヒカリ（奥出雲仁多米）を産出する棚田群を推薦された。奥出雲町役場の担当者をご紹介いただき、そこから、仁多米の全国販売を行っている奥出雲仁多米株式会社をご紹介いただいた。同社は、仁多米のブランド化戦略のため奥出雲町が全額出資。奥出雲町長が社長をつとめている。

早速、同社に電話連絡をとり、年明けの1月16日にうかがうことになった。

筆者にとっては初めての島根来訪である。感覚的ではあるが、奥出雲に入る前に、出雲大社を参拝してから上流に向かった方が良いように思えた。筆者の住む関東からの移動は高速バスを利用するので、日帰り温泉で身を清めてから出雲大社に向かうことにした。14日の夜に東京駅を出発。15日の朝にJR出雲市駅前に到着。駅前の日帰り温泉は午前中のためか、それほど混んではいなかった。露天風呂で出会った陽気な地元の女性と会話がはずんだ。40～50歳代くらいだろうか。出雲市で仁多米を使った料理店があるかどうかを尋ねたところ、高級寿司店で仁多米を使用しているという。とても親切な女性で、出雲大社に行くには駅前からでているバスを使うと便利だと教えてくれた。

出雲大社境内は、初詣シーズンが過ぎたためか、適度な混み具合であった。拝殿と本殿および本殿を囲む摂末社を廻って「仕事が上手くいきますように」と祈願した。本殿の神様は大黒様として慕

われている大国主大神である。出雲大社では旧暦10月10日から17日にかけて全国から神々をお迎えして、神迎神事、神在祭などが執り行われる。神在祭前夜の旧暦10月10日に国譲りの伝承地・稲佐の浜で神々をお迎えする神迎神事が行われる。神々は出雲大社へのご神幸され、翌日から出雲大社において神在祭が行われる。出雲大社境内には神在祭の間、集われた全国各地の神々の宿所となる十九社（東・西）が建立されている。

3. 奥出雲の釜揚げそば・仁多米の塩むすび・横田の生ゆば（奥出雲町）

1月15日の19時30分過ぎ、出雲三成駅に到着。斐伊川をわたり、駅から徒歩3分の宿泊施設・奥出雲サイクリングターミナルに向かう。朝食はお米マイスター監修の釜戸炊き仁多米を食べることができる。

仁多米のおいしさの秘密は4つある⁴⁾。一つ目は、昔ながらの棚田と土づくりである。仁多郡内には全国棚田百景に選ばれた棚田が複数ある。仁多牛（ブランド名は「奥出雲牛」）の飼育で得た完熟堆肥による土づくりが行われている。稲作と和牛飼育を柱にして、豊富な森林資源を活用した環境にやさしい循環型農業を推進している。

二つ目は、昼夜の温度差である。稲は、昼間に光合成でデンプンをつくり、夜間にそれを穂に蓄える。夜の気温が高いと蓄えられたデンプンが消費される。仁多郡内の水田は標高300~500mに位置するため、稲の登熟期（穂に実の入る時期）に昼の気温が高く夜の気温が低い。それゆえ、お米の旨味が凝縮されている。

三つ目は、ミネラル豊富な水である。仁多郡は面積の約9割を占める豊富な森林に覆われ、雪解けの花崗岩から湧き出るミネラル豊富な岩清水が仁多米を育てている。

四つ目は、粳のままの低温貯蔵と出荷直前の精米である。圃場で刈り取った稲は仁多郡カントリーエレベーターで、粳のまま15度以下で低温貯蔵される。出荷直前に精米するため新鮮である。なお、カントリーエレベーターの容量の関係で、そ

の年に収穫されたお米はすべて次の収穫までに完売される。

16日の午前9時、奥出雲仁多米株式会社のU氏と合流し、仁多郡カントリーエレベーター、仁多堆肥センター、2箇所棚田を案内いただいた(図1, 図2, 図3)。棚田にはうっすらと雪が積もっていた。山の雪解け水が春の田畑を潤すことになる。図3の写真は、この地域特有の「鉄穴残丘」(後述)である。



図1 奥出雲の棚田と山並み（2024年1月）



図2 奥出雲の棚田と稲わら（2024年1月）



図3 鉄穴残丘（2024年1月）

古代の『出雲國風土記』（733年編纂）には奥出雲町の地名である「仁多」「横田」の由来が記されており、仁多は「田好し」、「横田」は「形いささか良し」と評されている⁵⁾。

奥出雲の農地の形成には、約1700年前から続けられてきた「たたら製鉄」が大きな役割を果たしている。「たたら製鉄」とは砂鉄と木炭を燃焼させて鉄をつくりだす日本古来の製鉄法であり、日本刀の素材となる玉鋼はこの製鉄法でつくられる。日本で唯一現役稼働しているのが、奥出雲の「日刀保たたら」である。

中国山地では宝暦年間（1751～1764年）から山肌を削り大量の土砂を溪流に流して砂鉄を採取する「鉄穴流し」が導入されたが、その跡地には農用地がつけられた。炭を焼くために大規模に伐採された山林は、永続的に炭焼きができるように約30年周期の輪伐を繰り返し循環利用された。

現地を訪れると、「鉄穴流し」を行う際に削らずに残された、こぶのような「鉄穴残丘」が点在している（図3）。「鉄穴残丘」は、通説では墓地やご神木などが所在したため残された。一方で、『古事記』（712年編纂）によると、斐伊川上流の奥出雲の地は、スサノオノミコトが姉のアマテラスオオミカミの逆鱗にふれて、高天原から追放されたときに天降った地とされる。地元には、スサノオノミコトが降り立った神聖な場所であるがため「鉄穴流し」ですべての山を削りとることができず、一部を「鉄穴残丘」のような形で残したといういわれがのこっている。

昼食は、電車の待ち時間の関係で、奥出雲の蕎麦屋でU氏とご一緒することになった。釜揚げそば・仁多米の塩むすび・生ゆばを注文。いずれも絶品であった。

そばは国産玄そばを使用、石臼挽き・手打ちであった。出雲そばは、江戸時代初期に、松江藩主松平直政公が信州松本から松江へ転封する際に、蕎麦職人を連れてきて蕎麦切りの技術を出雲地方へ持ち込んだことが発祥と言われている。釜揚げそばは出雲そばの食べ方の一つであり、神在祭を起源とする。神在祭では出雲大社をはじめとした神

社周辺で屋台が並び、温かい釜揚げで新そばが振る舞われていた。ゆでたそばは水洗いするのが一般的だが、屋台売りのため水洗いは省かれて、鍋や釜から揚げたそばをそのまま器に盛り、とろみのついたそば湯と薬味をかけて提供された。

仁多米の塩むすびは店主のこだわりで胚芽米であった。

生ゆばは奥出雲町内の豆腐屋で職人によって手作りされている。お店は1934年創業。国産大豆と天然にがりを使用し、敷地内の地下60mから汲み上げた地下水を使用している。非常にやわらかい。

出雲の神々や風土・気候・地勢を感じながら、奥出雲の大地の恵みをいただく。地元の農産物を地元で食する。地元の職人による手作りの加工品や料理。これこそテリトリーオのだいご味であると改めて考えさせられた。

4. 「復刻若草」と不味流の茶の湯文化（松江市）

15時30分過ぎに、松江駅に到着する。日が落ちぬうちにと急いで宍道湖に向かう。徒歩13分で宍道湖沿岸の白潟公園に到着（図4）。

松江駅に戻る途中で、菅原道真公を祀る白潟天満宮に寄る。境内にあるたこ焼き屋で松江名物の「天神さんのたこ焼き」を購入。神社周辺のベンチでいただく。

松江駅では仁多米を使った土産を探す。仁多地方で採れる最良のもち米を使用した和菓子「復刻若草」を見つける。「若草」は、春の野山に萌える若草を表現している和菓子である。松江藩七代藩主松平治郷公（号を不味と称す）が命名した。



図4 白潟公園と宍道湖の水辺（2024年1月）

不味公の松平家は、徳川家康の次男・結城秀康の血を引く家系である。不味公は産業や治水林産などに力を尽くした藩中興の名君と評される。茶道不味流の始祖としても名高い。「若草」は不味公の茶事の記録『茶事十二ヶ月』に春の茶席に用いられたとの記録がある。「復刻若草」は不味公没後二百年祭(2018年)を記念し、不味公の御用座「面高屋」に伝わるヨモギを用いた製法記述に基づき、江戸後期の製法で復刻された。

「復刻若草」は緑の衣に天然の島根県産ヨモギを用いている。老舗和菓子店の彩雲堂が島根県産業技術センターに、島根県産ヨモギ由来の天然の着色を使用したいと相談。センターはヨモギの粉末化について、効率よく、低コストで、どこの現場でもできることを目標に条件検討するとともに、和菓子に使用した際の香りや粒度の分析を行って、江戸後期の「若草」復刻に貢献した⁶⁾。

松江市は京都、金沢市とならぶ日本三大和菓子処といわれ、その礎を築いたのが不味公であった。松江市では不味公200年祭を契機に生まれた官民一体の気運をさらに高め、様々な取り組みを継続することで、茶の湯の文化と産業を守り、育み、将来へ発展的につなげていくため「松江市茶の湯条例」を制定した(2019年4月1日より施行)。

不味公好みの松江三大銘菓に「若草」「菜種の里」「山川」がある。前述した「若草」はヨモギなどの春の新芽を表す。ヨモギは医療用・食用などに用いられる万能の野草である。「菜種の里」は春の菜畑を蝶が飛びかう様を表現している。菜種からは油が採れる。蝶は菜花の受粉を助ける。「若草」と「菜種の里」から、不味公の有用植物への賛美がうかがえる。

「山川」は紅白一対になっている打ち菓子である。＜淡い紅色＞で紅葉の山を、＜白色＞で澄んだ川の水を表している。秋に紅葉する落葉広葉樹は、豊かな川の流れを育む水源林とも捉えられる。川の水が澄んでいるということは不要な土砂流出などがなく、治山がうまくいっていることを意味する。不味公の治山治水への姿勢を感じ取れる。

不味公は不味公好みの茶室や茶道具を職人に作

らせたことでも知られる。松江市内に現存する不味公と縁がある茶室等について、現時点で1件の書院と5件の茶室を確認できた。「高真殿」「観月庵」「大円庵」「菅田庵」「明々庵」「独楽庵」である。「観月庵」では、不味公が松江城から堀川を船に乗って訪れ、茶事を楽しんだといわれている。

茶の湯には水が不可欠であるが、松江市内には古くから利用されている湧水が少なくない。環境省と島根県のホームページには、島根県の代表的な松江市内の湧水が9箇所掲載されている^{7),8)}。

松江藩主の菩提寺である月照寺の入口右手にある「茶の湯の水」は、不味公をはじめ多くの人々の茶の湯に愛用されている。湯水時でも涸れることがない。

松江市の湧水は斐伊川流域の水循環の地表へのあらわれである。奥出雲の水源地への雨水の一滴が巡り巡って松江の湧水の一滴となる。茶の湯の参加者は、不味流茶の湯を通じて、斐伊川流域の水循環の一端や大地の恵みと結びつくといえる。

5. 松江藩におけるテリトリー戦略の考察

石牟礼道子は最晩年に、自身の作品『春の城』で、天草・島原の乱はもともと天草・島原にあった地場の文化と江戸の文化との相克(対立構造)を描いていることを示唆している⁹⁾。斐伊川流域においても、奥出雲のたたら製鉄に「鉄穴流し」が取り入れられた近世に、古代から営まれる出雲の地場的なテリトリーと江戸的なテリトリーが出会った。しかし、奥出雲では天草・島原の乱にみられたような衝突は起こっていない。

松江藩では、「鉄師御三家」と呼ばれる田部家、櫻井家、絲原家が藩に任じられてたたら製鉄を取り仕切っていた。製鉄は江戸幕府にとって非常に重要な産業である。徳川家康の孫である松平長政公を初代とする雲州松平家が、1638年に信州・松本藩から松江藩に転封になり、幕末に至るまで藩主を務めた。松江藩は、たたら製鉄の地元責任者に、代々の地元の実力者を任命した。中央からの派遣ではなく、地元の自治を尊重したことが松江藩による製鉄業の持続的統治を成功させたと考え

られる。

「鉄穴流し」ではもとの土地のすべてが砂鉄の採取で削られたわけではなく、一部は「鉄穴残丘」のように地区の共有地のようなかたちで存続を許された。「鉄穴残丘」には本来の豊かな植生や生態系がのこされたであろう。その存在は、荒涼とした跡地に対する地域の人々の静かな抗議ととれる。地域の人々の想いを背景に、鉄師らが中心となって跡地にはそばが植えられ、棚田がつけられた。砂鉄を採取するために引かれた水路も農業用水路としてそのまま使われた。

「棚田百景」にも選ばれた「大原新田」は、鉄師絲原家が開拓したことで知られている¹⁰⁾。

櫻井家は戦国の武将塙団右衛門の末裔であり、1644年頃に奥出雲に移り住み、たたら製鉄を開始。屋号を「可部屋」と呼び“菊一印”の銘鉄を創り出した。「菊一」は、日本最高の鉄砲鍛冶集団である「国友」の年寄脇国友一貫斎藤兵衛から最も良い鉄砲地鉄として認められ、櫻井家は松江藩より「御鉄砲地鉄鍛方」を命ぜられた。やがて5代利吉は「鉄師頭取」の要職を拝命した。山の管理にも熱心で、家の南側を流れる川を挟んで見られる紅葉は、5代の室が京都から輿入れの際に持ってきて植えたものと伝わる¹¹⁾。

櫻井家は歴代の藩主の藩内巡視の折には本陣宿となった。1803(享和3)年、不味公は53歳の頃、紅葉狩りをおこなうため櫻井家に立ち寄った¹²⁾。不味公を櫻井家にお迎えした6代苗清は茶の湯を松江藩家老有澤弑善に学び、明々庵を通じて不味公から“常足庵”の席名を賜った茶人であった¹³⁾。櫻井家では数年をかけて御成座敷を増築し、滝のある庭を造り、様々な調度を整え準備した。不味公は櫻井家の佇まいや周囲の景観を喜ばれ、流れる滝に「岩浪」、借景となる山に「寿宝山」の名を与えた。

不味公好みの和菓子「山川」が示す通り、不味公は格別に紅葉の山と澄んだ流水を好む。その景観は持続的な山の管理を必要とする。不味公が櫻井家に求めたものは、「鉄穴流し」で荒れた山や跡地をより美しく再生させた姿であったと考えられ、

6代苗清は不味公の期待に見事に応えたと言える。

不味公は、奥出雲巡視の目的を、砂鉄の採取や製鉄の現場視察ではなく「紅葉狩り」と言いながら、管理された水源林を確認している。季節は秋であり、不味公の好物の新そばや新米の季節でもある。地域が「鉄穴流し」やたたら製鉄で負の影響を受けていないか、土地が再生されているかなどを確認するための巡視ともとらえられる。

武力ではなく、茶の湯という江戸文化を通じて地域の統治をおこなう。不味流の茶の湯には不味公の平和的で持続的な地域対応への強い意志が感じられる。近世における地域を尊ぶ卓越したテリトリー戦略であるといえる。

6. 結論

本稿では、松江市の水の幸と斐伊川上流の棚田米のコラボレーションをもとめて、出雲～奥出雲～松江をめぐった。以下、テリトリーの観点からみた出雲、水の都・松江、奥出雲の関係についてまとめる。

①フィールドワーク前に想定していた水の幸と斐伊川上流の棚田米とのコラボレーションは、出雲市における地域の方との会話から、仁多米を使った高級寿司店について聞き取りを行うことができた。高級寿司はハレの日や特別な日に食されることが多いが、仁多米というブランド米がそのようなシーンにふさわしいお米であると地域に認知されている証といえる。今後は、松江市でも同様な事例がないか確認していきたい。

②奥出雲町では、出雲の神在祭を起源とする釜揚げそばと出会った。江戸時代に出雲大社やその周辺の祭りのにぎわいから生まれた食文化(釜揚げそば)が斐伊川上流の奥出雲で取り入れられて、斐伊川流域の水を使用した棚田米(仁多米)や新鮮な生ゆばと一緒に供された事例とみなせる。斐伊川の源流がある船通山はササノオノミコトが降り立った地とされる。神在祭から発祥した釜揚げそばが奥出雲の棚田米や加工品と組み合わせることで、出雲神話や出雲の神々を共通認識とするテリトリーの存在がより強く意識された。

③奥出雲の棚田には「鉄穴残丘」が点在し、秋に紅葉し春に雪解け水を供給する山々が棚田の周りを囲んでいた。親藩の松江藩は、地元の有力者に製鉄業を取り仕切らせて、地域の自治を尊重した。鉄師らは砂鉄採取の跡地にそばを植え、棚田をつくった。山には落葉広葉樹を植林した。「古代の出雲の神々を信奉する地場的なテリトリー」を尊重しながら、武力ではなく、茶の湯や紅葉狩りなどの文化を通じて友好的な統治を行う江戸幕府や松江藩の巧みなテリトリー戦略を見出すことができた。

④松江市では、松江駅の土産店で、仁多地方のもち米を使用した不昧公好みの和菓子「復刻若草」を得た。不昧公好みの三大銘菓（「若草」、「菜種の里」、「山川」）のモチーフは人の生活や生命に欠かせない有用植物や自然であり、不昧公が考える人と自然の関係の在り方を感じ取ることができた。不昧公は松江城下に茶室を設置させて、松江城から茶室まで船で往来することもあった。茶の湯には名水が欠かせないが、松江城下には今でも茶の湯に使う名水が湧き出ている。茶の湯の参加者は、不昧流の茶の湯を通じて、斐伊川流域の水循環の一端や大地の恵みに対する一期一会の認識を共有することになる。

この「一期一会の共通認識」の積み重ねこそがテリトリーの形成にとって重要であると考えられる。

7. 今後に向けて

今後は、松江の茶の湯と湧水の関係、不昧公好みの和菓子、不昧公が進めた産業・地域振興や治山治水などについて考察をおこない、水の都・松江や斐伊川流域全体における「斐伊川流域のテリトリー」を明らかにしていく。

「古代の出雲の神々を信奉する地場的なテリトリー」と「江戸時代に松江藩がもたらした江戸的なテリトリー」が、不昧流茶の湯などの江戸文化を媒体として友好的に融合し、共存共栄しながら現代に至る「斐伊川流域のテリトリー」の形成過程を明らかにして、今後の水辺まちづくりや持続的な流域管理に向けて貢献していきたい。

謝辞

島根県農林水産部、奥出雲町役場、奥出雲仁多米株式会社の皆様には、島根県の棚田と仁多米について貴重なご教示とご支援を賜りました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 木村純子：序章、イタリアのテリトリー戦略（木村純子・陣内秀信編著）、白桃書房、p.4、2022
- 2) 同上
- 3) 島根県：島根県中山間地域活性化計画 令和2年度(2020)－令和6年度(2024)、p.3、2020
- 4) 奥出雲仁多米株式会社：出雲國 仁多米とは、<https://www.nitamai.com/>
- 5) 奥出雲仁多米株式会社提供資料
- 6) 島根県産業技術センター：島根県素材を使用した『復刻 若草』の技術支援について、<https://www.shimane-iit.jp/research/s-case/610>
- 7) 環境省：島根県の代表的な湧水、<https://www.env.go.jp/water/yusui/result/sub4-2/PRE32-4-2.html>
- 8) 島根県：島根の名水、<https://www.pref.shimane.lg.jp/infra/kankyo/kankyo/mizu/meisui/>
- 9) 石牟礼道子（話し手）・鈴木一策（聞き手）・藤原良雄（司会）：石牟礼道子との最晩年の対話、ヨモギ文化をめぐる旅（鈴木一策著）、藤原書店、pp.131-172、2023
- 10) 奥出雲町公式観光ガイド：奥出雲町の物語 食、<https://okuizumo.org/jp/story/cuisine/>
- 11) 公益財団法人可部屋集成館：櫻井家住宅 日本庭園の概要、http://kabeya-syuseikan.com/top/s_gaiyou/
- 12) しまねの美術館・博物館デジタルアーカイブ：茶人松平不昧の世界 不昧の訪れた出雲路、<https://shimane-mkyo.com/vol01/s05>
- 13) 公益財団法人可部屋集成館：秋季展 奥絵師狩野派～紅葉を愛でる が始まりました、<http://kabeya-syuseikan.com/exhibition/2023/2690/>

法政大学デザイン工学部兼任講師*

町内の視点からアプローチする佐原の地域構造とテリトリーオ －佐原域学連携プロジェクト 2023

Community structure and Territories of Sawara approaching from a neighborhood perspective

Cooperation Project with the Sawara area in 2023

小島 聡*

Satoshi Kojima

キーワード： 地域構造、テリトリーオ、町内、アーバンとルーラルの対と融
社会空間、地域循環圏

1. 2023 年度の取り組み

2023 年度は諸事情により、2023 年 3 月に行った第 4 回研究会以外の取り組みを進めることができなかった。研究会では、福井研究室の志村遙菜さん（修士課程 2 年）が「近世以降の佐原における地域構造の形成」について報告した。

前年度の三木歩嵩さん（福井研究室 4 年）による研究は近世以前からのテリトリーオの形成を扱い、その総体とともに、下部構造である地域の長期的な環境変動を描いた。それに対して志村報告は、テリトリーオの上部構造といえる「町内」の近世から近代にかけての形成と自治機能の推移について取り上げた。あえてテリトリーオに代えて「地域構造」という概念を利用したが、そのことが結果的に、後半の討論において、「町内」という狭域のコミュニティからテリトリーオを考えることにつながり、またヨーロッパ（特に南欧）の都市の近隣自治との比較で佐原の「町内」をとらえるという視点も導き出すことになった。

2. 地域構造・テリトリーオと佐原の「町内」自治

① 研究報告

志村報告では、まずテリトリーオに代えて「地域構造」（「地域の環境に支えられ、人口や社会、経済や交通、水利や産業など、さまざまな要素や活動の相互関係性とそれらの空間配置によって形成される」という、地理学を始めとする学問分野で使われてきた概念について説明し、既存研究を例示した。「地域構造」という概念を利用することで、既存研究のストックから、テリトリーオを照射することが可能ではないかと考えたからであるとい

う。その上で志村報告では、佐原の地域構造を「政治（統治・行政、住民自治）」「社会基盤整備」「治水整備」「産業」「祭礼・信仰」の項目に区分し、16 世紀末から 2010 年代まで時系列的にそれぞれのトピックをプロットして俯瞰した結果について説明した。特に、報告の後半で詳細に分析する「町内」に関連して、18 世紀半ばから 19 世紀半ばにかけて、町場が成長し商業が発展、信仰文化が登場し、その後、近代に入り、現代に至る町の骨格が形成され、他方で水運の衰退が始まったとしている。後半では、「町内」（世帯ごとに所属し住民自治を行う組織）について、まずその役割を細かく抽出して体系図にまとめ、「社会基盤整備」「治水整備」「祭礼・信仰」「産業」という 4 つの機能に分類し、それらの推移に基づいて「町内」の多面的な機能を確認している。

さらに社会基盤整備や治水整備の機能が 1950 年代以降、行政サービスに移り（産業や祭礼・信仰の機能は現代まで持続）、「町内」の機能の縮小によって地縁的なつながりが希薄化したという仮説を提示した上で、担いする役割の復活による地縁的なつながりの回復と地域の持続可能性へ寄与を提唱している。

② 討論

志村報告をふまえた討論では、まず町内に農家が居住していたことから、「地域構造」という概念の定義ではとらえ切れない、テリトリーオの水平的構造としての広がりが話題になった。志村さんの補足説明によると、近世は小野川周辺に町場が限られ（「町内」の成長とともに細分化され数が増加）、その周辺の農村も大祭には山車を出しているよう

に、佐原村の範囲には中心の町場空間と周辺の農村空間が存在し、その外に大祭に山車を出してない農村が広がっていたという。したがって、佐原は行政区分では在方町という農村でありながら近世自治市としてのイメージが重なる地域であるが、佐原村の範囲には小野川周辺部の町場空間と農村空間、さらにその外に農村空間が広がる三層の地帯構造をなしており、そのうち佐原村の二層に大祭文化圏が成立していたといえるのだろう。そして、これらのことから、あらためてテリトリーオの概念上の特性は、「地域構造」と重なる、地域環境を基盤とする人間活動の総体と空間配置という垂直的構造と、行政区分を越えることもある都市－農村の関係性という水平的構造の2つの軸にあることが浮かび上がってきた。

その後、比較都市史へと議論は展開し、陣内特任教授から、ウェーバーが描いた北欧型の中世都市は商工業者層の自治へと純化していくが、南欧のイタリアでは、封建的要素が残り、城壁があっても市内の有力者や修道院などが、外側に農園を持ち、また農民も内側に住み、フィジカルには分離されていてもつながっていたという説明があった。エコ研の2022年度報告会の主題であった「アーバンとルーラルの対と融」という表現が当てはまる構造の共通性から考えると、南欧の中世都市は、佐原の特性を考える上で有効な示唆を与えてくれるのかもしれない。

次に佐原アカデミアの関谷教授から、「町内」の多面的な機能はそれぞれが独立したものではなく、相互に交差していること（例：祭と商業振興の密接不可分性）、また「町内」は自己完結的な範囲ではなく、様々なものが混じり合う媒介項のような存在として個性が生まれ、他の「町内」とは連携・協調と対抗の緊張関係で結ばれるダイナミズムによって佐原の自治がつくられていた、したがってコミュニティは閉じていなかったという指摘があった。

関谷教授からは、「町内」は均質的なものではなく、案件によっては町内間のつながりも可変的であったとの指摘もあり、そうであるならば、佐原の「町内」は、多面的機能の連関によって自治を構

成し、また「領域の相対性」を特徴とする共同体であったと考えられる。さらに、第1回の研究会で関谷教授が指摘した「社会空間」という言葉を援用すれば、佐原には、1) 町内、2) 町内間、3) 佐原村という多層的な社会空間が形成され、それらの社会空間に対する意識も多層的なものであったという仮説が浮かび上がってくるだろう（例：大祭をめぐる意識の多層性や「江戸優り」というシビックプライドの共有範囲）。

討論の後半では、「町内」と比較しうるイスラム都市を含む中世都市内部の基層の単位（ハーラ、マルーラ、バリッシュ）、聖と俗の二重の役割、中間集団（ギルド）、中世の分散構造に対する近世の集権構造、中世市民の自治の精神のベースなどに議論は及んだ。このような西欧都市史からの視座は、第4回研究会の貴重な成果であったが、他方で、日本の近世地域自治史における佐原の特性の確認も、避けては通れない検討課題といえる。

最後に、行政による「町内」機能の「回収」時期の再検証、残り続けた機能への着目と機能回復の可能性の検討が、今後の課題として確認された。また、米・木材・石などに関する佐原テリトリーオのネットワークの解明についても、陣内特任教授から指摘があった（佐原アカデミアによると、米や木材などの資源は近隣から調達したという。したがって、近世において、いわゆる「地域循環圏」が形成されていたといえる。）。

3. 2024年度について

第4回研究会では佐原の「町内」から、今後の自治の展望まで視野が拡大した。佐原アカデミアが、佐原の地域再生のキーパーソンである小森孝一氏の回顧録を出版したため、これをテキストとして、近世から近代にかけて継承されてきた佐原の自治を、現代史を通して再評価する研究会の開催について今後、検討することになるだろう。

法政大学人間環境学部教授*

江戸東京周辺プロジェクト

Research project on the territory around Edo-Tokyo

根崎 光男 馬場 憲一
Mitsuo Nesaki, Kenichi Baba

メンバー：根崎光男、馬場憲一

キーワード：生業、環境、テリトリー

1. はじめに

この1年間、「江戸東京周辺プロジェクト」では、主として日本近世史を専攻するメンバーの2人が、江戸東京周辺地域を東と西に分けて調査した。この江戸東京周辺の「テリトリー」を政治・経済・文化・宗教・生業・流通などの視点から検討し、両者間の結びつきやそれに伴う地域的偏差を究明し、その特質を探ってきた。

近世日本において、江戸が天下の総城下町となり、その周辺地域は江戸城の防衛や生活などを支える領域として展開してきた。そして、近代になり、江戸が東京と改められ、天皇が東京に遷都し、東京は日本の首都となった。

その結果、東京は首都機能を整備し、行政・立法・司法・金融・軍事の主要な施設が位置づき、また商業・工業などの本社が集中するようになった。一方、その周辺地域は鉄道や道路網の整備によって東京で働く人々のベッドタウンとなり、また農村ではその生鮮食料品の主たる供給源となって近郊農業が展開していった。

2. 江戸東京周辺東部地域の二面性

このプロジェクトでは、江戸東京周辺地域を東部と西部に分けて分担し、大まかにいえば、東部は東京23区の区部、西部は武蔵野・多摩地域を対象として検討してみることにした。

たとえば、江戸周辺の東部地域は、江戸の後背地として江戸の都市住民の野菜や魚介などの生鮮食料品供給地帯であった。しかし一方で、江戸と周辺農村は、「江戸十里四方」あるいは「江戸五里四方」と呼ばれる一体的な領域としても把握されていた。

まず、前者の江戸と周辺農村の密接なかかわりを示すものとして、物質の循環という視点から江戸周辺農村の近郊農業に伴う穀物・野菜栽培と江戸への出荷、これらを食料として需要した江戸の町がその排泄物を周辺農村の下肥として搬出していた諸関係を検討した。

近世前期、江戸の糞尿は廃棄物であったが、近世中期以降、その糞尿が商品化すると、江戸周辺農民ばかりでなく、江戸町人のなかにもこの生業に参入する者たちが現れた。近郊農業の発達により、江戸の下肥の需要が高まると、下肥値段は高騰していった。寛政期に入ると、江戸周辺の1,021カ村は団結して、町奉行所に下肥値下げを提訴し、そのための運動を展開した。町奉行所は江戸町人による江戸の武家屋敷・町屋敷での下掃除を禁止した。しかし、下肥値段の引下げに協力していくものの、値段は下がらなかった。この時期、下肥を求めて、江戸の町では江戸周辺農民や町人らによって公衆トイレが数多く設置されるようになった。

3. 「江戸十里四方」＝都市と農村の一体化

江戸幕府は、江戸と周辺農村を切り離れた支配のほかに、都市と周辺農村を一体化させた「江戸十里四方」地域による支配も必然化した。江戸の支配も複雑化し、周辺農村をも巻き込んだ支配のありようを模索していた。

たとえば、元禄時代の「生類憐みの令」との関連で、鳶や烏の駆除としてその巢払いが命じられるようになり、その領域は「江戸十里四方」であり、その範囲は「江戸近辺五里之内」であった。また同時期に鷹場が廃止されたが、その地は「御留場」

と呼ばれる禁猟区となり、この領域も「江戸十里四方」で、生類方の支配下にあった。

享保期、八代将軍徳川吉宗は鷹狩を復活させたが、将軍の鷹狩場は「御拳場」と称され、その範囲は「江戸五里四方」であった。一方、この時期、鉄砲の取締りのための領域は「江戸十里四方」となり、大目付兼帯の「江戸十里四方鉄砲改」によって管轄された。享保14年(1729)の鉄砲令ではその取締りが緩和され、その範囲は江戸日本橋より東西南北とも半径五里四方とされた。この地域では一切の鉄砲の所持と使用が禁止されたのである。

文久3年(1863)、幕府は鉄砲火薬製造の禁制場として「江戸并近在十里四方」を指定し、この地域における鉄砲火薬の製造を禁じた。

4. 江戸東京周辺西部地域の産業と商品流通

(1)問題関心

江戸時代の産業と商品流通の問題については、これまで経済的発展史観という中で論じられてきた。それら視点はマクロ的な考察を中心としたものであり、そこに暮らす生活者の存在などを加味し、よりミクロ的な検証によってそれら産業や商品流通の実態を地域の实情に即して社会史的手法を用いて分析することは、テリトリーオとしての特質を探っていく上で極めて有効な研究方法と考えている。その点を踏まえて今年度は基礎的な検証として以下の実態を明らかにした。

(2)西部地域の産業と産品

江戸近郊の農業をみていくと、豊島郡の大根・ナス、多摩郡のワラビや甜瓜などの野菜栽培が盛んで、農業の間には武蔵野台地の国分寺村付近や多摩丘陵の黒川村周辺で薪炭業が営まれていた。江戸から10里以上離れた関東山地の山麓や山間部での産業は製糸や織物で八王子周辺や五日市・青梅周辺では絹織の生産が行われていた。同じく山間部の多摩川上流域では江戸前期に杉林植林が始まり江戸中期には青梅林業として杉・檜を生産していたが、青梅成木地方では北条氏旧臣が石灰生

産を開始し江戸の町や江戸城の建設資材として出荷していた。また多摩川支流の秋川上流域の檜原村の製炭業は江戸時代に入ると江戸での需要(金属加工用、茶道用、暖房用)が増大し、薪炭の商品化により自給的な畑や切畑までが製炭材を採る炭木林に転換していった。秋川中流域の伊奈村では信州伊那から平安時代末に石工が来住し伊奈石の採掘を始め江戸時代には石臼の需要が高く地場産業として発展していたが、同じ秋川中流域の五日市地方では和紙(軍道紙)の製造が行われ障子紙、製茶用焙炉の張紙、和傘の紙、戸籍簿用紙などとして五日市の和紙問屋に納入され地域の需要に応えていた。

(3)西部地域の街道と商品流通

江戸と多摩とを結ぶ街道は江戸を基点に甲州街道、青梅街道、五日市街道が開通しており、江戸と後背地とを結ぶ街道として発展し、前述の生産物や物資はそれらの街道を利用して流通していた。江戸後期に商品流通が盛んになるとその他の脇往還も物資の輸送に利用されてきていた。そのうち甲州街道の脇道であった佐野川往還は、甲斐からの煙草・茶葉・ブドウ・繭蚕糸・木綿・柏木皮などの輸送に用いられていた。八王子と横浜を結ぶ浜街道は、多摩地域で生産された生糸が幕末に重要な輸出品となるとその街道を通って開港された横浜に運ばれていた。また青梅で生産された木材の輸送は多摩川を利用し、立木生産者→筏師(杣・日傭・筏乗り)→木場特権商人という人々の手を経て江戸まで運ばれていた。

5. 今後に向けて

これまで、江戸東京周辺プロジェクトでは東西に分けて、それらの地域的特性を調査してきた。今後は、江戸東京周辺プロジェクトをとりあえず終了し、それぞれの地域が有する特徴を踏まえながら、個別に地域研究を継続して、発展させていきたいと考えている。

(文責：根崎光男・馬場憲一)

外濠市民塾

Sotobori School for Citizen Project

福井 恒明*

Tsuneaki FUKUI

メンバー： 陣内秀信*¹, 福井恒明*², 郷田桃代*³, 高道昌志*⁴, 小松妙子*⁵, 亀田和宏*⁶, 廣田幸司*⁶, 岩本尋*⁶

キーワード： 外濠、住民参画、企業市民、地域連携、ワークショップ、外濠再生憲章

1. はじめに

外濠市民塾は2023年度で12年目の活動を実施した。法政大・東京理科大・日大・東京都立大などの学生と教員、地元企業である大日本印刷の社員を主体とし、『外濠—江戸東京の水回廊—』の出版内容に関する勉強会からワークショップの開催を経て、外濠の将来像の提案を行い、東京都知事への提言（2019年9月）へと活動を展開した。しかし2020年に始まったコロナ禍で中断を余儀なくされ、オンラインでの情報共有やzoomによるセミナーを実施してきた。今年度は新型コロナウイルス感染症の5類移行により、対面イベントを再開する環境が整ってきたが、対面活動経験を持つ学生メンバーはすでに全員卒業しており、外濠に関する基礎的な知識やイベントノウハウ、近隣との関係性も継承できていないのが実情である。そのため、今年度は外濠市民塾の新たな体制による活動の試行と今後の活動計画の検討を行った。

2. 2023年度の活動概要

2023年度には8回の運営委員会を開催した。運営委員会は対面とオンラインの併用により実施し、各種活動の報告・関連する外部イベント等の情報共有・今後の活動に関する意見交換等を行っている。学生は3つのグループに分かれ、まちあるきチーム、Web運営チーム、水上利用チームとして活動した。

具体的な活動として、2回のまちあるきイベント、昨年度に不正侵入を受けて閉鎖中のウェブサイト再構築、外濠水上コンサート奏への支援を行

った。さらに2024年度の活動計画を議論し、準備を開始した。その皮切りとして水辺に関する活動実績のある菅原遼氏（日本大学助教）をお招きして勉強会を開催する予定である（2024年3月）。

3. まちあるき活動

外濠市民塾の学生メンバーは年に数回のイベントを通じて研究者や他大学の学生との関係を構築し、外濠に関する知識を継承してきた。しかしコロナ禍により現在のメンバーのほとんどは研究室の上級生から担当を引き継ぐ形で実質的な活動ができていなかった。この状態を打開するため、学生主体で外濠周辺のまちあるきを行い、外濠とその周辺の状況を観察し、事後に意見交換を行って知識の共有を図った。

第1回まちあるきは2023年8月19日に実施し、15名が参加した。対象地域は外濠の北西側であり、事前学習を踏まえて学生が自由に訪問先を決めて歩いた。終了後、法政大学新見附校舎に集合して写真の共有や振り返りを行い、外濠周辺



図1 第1回まちあるきの様子

で発見した地域の魅力などについて共有した。

第2回まちあるきは2023年12月17日に実施した。対象地域は飯田橋から秋葉原にかけての神田川周辺とした。今回は外濠周辺の企業が構成員である外濠水辺再生協議会からも参加者を募り、合計で20名弱が参加した。まちあるき終了後、過年度に作成した「おぼんカウンター」を使用して外濠公園で昼食をとり、法政大学市ヶ谷田町校舎で振り返りを行った。

4. ウェブサイト再構築

外濠市民塾の活動に関する情報発信のため開設していたウェブサイトは、2023年2月に不正侵入と改ざんを受けて現在休止している。以前のコンテンツが復元できない状態であり、2023年度中の再オープンを目指し、改めてコンテンツを収集して再構築を行う作業を進めている。なお、セキュリティ強化のため、アカウントの運用を見直すと共に法政大学総合情報センターの支援をうけている。

5. 外濠水上利用

牛込濠を利用した水上コンサート「奏」は、2007年以来、学生が中心となって外濠を舞台とした水辺利用の可能性を社会に発信してきた。外濠市民塾に参加する学生と「奏」の運営に携わる学生の多くは重なるものの、学生の主体性尊重と外濠の複雑な社会的位置づけから、「奏」は学生により構成される奏実行委員会による主催となっている。今年度の奏実行委員会は法政大・東京理科大・東京工業大・日本大・東京都立大学の11名の学生により構成されている。外濠市民塾は「奏」の趣旨に賛同し、必要な助言や広報などの支援を行った。

第13回水上コンサート「奏」は2023年9月5日にCANAL CAFEを会場として開催された。クロスオーバー研究会（慶應義塾大学）、UCHINOUE、二部モダンジャズ研究会（法政大

学）による演奏が行われ、外濠クイズ&アンケートも実施された。93名の来場者があり、年齢の内訳では20代35%、70代以上21%、40代17%と幅広い年齢層の来訪があった。アンケートでは好意的な評価が得られた。

外濠市民塾としては、事前の周知・広報について地域の商店会の窓口やキーパーソンを紹介するなど、学生と地域コミュニティとの接点を作った。地域の方々に「奏」の活動の存在や意義を知っていただき、外濠を舞台とした「奏」の活動を通じて学生と地域コミュニティが相互につながっていくための支援を行った。

6. 2024年度の活動計画

2024年度は、対面でのイベント開催をベースとした外濠市民塾のプラットフォーム機能を再構築し、プログラムを再活性化するための期間として位置づける。具体的な行事として、外濠や水辺に関する勉強会の対面開催、レクチャー・まちあるき・振り返りをセットにした外濠市民塾イベントの開催、将来像の提案や外濠を楽しむ活動の実践へと、段階的に活動規模を拡大していく。

外濠市民塾が2012年度末に活動を開始して以来、学生メンバーの卒業生も多いことから「外濠市民塾OB・OG会」を開催して人的ネットワークの強化を行う。

また年度ごとに活動を取りまとめ、展示やマップ、あるいは「外濠四季絵巻2036」の加筆などアウトプットを意識し、活動実績が目に見える形で蓄積されていく仕組みを目指す。

法政大学特任教授*1

法政大学デザイン工学部教授*2

東京理科大学工学部教授*3

東京都立大学都市環境学部助教*4

法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員*5

大日本印刷株式会社*5

橋詰空間等を活用するウォーカブル滞留空間創出の検討と運営実験

Walkable retention space creation project utilizing Hashizume Square

高見 公雄

Kimio TAKAMI

メンバー： 高見公雄，大沢昌玄，川添雄太，富田翔晴，丹治寛太

キーワード：

1. 事業の経緯

ウォーカブルまちづくりについては国が提唱していることもあり、全国約 300 の自治体が名乗りをあげ、半ば狂信的に検討され、各所で社会実験等が進められている。当事業についてもその一環であることは確かではあるものの、実は当研究にはやや長い経緯がある。現在（公財）都市づくりパブリックデザインセンターにおいて、「アーバンパブリックスペース研究会（UPS 研究会）」がおかれ、国土交通省をアドバイザーに迎えつつ、関係するコンサルタント会社等が集まって、ウォーカブルまちづくりの組織的な検討がなされている。当研究の代表研究者である高見は、この UPS 研究会の 3 つの部会の一つを任されている訳であるが、UPS 研究会には前身がある。これは（公社）日本都市計画学会認定社会連携組織「APS（Action for Public Space）推進会議」といい、この APS 推進会議には「千代田部会」が置かれ、主として日本橋川沿いの地域に着目して歩行者にとって快適なまちづくりを検討していた。当事業は同推進会議が提唱した整備のあり方を実践に移すために実施しているものである。

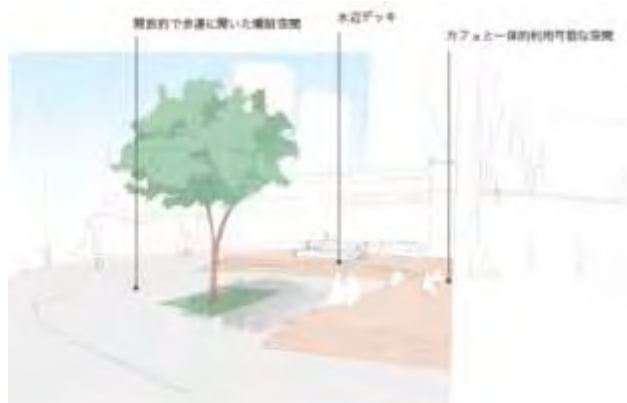


図 1 APS 推進会議時代の提案図（2017 年）

2. 事業の狙い

図に見られる通り千代田区の水辺橋～お茶の水～秋葉原から南側の地域については、広幅員歩道を持つ道路がネットワークされ、それらに囲まれるブロック内の細街路沿いに多様な都市機能が展開し、総じてウォーカブルなゾーンとなっているが、靖国通りを超え、日本橋川までのゾーンについては、靖国通り以北に比して、そういった傾向は弱い。千代田区ではそのような状況に対し区道である神田警察通りにおいてウォーカブル施策を展開中であるが、当事業はそれをさらに日本橋川沿いまで引っ張るために、日本橋川に係る橋の橋詰空間に着目してここに歩行者の滞留場所を創出しようとするものである。



図 2 日本橋川沿いに着目した地域の現状理解

3. 事業の現状

当初千代田区の企画段階では、対象地としていた錦橋左岸上流側広場は区道敷ではなく都管理空間であるため、この場所以外での展開に企画を変更するよう千代田区からの指示があり、日本橋川

のほぼ対岸少し上流側で丸紅ビルの建て替え時の社会貢献として広い幅員歩道が整備された場所を予定していた。しかしながら当事業を進める中でメンバーとして参加頂いている日本大学理工学部土木工学科の大沢教授を介して東京都第一建設局長とコンタクトをとることができた。所長との打ち合わせの中から少なくとも検討の対象とすることまでは了解をえられたため、当事業の対象地は元の企画通り日本橋川錦橋左岸上流側橋詰広場として、これまでに2つの事業を展開している。

一つは、実測図の作成である。3年生のゼミナールの授業の一環として大学院生の協力も得て10余人で現地をくまなく回り、現況平面図を作成した。



図3 錦橋左岸上流側橋詰の状況

もう一つは周辺の街に居る人にとって、この場が「居場所」となりうるかについての調査である。調査は2種類行い、一つは私たちの校舎である法政大学市ヶ谷田町校舎に出入りするまちづくり系の学生、専門家に対して、まちの中の居場所に求めることを聞いた。もう一つは現地に赴き、街行く人にこの場所の居場所としての期待、可能性について聞いた。

現地での調査の状況並びにその結果を図4,5に示す。現状において様々な樹種、大きさの樹木が雑然かつやや鬱蒼と茂っており、そのために街路の歩道にいと日本橋川の存在を感じにくいと捉え、2017年のAPS推進会議で作った整備案は思い切って樹木を減らし、解放的な広場とすることで川の空間との一体性創出を目指したが、地域の人々の意見ではオープンスペースは欲しいものの、

緑はあまり減らすべきではないとの意見が多かった。ここでも供給側と需要側の見方が必ずしも一致しない点が興味深く感じられた。



図4 該当インタビューの実施状況



図5 アンケート、インタビューの結果

4. 事業の今後

今年度は前記の二つの事業をとりまとめ千代田学の成果としていく予定である。その先は千代田学の枠組みを離れ、法政大学エコ地域デザイン研究センターの独自研究としつつ、既述の（公財）都市づくりパブリックデザインセンターによるAPS推進会議の枠組みと協力しつつ、社会実験さらには施設整備に向けた検討、調整等を行っていく予定である。

2 関連研究

(2022年度報告会 第1部)

Related Research

1. 市街地整備推進による自然・地形改変の経緯に関する研究

- 「水の郷日野」を中心に-

志村 綾音 (法政大学デザイン工学研究科 高見公雄研究室)

2. 近世以降の佐原における地域構造の形成

志村 遥奈 (法政大学デザイン工学研究科 福井恒明研究室)

3. 都市近郊型酪農と白牛酪

～江戸の乳製品から学ぶ持続可能な酪農～

櫻井 空斗 (法政大学経営学部 4年 木村純子研究室)

4. 銭湯から考える「まちの継ぎかた」

栗生 はるか (法政大学デザイン工学部 兼任講師/

エコ地域デザイン研究センター 客員研究員)

5. 隅田川かわてらす「ASAGE CAFE 浅草蔵前」

阿部 彰 (法政大学エコ地域デザイン研究センター 客員研究員)

※所属は 2023 年 3 月当時

市街地整備推進による自然・地形改変の経緯に関する研究

- 「水の郷日野」を中心に -

Details of Alterations of Nature and Topography by Urbanization: Focusing on “Water Town of Hino”

志村綾音

Ayane SHIMURA

メンバー：高見公雄*¹

キーワード：日野市、用水路、土地区画整理事業、地区計画

1. はじめに

これまでの東京首都圏の市街地整備は、高度経済成長期の急激な人口集中に対処するため、都心部から郊外部を中心に無秩序な開発が行われ、自然環境破壊が行われてきた。

多摩川と浅川の清流に恵まれた東京都日野市は、現在は首都圏の住宅都市であるが、かつては「多摩の米蔵」とも呼ばれる稲作の盛んな農村地域であった¹⁾。急増する人口の受け皿として、昭和30年代から日野市でも農地などの宅地化が進んだが、市は早くから計画的な市街化に取り組み、現在は市内の市街化区域面積の約44%が土地区画整理事業によって造られた市街地となっている²⁾。このような行政の対応や活発な市民活動により、日野市には現在も湧水や農業用水路が数多く残され、平成7年には国土交通省から「水の郷百選」に認定されている。しかし、市街化に伴い水路が統廃合・暗渠化され水辺の風景が消失した箇所も複数見られる。また、農地面積・農家数の減少により、今後も用水路を維持し続けることは容易ではない。

2. これまでのエコ研の活動と本研究の概要

エコ地域デザイン研究センターでは、2005年度から水辺都市として日野市に注目し活動してきた。高橋³⁾はDID面積とDID人口の変遷から日野市の低密度化を指摘したうえで、日野市の居住密度を市街地の拡散前の水準に戻した場合、居住地面積をどれだけ縮小することができ、樹林地や田畑をどれだけ回復させられるのか、市街地凝縮の大まかな試算を行った。宮下⁴⁾は日野市民の協力

のもと、用水路の水深・延長・構造情報を、GISを用いてデータベース化した。更に、浅川流域において、地理的重み付け回帰(GWR)を用いて、農地転用が発生しづらい農地安定地点の抽出を行った。日野プロジェクトでは、湧水や水車など水辺に関わるトピックから、養蚕施設や寺社、市民活動まで、様々な日野市の歴史や文化について活動を行ってきたが、日野市の複数の土地区画整理事業の比較や、地区計画のような下位計画についての研究はこれまで行われていない。

以上の背景を受けて、本研究では、首都圏郊外部(東京都区部を除く近郊整備地帯を目安とした範囲とする)の昭和3、40年代の災害記録を調査することで、首都圏の無秩序な開発により、本来どのような役割を持つべきであった場所が市街化してしまったのかを考察する。次に、日野市の市街化の経緯や、人口統計の分析、また、日野市の人口が急増し始めた昭和40年頃の日野市の都市計画を調査することで、首都圏人口の受け皿として、日野市が受けていた市街化圧力を明らかにする。更に、日野市の自然・地形の代表として、用水路網に着目する。文献調査と日野市職員へのヒアリング調査によって、日野市の水辺行政の変遷や、水路を取り巻く環境の変化について整理する。中でも、日野市の市街化に大きく関わっている土地区画整理事業と、細やかなまちづくりのための規制である地区計画に注目する。日野市の市街化が進む前の昭和30年代の水路図を作成し、市街化後である平成24年の水路図と水路の状態を比較しながら、事業計画や地区計画の内容を分析する。

3. 首都圏郊外部昭和 3, 40 年代災害記録の調査

東京圏では、昭和 30 年代に転入超過数がピークに達する。それに伴って首都圏郊外部では急激に宅地開発が進み、宅地造成地での盛土の崩壊が問題になった。特に、昭和 36 年の集中豪雨で発生した横浜市や神戸市の崖崩れは、昭和 36 年の『宅地造成等規制法』制定の背景となっている。本研究では、首都圏郊外部の『宅地造成等規制法』制定前である昭和 30 年代の崖崩れ発生地点を調査することで、本来宅地に相応しくなかった場所を明らかにすることを試みた。しかし、公開されている昭和 30 年代の崖崩れの発生地点記録を見つけることはできなかった。昭和 45 年の青山ら⁵⁾の論文内で、横浜市消防局が所持する昭和 36 年集中豪雨と昭和 41 年台風 4 号の際の災害資料を使用したという記述があったが、横浜市消防局と横浜市総務局危機管理部緊急対策課に問い合わせたところ、資料の存在は確認できなかった。今回見つかった条件の近い災害記録として、国土技術政策総合研究所では昭和 47 年から市町村単位でがけ崩れ災害の調査を行っていた。また、横浜市と川崎市では昭和 50 年から丁目単位でがけ崩れを含む災害記録が公開されている。

4. 日野市の市街化経緯

日野市は、農村と宿場町から、工業都市としての顔を経て、現在首都圏の住宅都市となっている都市である。慶長 10 年、甲州街道の宿場町として日野宿が設置される。当時の日野は「多摩の米蔵」とも呼ばれる農業中心の宿場町であった。明治 22 年に甲武鉄道（現 JR 中央線）が開業し、明治 23 年に日野駅、明治 34 年に豊田駅が開業する。これによって多摩地域と都心部が直結した。昭和 10 年頃から、豊かな水や自然を生かして大企業の誘致を始め、工業都市としての顔も持つようになる。1910 年（明治 43 年）から 2015 年（平成 27 年）までの日野市人口増加率（図 1）を見ると、この時に一度目のピークを迎えていることが分かる。

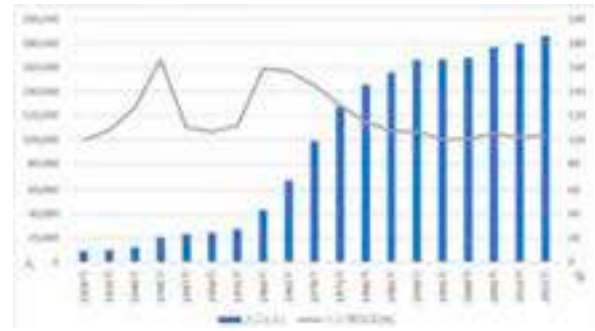


図 1 日野市総人口と人口増加率の推移⁶⁾

二度目の人口増加率ピーク時には、昭和 32 年に日本住宅公団により、日野市初の土地区画整理事業である豊田土地区画整理事業が行われ、大規模公団住宅である多摩平団地が造成される。これを転機に、日野市各所で集団住宅が開発されるようになる。昭和 34 年には市街地開発区域に指定され、JR 中央線で新宿まで 30 分という利便性もあって、都心への急激な人口集中の受け皿として、農地の宅地転用が進んだ。市街化初期の昭和 33 年から昭和 42 年の土地利用の変遷（図 2）を見ると、田・畑・山林の割合が減少し、宅地の割合が増加していることが分かる。



図 2 市街化初期の土地利用の変遷⁷⁾

5. 水路と水辺行政の歴史

日野用水の歴史は古く、遺跡発掘調査で 8 世紀ごろの水田や用水路の存在が確認されており、小田原北條氏の支配を受けていた永禄 10 年に日野用水開削の記録が残っている。昭和 30 年代に入り、農地が宅地化されると、家庭や事業所からの排水が水路へ流されるようになり、水質が悪化し、

住民から水路に蓋をかけるよう強い要望が出されるようになる。これを受けて行政による水質調査が行われた。昭和 50 年には現在の清流保全条例の改正前にあたる『日野市公共水域の流水の浄化に関する条例』が制定される。改正前は水質汚濁の防止を目的とした条例であった。昭和 53 年に制定された『日野市住みよいまちづくり指導要綱』では、湧き水や水路の保存についての条文がある。この頃から、水質だけでなく、水路の景観やアメニティ性などが注目されるようになる。昭和 57 年になると日野市の下水道整備が始まり、それ以降下水道の普及が進んだことで、水質は次第に改善されてきた。平成 7 年には国土庁(現国土交通省)から「水の郷百選」に選定され、平成 18 年に『日野市清流保全－湧水・地下水の回復と河川・用水の保全－に関する条例』、通称、清流保全条例が制定される。

近年は農家の減少や高齢化の進行によって、土地改良区・用水組合が縮小している。そのため、水路の管理は次第に市・市民に役割が移りつつある。日野市職員にヒアリングを行ったところ、土地区画整理事業を行う際の水路の調整にも土地改良区・用水組合は関与せず、市施行の場合は区画整理課と緑と清流課の 2 課間で調整を行い、組合施行の場合は区画整理課組合指導係が組合との窓口になって、区画整理課と緑と清流課の 2 課で調整を行っているという状況が分かった。水路の整備形態については区画整理課が緑と清流課に相談したり、自発的に保全を行ったりする。日野市の農地の減少により、使用者が非常に少ない水路にも関わらず整備を行うような状態にある。

6. 土地区画整理事業における水路の保全

日野市では、昭和 31 年以降、24 地区で土地区画整理事業が完了し、5 地区で現在も事業が進行中であり、2 地区が計画段階にある(図 3)。その面積は、完了区域と事業中区域を合わせると、日野市の市街化区域面積の約 44 パーセントにのぼ

る²⁾。そこで本研究では、土地区画整理事業と水路の関係に着目した。

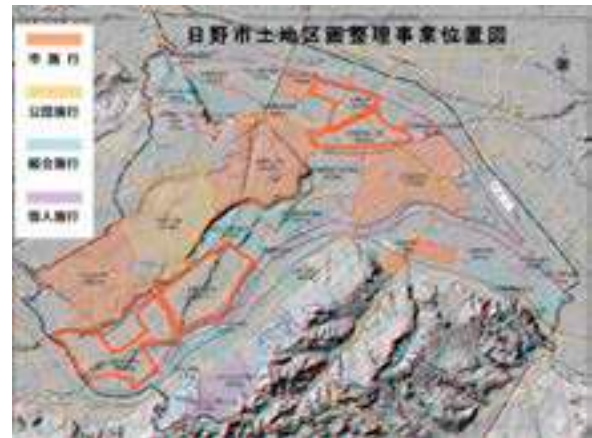


図 3 施行者別土地区画整理事業位置図⁸⁾⁹⁾

日野市では、昭和 34 年に市街地開発区域に指定されたことをきっかけに、昭和 36 年に独自の日野都市計画区域を定め、この時、土地区画整理事業や用途地域などの計画を一齐に打ち立てている。昭和 42 年時点での区画整理図(図 4)を見ると、日野市の土地区画整理事業は北西部の台地上から始まり、すぐに多摩川・浅川沿いの低地へと広がったことが分かる。昭和 44 年には南部の丘陵地でも事業が開始される。



図 4 昭和 42 年時点の区画整理図⁷⁾⁹⁾

各施工区域の 2 時点(昭和 3,40 年代と令和元年)における空中写真(図 5)を比較して、田畑が宅地化していることを確認した。

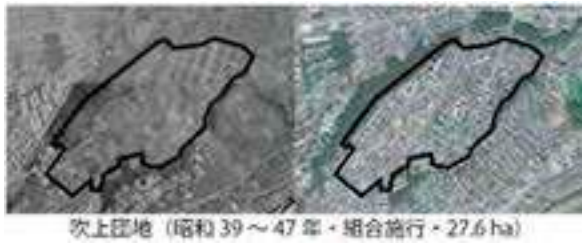


図5 空中写真の比較¹⁰⁾¹¹⁾

更に、施工区域の2時点（昭和30年代と平成24年）における水路図（図6）を比較すると、新しい事業ほど水路が統廃合や直線化、暗渠化をされず残っている傾向が見られた。中には新町土地区画整理事業のように施行前よりも水路が増加する事業もあった。

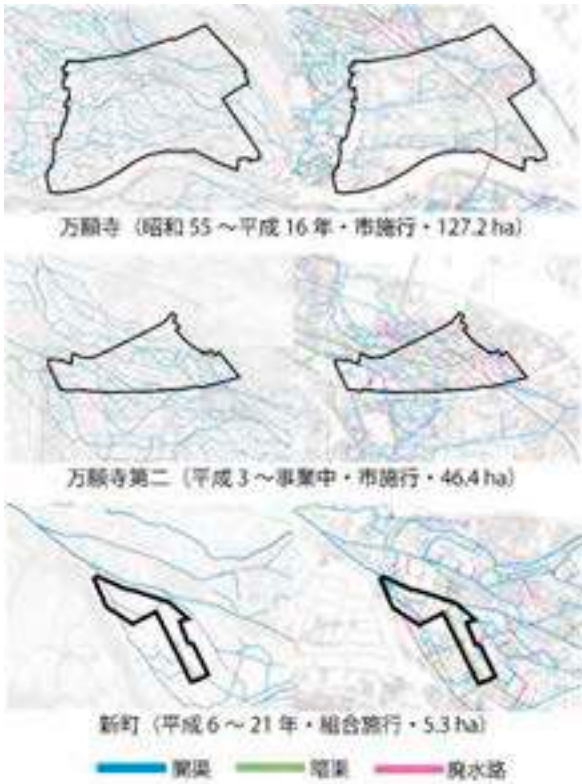


図6 水路図写真の比較¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾

また、複数の変更事業計画書を手に入れた5事業（万願寺、高幡、豊田南、東町、西平山）の事業計画書の変更を追うと、施工後水路延長が増加するように変更された事業は、5事業中4事業であった。

日野市環境共生部とまちづくり部の職員にヒアリングを行ったところ、土地区画整理事業において水路の保全をすることは、日野市の文化・環境の保全以外にも以下2点のメリットがあるという話を聞いた。1点目は、水路の保全などを事業計画に組み込むことが、補助金をもらうための一手法となる点、2点目は、元の地形・土地利用を活かした道路・水路の設計によって、工事費が削減できる点である。これを確認するため、本研究では、事業計画の中でも資金計画に着目し、分析を行った。

その結果、1点目について、補助金をもらうための条件などについては明文化されておらず、明確な答えを得ることはできなかった。しかし、地方公共団体作成の計画・方針内での事業の位置づけなどが補助金の適用に関わるため、例えば平成16年度に創設された「まちづくり交付金」の目的にあるように、「地域の歴史・文化・自然環境等の特性を活かした個性あふれるまちづくりを実施」できる計画であることが必要だと考えられる。

また、2点目について、新しい事業の方が元の地形・土地利用を活かした計画内容になっていることは上述の水路図の比較から分かったが、事業期間年表と各事業の面積当り事業費の比較（図7）を見ると、新しい事業ほど事業費が抑えられているという傾向はみられなかった。



図7 事業期間年表と面積当り事業費の比較²⁾

7. 地区計画における水路の保全

現在日野市では、41地区で地区計画が導入され

ている。対象地区は、既存の良好な住宅地や、仮換地指定時の区画整理区域などである。東京都多摩部の自治体ごとの地区計画が導入されている地区数と総面積（表1）を見ると、日野市は、八王子市、町田市に次いで3番目に導入地区数が多い¹⁵⁾。

表1 多摩部の地区計画導入地区数と総面積

順位	自治体	地区計画		順位	自治体	地区計画	
		地区数	面積			地区数	面積
1	八王子市	177	3,912.96	35	三鷹市	8	162.3
2	町田市	45	950.9	36	国分寺市	8	113.1
3	日野市	41	761.8	37	国立市	8	92.9
4	昭島市	35	709.7	38	立川市	7	82.1
5	多摩市	30	618.9	39	西東京市	7	130.8
6	羽村市	18	104.1	40	瑞穂市	6	29.8
7	調布市	15	350.9	41	武蔵野市	6	28.9
8	小平市	11	37.0	42	日村市	6	185.1
9	昭島市	10	219.1	43	小平市	5	26.5
10	北野村山町	10	1,789.9	44	日野市	5	48.8
11	あきる野市	10	195.4	45	武蔵野市	4	50.7
12	東村山町	8	57.2	46	国分寺市	3	204.2
13	東大和市	8	125.0	47	瑞穂市	3	59.7
14	狭小田町	8	87.1	48	日野市	2	87.4

本研究では、日野市の地区計画の中から「用水」または「水路」という記述をピックアップした（図8）。その結果、「用水路」に言及している地区計画は、41個中14個、開水路がある地区に限定すると21個中14個であった¹⁶⁾。



図8 「用水路」言及地区計画と水路現況

図中の地区に振られている番号は、計画の決定年月日順の古い順である。土地区画整理事業の仮換地指定時に策定されたと考えられる地区計画だけを抽出すると（表2）、1998年策定の落川地区

以降は、事業範囲に水路が存在するとき、地区計画にも「用水路」の記述があることが分かった。

表2 地区計画と土地区画整理事業の対応

番号	名称	決定年月日	面積	土地区画整理事業	
				地区名	施行区分
1	万葉地区地区計画	1986/12/2	136.7	万葉	市
2	高橋地区地区計画	1988/10/31	16.9	高橋	市
3	下河内地区地区計画	1988/10/21	3.9	下河内	個人
4	西平地区地区計画	1991/1/30	4.0	西平	個人
5	藤田地区地区計画	1993/12/7	80.7	藤田	市
6	西ツ原地区地区計画	1994/4/19	6.8	西ツ原	個人
14	東光寺上地区地区計画	1996/8/26	26.2	東光寺上第1・第2	個人
15	落川地区地区計画	1996/9/20	5.7	落川	個人
16	新町地区地区計画	1999/2/26	5.5	新町	個人
17	西原高野地区地区計画	1999/2/26	2.3	西原高野	個人
18	日野駅北地区地区計画	2000/10/7	4.0	日野駅北	個人
19	万葉第二地区地区計画	2000/10/7	45.5	万葉第二	市
20	新倉北地区地区計画	2002/4/26	7.8	新倉北	個人
21	新町地区地区計画	2002/4/26	36.1	新町	市
22	西平地区地区計画	2003/1/31	82.8	西平	市
24	平山地区地区計画	2005/11/25	4.9	平山	個人
32	日野南二丁目地区地区計画	2008/11/27	1.8	日野南二丁目	個人
35	落川河原地区地区計画	2011/4/4	1.8	落川河原	個人
36	川辺地区地区地区計画	2012/3/7	22.5	川辺地区	個人

■ 記述あり計画 ■ 水路あり事業

更に、「用水路」の記述があった項目についてそれぞれ整理したところ、「地区施設の配置及び規模」の項目に水路が記載されるようになるなど、計画の新しさと計画内容に相関が見られる箇所があった。水路に関わる具体的な制限は、水路上を横断する工作物の最大幅の制限と、水路に面する垣又は柵の最大高さとの構造の制限の2種類であった。

8. まとめ

本研究では、首都圏郊外部、特に東京都日野市に注目し、文献調査やヒアリング調査によって、市街地整備による自然・地形の改変の経緯を整理・分析した。崖崩れの災害記録に注目した宅地造成による自然・地形改変の分析については、首都圏郊外部で市街化が急激に進んだ時期の記録が残っておらず、目的を達成することができなかった。

日野市については、当市が受けていた市街化圧力を時系列で整理した。また、日野市の自然・地形を代表して用水路網に着目し、市街地整備を推進する中での行政の取り組みと、自然・地形改変の関係を明らかにした。

最後に、本研究で制作した新・旧水路図の全体図

(図9、図10)を以下に示す。



図9 日野市全域水路図 (昭和31~36年)



図10 日野市全域水路図 (平成24年)

参考文献

- 1) 日野市公式ホームページ：日野市の概要，
<https://www.city.hino.lg.jp/shisei/profile/gaiyo/1004554.html> (2023年1月閲覧)
- 2) 日野市：土地区画整理事業一覧表，2021年1月22日現在
- 3) 高橋賢一：日野の用水路網の消失プロセス考(その1) -縮小都市時代を好機に進める用水路再生のたまかな見取り図(試案)-，2006年度日野の用水再生共同研究プロジェクト年度末報告書『水の郷・日野/用水路再生へのまなざし』，法政大学大学院エコ地域デザイン研究所，pp.40-55，2007
- 4) 宮下清栄，平澤友浩，岩下篤，小川真一，門脇吉隆：用水路再生に向けたデータベースの構築，2006年度日野の用水再生共同研究プロジェクト年度末報告書『水の郷・日野/用水路再生へのまなざし』，法政大学大学院エコ地域デザイン研究所，pp.94-107，2007
- 5) 青山博次郎，千野貞子，十倉淳子：都市における地形災害の統計的研究-横浜市の崖崩れの分析-，統計数理研究所，1970
- 6) 日野市：令和3年度(2021年)とうけい日野，2021
- 7) 日野市役所企画室：日野市の推移と現況，1967
- 8) 日野市：土地区画整理事業位置図，2022年10月11日最終更新
- 9) 国土地理院：アナグリフ(グレー)，地理院地図(2023年1月閲覧)
- 10) 国土地理院：時系列表示(1961年~1969年)，地理院地図(2023年1月閲覧)
- 11) 国土地理院：時系列表示(2019年)，地理院地図(2023年1月閲覧)
- 12) 東京都建設局：東京1:3000地形図38-3 日野東部，1975年測量
- 13) 東京都建設局：東京1:3000地形図29-8 東光寺，1957年測量，1960年修正測量
- 14) 日野市役所：日野市 河川・水路図，2012
- 15) 東京都都市整備局：東京都における地区計画決定状況，
https://www.toshiseibi.metro.tokyo.lg.jp/kenchiku/chiku/chiku_5.htm (2023年2月閲覧)
- 16) 日野市公式ホームページ：地区計画，
<https://www.city.hino.lg.jp/shisei/machidukuri/chikukei/1005201.html> (2022年10月閲覧)

法政大学デザイン工学部教授*1

近世以降の佐原における地域構造の形成

Development of regional structure in Sawara since Edo period

志村 遥奈

Haruna SHIMURA

メンバー：志村遥奈*1・福井恒明*2

キーワード：地域構造, 地域形成史, 住民自治

1. 研究の背景・目的

千葉県香取市佐原地域（以下、佐原地域）は千葉県北東部に位置し、利根川を中心として水田地帯や霞ヶ浦など豊かな水辺が広がる地域である¹。特に、小野川周辺は近世以降舟運を中心に河港商業都市として発展した地域であり、現在も歴史的な町並みが残る地区である。1996（平成8）年には、重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区）に選定され、香取市の観光拠点として空き家や未利用の蔵を活用したリノベーションや舟運の活用、佐原の大祭など、近世の佐原の姿を観光資源としたまちづくりが行われている。しかし、こうしたまちづくりにおいては、現代にも残る歴史的資源の活用にとどまっており、これらを維持し、持続可能にしていくためには、地域構造に基づいてその全体像を把握する必要があると考えられる。

地域構造について北村（1990）²は、地域の環境に支えられ、人口や社会、経済や交通、水利や産業など、様々な要素や活動の相互関係性とそれらの空間配置によって形成されるものと述べている。また、地域構造はそれぞれの地域の形成過程の上に成立するものであると考えられ、地域構造を理解するには地域の形成過程を把握する必要がある。そこで本研究では、地域の持続可能性における課題把握に向けて、佐原地域の地域構造をその形成過程を踏まえて明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、千葉県香取市佐原地域の形成過程から地域を形成するさまざまな要素や活動の相互関係性の把握を行う。そのため、郷土史資料、佐

原地域を対象として行われた調査の報告書や記録文書、既往研究を用いた文献調査を行う。調査年代を町場として大きく発展した近世以降とし、郷土史資料を用いた文献調査から佐原地域の形成過程と地域を構成する要素の把握を行う。次に、佐原の地域構造を構成する要素に関する研究や報告を分野ごとに整理しその特徴を読み取る。これらを踏まえて佐原の地域構造を構成する要素同士の相互関係性の把握から、佐原の地域構造の特徴を読み取る。調査に使用した文献資料は表-1のとおりである。佐原地域の歴史を通時的に整理した資料であること、郷土史資料においては情報が不足したものを補填する内容であることを考慮した。

表-1 使用した主な文献資料

	資料タイトル	編著者	発行年
郷土史	佐原市史	佐原市役所	1966
	佐原町誌	佐原町	1973
	千葉県の歴史 通史編：近世1	千葉県史料研究財団	2007
	千葉県の歴史 通史編：近世2	千葉県史料研究財団	2008
	千葉県の歴史 通史編：近現代1	千葉県史料研究財団	2002
	佐原の歴史創刊号	佐原市教育委員会	2001
調査報告書	佐原の町並—佐原市伝統的建造物群保存地区調査報告一	佐原市教育委員会	1975
	町並に関する調査報告書第一集	千葉県立房総のむら	1992
	部冊帳第五巻より 佐原村用水及び用水樋修葺の事	香取五郎	1994
	佐原山車祭調査報告書	千葉県佐原市教育委員会	2001
関連書籍	利根川治水の変遷と水害	大熊孝	1981
	利根の東遷と水郷の人々	鈴木久仁直	1985
	増補改訂佐原の山車まつり	清宮良造	1995

3. 既往研究と本研究の位置づけ

地域構造を取り扱う研究においては、人口データや交通データなどの定量的な観点から地域構造を把握した研究が中心であり、近年では地域形成史に基づき特定の観点から地域構造を捉える研究が見られるようになってきている。

定量的観点から地域構造を把握したものには、中核都市や都市周辺地域を対象に、人口密度やその分布、土地利用やその面積の観点から分析を行い、それぞれの要素の分布と相関から地域構造の現状を明らかにした太田ら（1966）³や入沢ら（1967）⁴の研究がある。他にも、森田ら（2014）⁵や齊藤（2019）⁶は地域計画における地域構造に着目して、人口や産業体系、交通体系などのデータに基づき、震災前後の地域構造の比較による地域構造の評価から地域課題を明らかにしている。

地域形成史に基づき特定の観点から地域構造を明らかにした研究では、樋渡（2017）⁷によるヴェネツィアのリドにかつて存在していた宗教的空間や墓地、居住区などの空間の形成過程の把握と、地図資料や不動産台帳を用いた土地利用把握から地域構造を明らかにしたものがある。また、齋藤（2021）⁸は都市と周辺地域を一体として捉えるテリトリー概念を参照し、越後平野西部の自然

条件と人々の活動の相互関係性やそれらの領域を把握し地図表現を行うことで地域構造を把握している。

以上のように、地域構造に関連する研究の多くは数値指標をもつ観点から地域構造を把握し現状の地域構造の特徴や課題を論じる一方で、その地域の文化や歴史という観点から地域構造を捉えようとする知見はまだ少ない。したがって、本研究では、地域の形成過程に基づき地域の文化や歴史という観点から地域構造を捉えるという点に独自性を有している。

4. 佐原地域の形成過程の把握

佐原地域の形成過程を把握するため、表-1に示した文献資料のうち郷土史資料を中心に佐原地域を構成する重要な要素を確認すると、「統治状況」、「住民自治」、「社会基盤整備」、「治水」、「産業」、「祭礼・信仰」の5項目に分類することができた。さらに、「政治」の項目に関しては統治状況と住民自治とに分類した。これをもとに、年表形式に整理した（表-2）。これに基づき佐原地域のその形成過程について時代ごとにその特徴を述べる。

旗本の支配がはじまる1590年代以前から、新宿に六斎市が成立し⁹近世初期から商業活動が行

表-2 佐原地域の形成過程



われていることが確認できる。1660年代ごろには、酒造及び醸造業がはじまるとともに¹⁰、樋橋など町の社会基盤整備も行われ始めた。さらに、利根川治水工事の第一期が終了する1670年代ごろになると¹¹、これに伴う水運業の始まりが確認できる。ここでは米穀や醤油・酒、薪などの運搬が行われていたという。また、1710年代から町組織が成立し、佐原の大祭の始まりも見られる。その後、江戸時代中期になると、佐原地域は舟運を中心に町場として成長していき、さまざまな業種の商店が急増し商業が発展していく¹²。このころから、講などの信仰文化も登場し現代にまで継承されている¹³。1870年代以降、佐原小学校の設立¹⁴や成田鉄道の開通¹⁵、上下水道の整備¹⁶、水郷大橋など茨城県との接続を目的として橋梁設置¹⁷など社会基盤整備が進み、町の骨格が形成されていることがわかる。しかし、これらの整備や自動車の普及に伴い水運業は衰退していった。

以上のことから、佐原地域の形成過程に関して、産業や祭礼・信仰などの近世由来の活動を中心として発展し、それらが継承されてきたという特徴が読み取れる。

5. 佐原に関する研究・報告の分野の整理

佐原の地域構造を形成する要素と考えられる6項目（政治、社会基盤整備、治水、産業、祭礼・信仰）に着目し、これらに関する研究や報告の分野を整理した（図-1）。佐原に関する研究や報告の分野を整理すると、行政、住民自治、社会基盤整備、治水、産業、祭礼・信仰の6分野に分けられた。図-1より、その全体はソフト的な活動に関するものが多くみられる。それぞれの分野をみると、行政には歴史的町並みの保存状況や建造物の時期分布など重伝建選定に向けた調査やまちづくりにおける住民意識や関わり方とそれらの評価など、歴史的町並みの保全活動とその評価に関するもの



図-1 佐原に関する既往研究・報告の分野

が多く、明治末期当時の佐原の政治状況に関するものもある。行政における重伝建地区の建築物に関する知見では住民自治や社会基盤との関連があり、特に住民自治に関するものでは、住民が主体となった重伝建地区選定に向けた活動が取り上げられている。

住民自治の分野では恒常的かつソフト的な活動に関するものが多くある。特に、「町内」と呼ばれる住民自治組織の成り立ちや機能、近世当時の活動の様子や変遷が明らかにされている。

社会基盤整備の分野では、江戸時代の用水建設や明治時代の佐原小学校設立の経緯、それらの背景に関するものが見られるのが特徴的である。また、重伝建地区における地震被害とその要因に関する分析や道路環境改善に向けた駐車場の再配置の検討など町並みの環境の見直しに向けたものが見られる。

治水に関して佐原地域を対象とした研究・報告は少なく、利根川の改修工事と水害の変遷に関するもののみ見られている。

産業の分野では、近世に発展した佐原河岸における六斎市での争論の様相や水運業の構造と成立過程などの研究がある。また、地域ごとに見られる産業の違いについて本宿地域の状況を明らかにしたものが見られている。

祭礼・信仰に関する研究・報告には、観光資源の一つである佐原の大祭の起源やこれまでの様相、大祭に使用する山車人形や飾りの変遷に関するものが見られた。また、住民自治との関連が見られる知見も多く、各町内で民間信仰として行われた講の活動記録や「町内」の神社仏閣のとりまとめが行われていた。

以上より、佐原を構成する要素に関する研究・報告の分野の全体像から、行政、社会基盤整備、産業、祭礼・信仰のそれぞれの分野において住民自治と関連性がある研究及び報告が多くみられることがわかる。したがって、佐原地域に関する研究や報告において住民自治に対する注目度が高い

ことから、佐原の地域構造を捉える視点として住民自治は重要であると考えられる。

6. 佐原の住民自治組織「町内」とその機能

佐原地域の「町内」とは町内会や自治会のように世帯ごとに所属し住民自治の活動を行う組織である。小野川を挟んで右岸に本宿、左岸に新宿が位置し、現在はそれぞれ本宿が12町内、新宿は19町内に分かれている。ここで現在の「町内」の機能に関して整理した(表-3)。代表的かつ重要な活動として佐原の大祭の運営及び執行が挙げられ、佐原の大祭で使用する山車や山車人形の維持管理も「町内」によって行われている。その他にも、地域住民による火の用心の見回りなどの地域防災機能、町内での葬式準備や香典の管理、それらの連絡などの葬式互助機能、町内生活を維持のため個々の問題解決に向けた協定を統合する機能などがある。

表-3 佐原における「町内」の現代の機能

機能	内容
佐原の大祭 執行・運営	山車ルートの設定 交代制の年番担当 山車の製作・管理
地域防災	地域住民による火の用心の見回り
葬式互助	葬式準備、香典の管理、 葬家の菩提寺及び町外への葬儀の連絡 通夜の執行
協定統合	町内の生活維持における個々の問題に 対する解決のための協定の統合

7. 佐原の地域構造における「町内」の機能

文献資料より読み取れた佐原地域を構成する要素に対する「町内」の機能とその関係に関して整理を行った(図-2)。社会基盤整備に関して、橋本町における便所の設置に対して建設立案及び願い出を行い整備提案という機能が見られた。また、小野川沿い道路の修繕整備に対して道路修繕の計画を行い、整備計画という機能も持っていることがわかる。さらに、佐原小学校の新築校舎の建設に際しては整備費用を町内単位の寄付でまかされたことや、小野川沿い道路の修繕においても

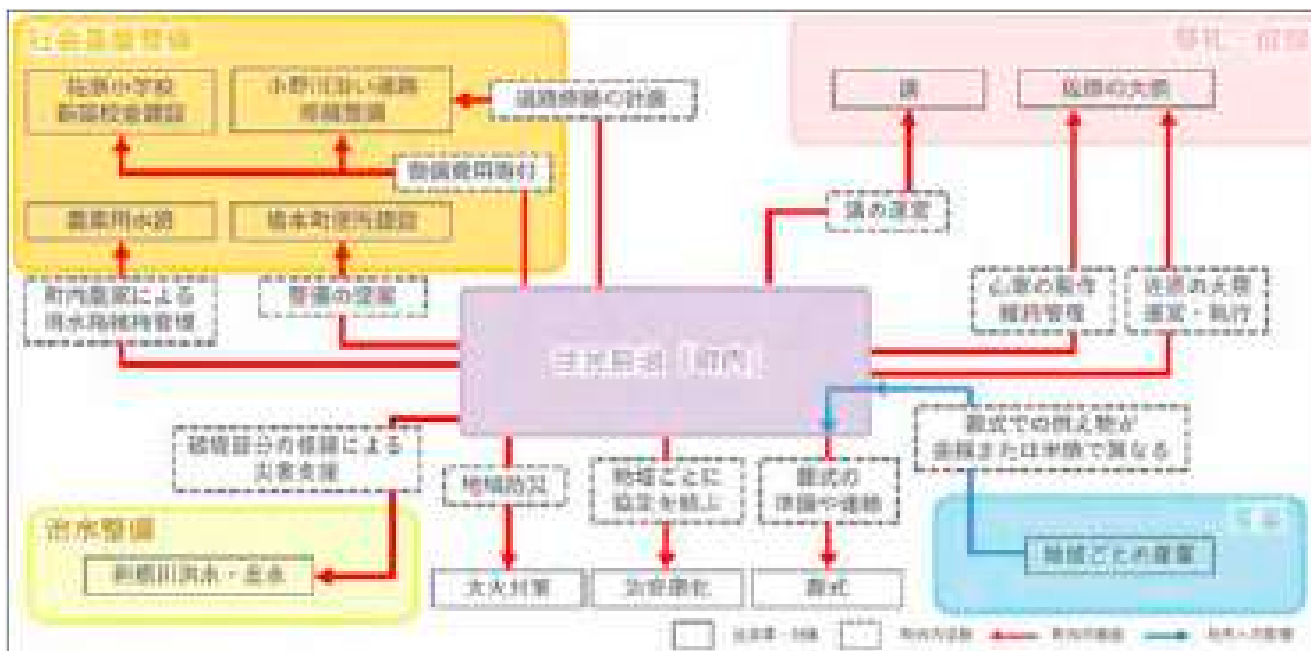


図-2 佐原における「町内」の機能と地域構造への寄与

対象区間の調査委によって修繕費用が寄付されたことから、費用援助の機能も持ち合わせている。これに加え、農業用水路を利用する町内では、町内の農家によって共同責任で管理が行われており、維持管理という機能を担っていた。また、治水整備においては利根川の洪水や出水に対して破堤部分の修繕を行い災害支援という機能を果たしている。

産業では、産業の種類に地域差が見られており地域への影響が見られていることや、産業の地域差が葬式における供え物の差に反映されており、産業が地域の葬式互助という機能に影響を及ぼしていると言える。

祭礼・信仰においては、佐原の大祭と民間信仰である講に関して「町内」に機能が見られている。大祭においては、「町内」が担う大祭の執行・運営機能に加えて山車の製作及び維持管理機能を担っている。民間信仰では「町内」単位で活動を行っており、「町内」が講という体制の主体となり町内の住民同士の結びつきを形成・保持する機能を持ち合わせていると考えられる。

次に、それぞれの機能を時系列的に整理し（表4）その時代変化を読み取る。社会基盤整備における「町内」の機能は、用水路の維持管理が江戸時

代以降昭和まで継続しているが、建設提案や費用援助、修繕計画などの機能は一時的に見られた。1950年代以降、社会基盤整備における「町内」の機能は見られない点について、その役割が行政によって担われるようになったと考えられる。これによって、「町内」の機能は縮小しており、地縁的なつながりが希薄化したと考えられる。

治水整備における「町内」の機能である災害支援の機能は江戸時代に短い期間で継続していることがわかる。また、産業においては、商業が発展しさまざまな業種の商店が見られた大正時代以降にその影響が見られる。さらに、祭礼・信仰における機能では、佐原の大祭の運営及び講の運営は

表-4 佐原における「町内」の機能の時代変化

江戸時代中期から、山車の製作や管理の機能は江戸時代末期から見られており、これらの機能は現代にも引き継がれている。

以上より、現代における「町内」の機能に加えて、江戸時代以降「町内」が佐原地域の形成過程において社会基盤整備、祭礼・信仰や治水整備に対して機能を果たし、産業においては影響を受けながら結びつきをもち、多面的な役割を果たしてきたと考えられる。したがって、住民自治の形態として近世以降に成立した「町内」は、佐原の地域構造の核となる要素であり、佐原の地域構造の成立の一端を担ってきたと考えられる。さらに、社会基盤整備の機能は「町内」にとって代わり行政が担ったと考えられるが、これに伴う地縁的なつながりの希薄化という影響を踏まえると、佐原地域における「町内」の存在は持続可能な地域にしていくために重要な要素であると考えられる。

これらを踏まえると、「町内」という観点から佐原の地域構造を捉えると、社会基盤整備、治水整備、祭礼・信仰、産業という要素や活動が「町内」と相互に結びつき形成されていると言える。

参考文献

- 1) 香取市：香取市都市計画マスタープラン, p.6, https://www.city.katori.lg.jp/government/plan_policy/plan/toshikeikaku/master-plan/index.files/010-masupura.pdf, 【最終閲覧日：2023/01/25】
- 2) 北村貞太郎：地域構造と地域計画手法の構成, 地域学研究, Vol.21, No.1, pp.305-322, 1990.
- 3) 太田実, 山田昭夫, 米森文嗣, 真嶋二郎, 川本裕夫：都市的活動に関わる街区諸量の分布相関よりみた都市中心部の地域構造について(地方中核都市, 札幌の場合), 都市計画論文集, Vol.1, pp.7-13, 1966.
- 4) 入沢恒, 棚橋一郎：大都市周辺における地域構造の予測(三多摩地域の人口分布と土地利用), 都市計画論文集, Vol.2, pp.1-10, 1967.
- 5) 森田哲夫, 細川良美, 塚田伸也, 湯沢昭, 森本章倫：津波被害を考慮した地域構造に関する研究, 社会技術研究論文集, Vol.11, pp.1-11, 2014.
- 6) 齊藤充弘：原発事故発生前からの地域構造の変化をふまえた復興計画の課題に関する研究—福島県浜通り地域を対象として—, 都市計画論文集, Vol.54, No.3, pp.1395-1402, 2019.
- 7) 樋渡彩：ヴェネツィアのリドにおける19世紀半ば以前の地域構造に関する考察, 日本建築学会計画系論文集, Vol.82, No.734, pp.1091-1098, 2017.
- 8) 齋藤浩志郎：江戸・明治期の越後平野西部テリトリーオに関する研究, 景観・デザイン研究講演集, No.17, pp.204-211, 2021.
- 9) 佐原市役所：佐原市史, 佐原市役所, pp.447-448, 1966.
- 10) 前掲9), p.425, pp.444-445, 1966.
- 11) 前掲9), p.170, 1966.
- 12) 石橋静夫：江戸時代 佐原村の豪商と財力, 佐原幽遊学書房, p.1, 1998.
- 13) 千葉県立房総のむら：町並みに関する調査報告書 佐原市本宿の歴史と民俗, 千葉県立房総のむら, p.71, 1992.
- 14) 佐原市教育委員会：佐原の歴史 第5号, 千葉県佐原市教育委員会, pp.4-9, 2005.
- 15) 千葉県佐原市教育委員会：佐原山車祭調査報告書, 千葉県佐原市教育委員会, p.15, 2001.
- 16) 前掲9), pp.633-634, 1966.
- 17) 前掲9), pp.816-823, 1966.

都市近郊型酪農と白牛酪 ～江戸の乳製品から学ぶ持続可能な酪農～

櫻井 空斗

1. はじめに

酪農を持続可能なものにしていくための一つの考え方として「都市近郊型酪農」と称する、都市の近くの牧場で、小規模ながら地域に配慮、協力して経営していく酪農形態が注目されている。この都市近郊型酪農は、持続可能な酪農を目指す理想的な酪農形態である一方、2023年現在、燃料費や飼料代の高騰、牛乳消費の落ちこみなどによって、経営の厳しさが課題となっている。この課題の解決策を見出そうと考えたことが本研究の問題意識である。

2. 方法論

(1) フィールドワーク

①一般社団法人Jミルク主催東京都内乳業跡地巡り（猪股要助牧場跡地、北辰社跡地、英華社・平田牛乳搾乳所跡地、阪川牛乳店跡地、雉橋・野馬方邸役所跡）

②磯沼ミルクファーム（東京都八王子市小比企町1625）

(2) 文献を用いた歴史分析

3. 都市近郊型酪農の共通点

調査対象の都市近郊型酪農において、3つの共通点がある。

(1) 水源：大量に必要な乳牛への飲料水等に利用できる河川や湧水、用水等の水源が必要不可欠である。

(2) 斜面地：狭い土地での乳業において、周囲への低減のため、風通しが良く、水はけの良い斜面地の利用が適している。

(3) 需要地と近い：牛乳の腐敗しやすい製品特性から、需要が存在するエリアと近い必要性がある。

4. 白牛酪のマーケティング分析

4-1. 白牛酪の概要

1727年、徳川吉宗の治世に西洋のチーズやバターの製法を参考に開発された。現代の食べ物では生キャラメルやバターに近いが、より硬く石鹸のような形態である。小刀などで削って粉にして飲む他、茶に混ぜて摂取した。熱した牛乳と砂糖を攪拌しながら煮詰めることで水分を飛ばし、牛乳の脂肪分等を固めることで成形した。原材料である牛乳を出す牛は、インド産の白牛だという記述がある。しかし当時の日本はインドとの貿易を行っていなかったため、実際はオランダから直接、または三角貿易で輸入されたホルスタイン（フリースタン）種の祖先やゼブー種だったのではないかと推察されている。滋養強壮や解熱など幅広い効果があるとされ、主に肺病や栄養失調のための薬、または男性機能の回復のための精力剤として使用された。1789年から1801年頃の徳川家斉の治世で販売が始まり、1匁約3.75gで400文という高価格であった。生産当初は将軍や大奥に献上されていたが、生産量が増加したことで、庶民に販売することとなった。流通は野馬方役所や、御用商人が取り付ける日本橋玉屋等で、最終的には全国14カ所に広がった。

4-2. 白牛酪をとりまく環境分析

購買意識の形成要因として、(1)伝統的価値観、(2)食品と養生の多様化、(3)社会の二面性がある。

(1) 伝統的価値観：儒学・儒教、仏教の考えが庶民レベルで浸透しており、「家の存続」や「肉食の忌避」、「病の治療のための祈祷」等の伝統的価値観が購買に影響を及ぼした。

(2) 食品と養生の多様化：飢饉対策や富国強兵のため、蘭学や本草学の奨励が行われ、食品加工技

術や農業生産技術が向上したことや、江戸を中心とした交通網の発達によって、食品と養生の多様化が進んだ。

(3)社会の二面性：政治と経済の安定によって、庶民文化が隆盛した一方で、列強の接近や相次ぐ飢饉、武士の没落等、幕藩体制の動揺も深刻化したことから、不安を抱える江戸時代の二面性が購買に影響を及ぼした。

4-3. 白牛酪の4P分析

(1)製品政策：腐敗しやすい牛乳を薬として保存が可能で、少量ずつでも使用できる製品設計である。神聖な白牛から生産することや、江戸の土地（野馬方邸役所）で加工して初めて白牛酪と認定することで、製品ブランドを構築していた。

(2)価格政策：高価格設定である。当時江戸で流通していた乳製品は白牛酪のみであったため、希少性が高く価格も高く設定された。高価格であることが白牛酪ブランドの神秘性や希少性を裏付けた。

(3)流通政策：限定的なチャネルである。生産・加工を行っている野馬方邸役所での直接販売、御用商人が取り付ける販売所でのみ流通していた。役人が厳かに差し出し、買う側は恭しく受け取る様子や、三宝の台で販売している記述があり、販売方法が卸先の御用商人にも徹底されていることから、チャネルの統制が機能していることがわかる。

(4)プロモーション政策：白牛酪ブランドイメージを崩さないプロモーションが展開された。家齊は幕府御用医師に命じて、白牛酪の効能や幕府の功績を描いた『白牛酪考』を作成した。漢方薬店のような派手な看板や、錦絵、引き札、売り歩きなどは行わなかったことから、白牛酪ブランドイメージを損ねないようにしていた。

4-4. 白牛酪のターゲット分析

ターゲットは高級武士と、高所得の遊郭利用者であると推察できる。高級武士は、伝統的価値観

の「家の存続」というプライドとプレッシャーがある。高所得の遊郭利用者は、江戸の栄華と文化の中心である遊郭で楽しむことで、裕福であるアイデンティティを確立した。高級武士であれば、子供を絶やさず続いてほしい、遊郭利用者であれば、この遊郭のような江戸の栄華が続いてほしい、という江戸時代が江戸時代あり続けて欲しいという願いを込めて、白牛酪を使用したと推察できる。

5. まとめ

白牛酪の価値とは、繁栄の安心と期待であり、江戸の転換期だからこそ求められた製品である。マーケティングミックスを軸に、統合的マーケティング活動の展開によって、この価値を実現していた。

白牛酪のように優れたマーケティングミックスとブランド戦略を実行することで、都市近郊型酪農で生産する製品にも特別な価値を付与することができる。翻って現代の都市近郊型酪農においても、マーケティングミックスとブランド戦略を適切に実行し、テリトリーオの概念を取り入れつつ、高付加価値製品を展開することが酪農経営の一助になる。マーケティングとテリトリーオによって都市近郊型酪農の経営を確かにしていくことが、酪農をより持続可能にしていく方策の一つである。

6. 参考文献

- ・石井淳蔵, 廣田章光, 清水信年『1からのマーケティング第4版』頭学舎, 2020年
- ・石井利男, 錦織純雄『千葉県における酪農発展の経過』酪農乳業史研究 9, 50-60, 2014年
- ・金木精一『安房畜産史』安房郡畜産農業組合, 1961年
- ・加茂儀一『日本畜産史』法政大学出版局, 1976年
- ・木村純子「テリトリーオに根ざした酪農のSDGsへの貢献—コモンズの精神が実現する地域活性化—」木村純子, 中村丁次編著『持続可能な酪農 SDGsへの貢献』中央法規, 2022年
- ・細野明義『牛乳・乳製品の我が国における啓発小史と健康訴求に関する今日の国際動向』ミルクサイエンス 58巻3号, 日本酪農学会, 2009年
- ・松尾雄二, 崎村優也, 永徳遥『文献にみる長崎の室町時代以降の牛乳・乳製品について』畜産の研究, 養賢堂, 2015年

銭湯から考える「まちの継ぎかた」

Thinking from the perspective of public baths
“How to inherit the region”

栗生 はるか

Haruka KURYU

メンバー：文京建築会ユース*¹、銭湯山車巡行部*²、一般社団法人せんとうとまち*³

キーワード：まちづくり、地域活動、銭湯、文京区、居場所、保存、コミュニティ、継承、イタリア

1 はじめに

「NPO 法人文京建築会」を母体とした「文京建築会ユース」という有志団体で、建築・都市の研究や実践を行う若者や学生を率いて約 10 年ほど地域活動をしてきた。地域の見どころがちな魅力を掘り起こして発信することをテーマとしている。

地域に対峙する活動の過程で、毎日のように“ここにしかないもの”が消え、“どこにでもあるもの”に書き換えられているような状況に向き合うこととなった。建物の保存や活用は、マンション需要の高い都心では困難を極める。まちの文脈が断絶されれば、次世代に残すべき地域のあり方を創造することも難しい。

そのような中、「まちつぎ」という造語を考えた。まちつぎの「つぎ」には、3つの意味を込めた。地域に眠る記憶・歴史を元に、まちを継承する“継ぎ”。出会わなかった人やものをつないで新しい価値や活動を生み出す“接ぎ”。そして、様々な人々と協働しながら、次世代の地域の姿を共に考える“次”。

都市が変貌していく中で全てがリセットされることなく、何かしら次世代へ引き継ぐことができないかという思いで、「まちつぎ」の活動を行ってきた。その一端を紹介する。

2 まちの記憶をつぐ

地域の銭湯のリサーチを行う過程で、短期間で 5~6 軒の銭湯を看取ることとなった。そのような状況下、銭湯の記録や記憶を残したり展覧会や見学会を行ったりと様々な手法でその痕跡を残すことを試みている。その一つとして「銭湯山車巡行」がある。銭湯山車は、記憶のよすがとして引き取ってきた廃業した銭湯の部材で構成され、国際芸術祭「東京ビエンナーレ 2020/2021」の出展に合わせて製作された。“今はなき銭湯を弔い、今を生きる銭湯を寿ぐ”をキャッチフレーズとして、銭

湯山車は都内各所を巡行し銭湯の存在感をアピールしている。実際に解体された銭湯の近くでは、かつての常連が集まり、一時的にコミュニティが再生されるような出来事もあった。銭湯山車は、忘れてはならない記憶を継承する装置ともいえる。

3 まちのコミュニティをつぐ

空間は残せないが、そこで育まれた繋がり、コミュニティだけでも引き継げないかと銭湯に代わる“まちの居場所”づくりもしている。築 100 年を超える空き家となっていた長屋の一角や、印刷業の衰退で使われなくなった倉庫を地域のサロンとして開放、運営することも行っている。それらは既にあった場所の持つ力もうまく活用し、地域の人々の拠り所、“銭湯のような場所”に育ちつつある。

また、同時に似たような地域の居場所のリサーチを実施。区内に 25 箇所も似たような性格の場所を見つけることができた (2018 年時点)。どれも、空き家や再開前のビルなど都市の隙間と言えるような場所が活用されている。持ち主が変わったり解体されたりと不動産としては脆弱で、担い手は場所を転々としていることも多いが、毎度かつてのネットワークを生かして新しい場が再生されている。大火や震災、戦災と幾度も建物を失うことを繰り返してきた東京らしい現象ともいえそうだ。

有形の建物はなかなか残らないが、無形のつながりが都市の隙間を見つけて有機的に都市を継いでいっている様子が確認された。

4 まちの生態系をつぐ

建物や場そのものを残すための試みも行っている。活動を通して、銭湯は単体で存在しているわけではなく周辺のまち、“地域の生態系”と共に息づいていることが確認された。

その名も「せんとうとまち」という法人を作り、北区

の「滝野川稲荷湯」にて、海外の財団から支援を受け、銭湯の修繕と銭湯の隣にある元従業員用の二軒長屋を再生させるプロジェクトを行った。長屋は、かつて湯屋の二階にあったという湯上り処をイメージして開放している。昔ながらのコミュニティが存在する銭湯は、馴染みのない新住民や若い世代にとって抵抗がある。しかしながら、ここでは長屋が銭湯とまちの関係性を編み直すための緩衝材となって、旧住人と新住人、銭湯とまちを繋ぐ役割を果たしている。新たな銭湯の利用者も増え、地域の生態系がうまく再生されつつある。

5 「つぐ」活動

冒頭の文京区での活動では、銭湯だけではなく、旅館や喫茶店などでも同様の活動を行ってきた。やはり実際の建物や場所自体を残す事は難しく、長い間、活動は記録や記憶を残すにとどまっていた。しかしながら近年、その状況が変化しつつある。

本郷の旅館街の生き残りとも言える老舗旅館「鳳明館」の解体危機の際には、我々の働きかけもあり、地元企業の松下産業が買収、現在は活用検討がなされている。また、このような活動の延長上で相談を受けた白金台の「渡辺甚吉邸」でも、危機的状況から前田建設工業により移築・再生がなされた。

断片的にしか残せなかった活動が、世の中の価値観の変化や関係者の尽力により、少しずつその場所や建築自体を残しながら再生・活用していく方向へと進んでいる。

6 結び

執筆者は以前、イタリアのヴェネツィアにて、古い街並みや都市空間が、一時的に市場や劇場などとして立ち上がる“小さな仮設物”に補完されながら引き継がれていることについて研究をしていた。時代によって変化する都市に対する要求に、大きな改変によって応えるのではなく、小さな仮設物が流動しながら古くからの都市を存続させていた。

先日滞在したナポリでも、既にある建築や都市空間に、人間側が柔軟に寄り添っている様子が見て取れた。現在の暮らしに対応しない建物の不具合を、日常的なコミュニケーションで乗り越えている様子に、建築や都市空間が人の関係性を継いでいるように感じられた。

本稿でも紹介したように、日本では「つぐ」行為は非常に過酷で尊いことのように捉えられがちだが、彼らにとって「つぐ」行為は日常的で、楽しむ対象かのようにも感じられる。まちを継いでいくこと自体が、人やコミュニティの本質なのではないかと考えさせられる事例だ。改めてそのような視点からも活動を振り返りたいと思っている。



図1 まちの記憶をつぐ「銭湯山車巡行」



図2 まちのコミュニティをつぐ「地域サロン・アイソメ」



図3 まちの生態系をつぐ「稲荷湯修復再生プロジェクト」

Photo:TADA

https://bunkyoyouth.com/*¹
https://sento-dashi.tokyo/*²
https://sento-to-machi.org/*³

隅田川かわてらす 「ASAGE CAFE 浅草蔵前」

Sumidagawa Kawaterasu Project ASAGE CAFÉ ASAKUSA KURAMAE

阿部 彰*¹
Akira ABE

メンバー：本多 健*²

キーワード：かわてらす、川床、隅田川テラス、厩橋、東京スカイツリー

1. “かわてらす”東京都の取り組み経緯

2014年に策定された東京都長期ビジョン3ヵ年の実施計画の中に「隅田川における恒常的なにぎわい創出～オープンカフェ・かわてらす等の設置促進」が表記され、これを受けて建設局河川部は2016年までを社会実験と位置付けて、河川の管理用通路を活用して飲食店の営業を行う“かわてらす”の出店事業者の募集を始めた。

東京都の説明では、“かわてらす”とは人々が集う川沿いの“テラス”席というだけでなく、水辺でのぎわう人々の表情を楽しく“照らす”。太陽の光と水面に反射した光によってみんなの顔を明るく“照らす”という意味を込め、夏の京都などでよく見られる「川床」の東京版で、官民が協働で取り組み、設置と飲食店営業は民間事業者が行い、都は河川敷地の使用に係る規制を期間限定で緩和するという仕組みであると発表している。

2. かわてらす設置条件（要約）

【主な募集条件】

- ・建物及び土地所有者、地元町会や隣接者等と“かわてらす”設置に関する同意が得られていること
- ・設置のための一時占用許可期間は2年以内
- ・清掃や緑化などの周辺環境の向上等による地域貢献を行うこと
- ・かわてらすの設置・撤去及び維持管理等に対する費用を負担すること

【社会実験の実施内容】

- ・事業者による維持管理や安全性確保、地域貢

献策、設置条件（構造等）等の検証

- ・この実験結果を踏まえ、河川敷地占用許可準則「都市および地域の再生等のために利用する施設に係る占用の特例」の適用に取り組む【かわてらす設置条件】

- ・通常時、非常時においてテラス下を通過するための幅員3.0mと高さ2.5mを確保する
- ・堤防の基礎に掛かる荷重は構造体、上部積載荷重を含めて5KNt/m²以下とする
- ・設置事業者は、かわてらすの活用等により、地域貢献、地域活性化、川の魅力を伝える取組等を行い、「人々が集い、にぎわいが生まれる水辺空間の創出」に努めること。
- ・隅田川花火イベント時は使用を禁止する
- ・非常時においては容易に解体できる構造物であること

【社会実験期間中から最近までに日本橋川と隅田川沿いに完成したかわてらす】

「豊年萬福」中央区日本橋室町

現在「たいめいけん」仮店舗として営業

「ナベノイズム」台東区駒形

「ボン花火」台東区駒形

「LYURO Tokyo Kiyosumi by THE SHARE HOTELS」

江東区清澄

「ザ・ゲートホテル両国」墨田区横綱

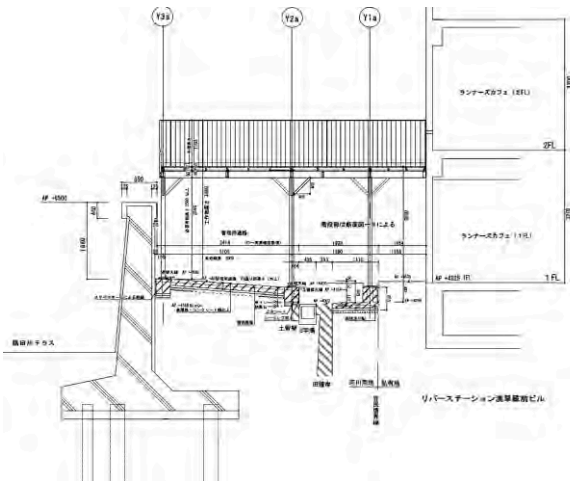
この社会実験の検証により2018年、上記の手続きや許可条件等をまとめた「かわてらす実施要項」策定し、桜橋から下流の隅田川のほぼ全域を対象エリアとして、更なる水辺の利活用を推進することに至った。

3. 「ASAGE CAFE 浅草蔵前」が誕生・その次は

2022年7月に本多健+阿部彰の設計により
 厩橋の袂に6つ目のかわてらす「ASAGE CAFE
 浅草蔵前」が誕生した。概要は下図や写真に示す内
 容で、本文での説明は省略するが、仏国の建築家
 Philippe Starck 設計のアサヒビール本社や隅田川
 を往来する松本零士デザインの観光船と東京スカ
 イツリーを眺める絶景スポットとなった。



かわてらす、隅田川テラス、隅田川の関係



◆ かわてらす断面図 設計：本多健建築設計室

◆ かわてらすの施設概要

建物名称：リバーテーション浅草蔵前
 所在地：〒111-0043 東京都台東区駒形2丁目1-5
 名称：ASAGE CAFE-カワドコCAFE & BAR-浅草蔵前
 前面道路幅員：6.0m (道路台帳改定前)
 建物用途：4階建(店舗+オフィス)
 河川敷地の地目：一級河川(隅田川)
 占用許可条件：隅田川かわてらす
 (かわてらす実測面積に依る)
 河川敷を占用する面積：47.44㎡
 かわてらす総面積：52.50㎡

◆ かわてらすの仕上概要

概 述：鉄骨造・基礎は鉄筋コンクリート造
 鉄骨の仕上：溶融亜鉛メッキ実施(手摺共)
 階床踏み板：フェックプレート 3.0mm 溶融亜鉛メッキ
 床材：パイン材 アセチル化木材 床板 145X22 裏地
 目隠し柵子：南栗色のみ パイン材 アセチル化木材
 10024 h=1400 縦柵子φ54

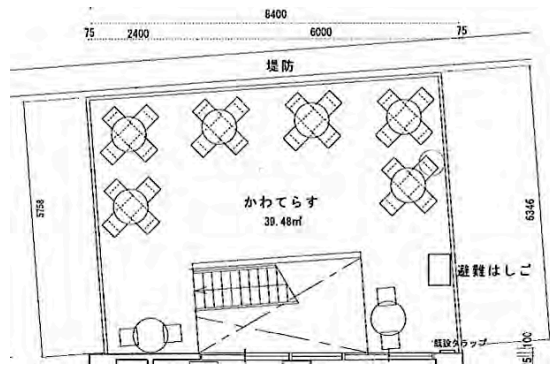
◆ かわてらす終了時の原状回復

かわてらすとしての占用終了時には、当該部分の工作物は全て撤去し、土留壁は復元し、管理用通路として原状回復を施す

この景色に浸りながら、東京の水辺のにぎわいづくりの将来について考察すると、隅田川沿いからベイエリアに至るまで、都市計画地域指定は商業地域と準工業地域であり、東京都提唱のかわてらすが目とする「人々が集い、にぎわいが生まれる水辺空間の創出」には最適と言えるのだが、現状ではマンション建物が多く、かわてらすひとつをつくるにも近隣対策に苦勞し、諦めたプロジェクトは少なくないと聞く。水辺空間とにぎわいが共存できるエリアは間も無く事業者募集が行われる築地市場跡地周辺以外に残されていないことを考えると、事業者選定を行う東京都には大きな期待を寄せることになるが、水辺空間のモデルとなる成果を期待したい。



かわてらす全景



◆ かわてらす平面図 設計：本多健建築設計室



ASAGE CAFE 入口



かわてらす夜景

法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員*1
 建築家・本多健建築設計室・芝浦工大非常勤講師*2

3 アーバンとルーラルの対と融

(2022年度報告会 第2部)

1. 「アーバンとルーラルの対と融」～テリトリーと今日的課題

陣内 秀信 (法政大学名誉教授／特任教授)

2. 懐かしい未来に向けて～地域循環を取り戻す～

石神 隆 (法政大学名誉教授)

3. 地域からの発信で活性化する～イタリアとあわら温泉の事例から～

小堀 哲夫 (法政大学デザイン工学部建築学科教授)

4. パネルディスカッション「アーバンとルーラルの対と融」

パネラー：陣内 秀信 (法政大学名誉教授／特任教授)

石神 隆 (法政大学名誉教授)

小島 聡 (法政大学人間環境学部教授)

根崎 光男 (法政大学人間環境学部教授)

木村 純子 (法政大学経営学部教授)

小堀 哲夫 (法政大学デザイン工学部建築学科教授)

司会進行：高見 公雄 (法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科教授)

※所属は 2023 年 3 月当時

「アーバンとルーラルの対と融」～テリトリーと今日的課題

陣内秀信

都市と農村の連携が当たり前だった

今回のテーマは「アーバンとルーラルの対と融」です。これまで都市とその周辺に広がっている田園や農村を含めてテリトリーだということで議論してきたわけですが、なかなか伝わりにくい面がある。もうちょっと心に響くような、あるいは日本の空間のなかでも伝える努力が必要なのではないかというディスカッションのなかから、このタイトルが出てきました。その問題意識をご説明します。

まずこの絵を見てください（図1）。こういう問題を考える上で一番象徴的な絵画で、トスカーナにあるシエナという都市の市庁舎の壁画です。住民みんなが賢い政府を選べば、こんな素晴らしい都市と田園が生まれるよということを示唆しているんですね。中央に市壁があって、左が都市、右が農村。お互いに支え合っているわけです。都市が農村を支配するんじゃないんです。農村が豊かに繁栄すれば都市も栄え、都市が立派になると農村も経済的に豊かになるということです。これが本当に理想なんですね。イタリアには、こういう概念があるんです。

もう一つ、これも示唆的なもの（図2）。ペルージャという、サッカーの中田が最初に行った町の中心に高台の広場があって、そこにこういう有名な噴水があります。中世の中期につくられたものです。一番下の段に、十二か月の象徴的な労働のシーンが描かれているんですね。農村での人々の農耕に関する、あるいは生産に関する作業を表しています。つまり前近代では、都市と農村は連携しているというのが当たり前だったわけですね。

ところが近代、そして現代においてはそうじゃなくなった。グローバルゼーションで、まったく逆の方向に行ってしまった。

僕も前から親しくさせてもらっている三浦展さんは、このこと、つまり全国どこも同じになってしまって、都市の中心が疲弊し、シャッター街になって、同時に沿道に大型店舗が並び、田園も魅力を失うという状況を「ファスト風土」と表現しました。ファーストフードと和辻の風土を重ねたダジャレですね。もう10年ほど前のことです。



図2 ペルージャのフォンターナ・マッジョーレ
ニコラ・ピサーノ、ジョヴァンニ・ピサーノ
1278年



図1 図1 A. ロレンツェッティ「都市と田園
における善政の効果」 14世紀前半 シエナ市
庁舎壁画

なんでもない田園が世界遺産に

実は、これと同じような問題意識がボローニャにもあったんですね。80年代、チェントロ・ストリーコという歴史的な街区が70年代から評価されてよみがえりました。そのあと田園に、そしてテリトリーオへ。この歴史的な都市を蘇らせた都市の助役だった建築家のチェルヴェラーティという人が州の都市・地域政策のトップになって、もうちょっと広い視野でテリトリーオ全体のバランスを考え直さないといけないんじゃないかという問題提起をしたわけです。つまり、都市がどんどん拡大してスプロールして、田園を侵食する。都市の中心がよくわからなくなる。それから境界線が失われる、アイデンティティがなくなる、そういうことを提起した展覧会が80年代に行われました。

実際は、都市の中心が魅力を持たなければいけない。アーバニティーですよ。そして田園が田園の魅力をもう一度復活する、という、その二つのベクトルを上手に組み合わせて展開しなきゃいけない、ということなんです。幸い80年代には小さな、あるいは中規模のイタリアの街が元気になり、それが単に景観をキープしただけじゃなくて、むしろそこが新しい産業、特にファッション、デザインを中心とした中小企業、家族経営の活動が活発になってトレヴィーゾとかコモというのが本当に重要な町になったわけです。

同時にそれらの都市の回りの田園が再評価された。91年に再びヴェネツィアを訪れてヴェネト州の都市を調査したんですけど、そういう動きが80年代に展開していて、その結果がこの写真のように(図3)、こういう田園の農場を改装したようなレストランです。ちょっとおしゃれな食事をするときには、みんなこういうところに行くようになっていた。これ91年の写真です。

その後、田園を評価する、ルーラルな価値の再発見の動きがどんどん進むのですが、これはやっぱり外国人が先にその点に気がついてくれたわけですね。それで地元の人も、そうか価値があるんだなって気がついて、五つの自治体が連携してオルチャ渓谷というのが世界遺産に登録されました。なんでもない田園風景が世界遺産になるという、人類史のなかで画期的なことが起こったと僕は評価しています(図4)。

同時に大きかったのがスローフードの運動です。なかなか日本にスローフード運動の根本的な価値が伝わっていないんじゃないかと思うんですが、これは文明批評です。どんどん都市が巨大化して、しかもグローバリゼーションになっていって、アメリカ型の消費、大量生産、大量消費で、土地とのつながりを失い、という状況に対してのアンチテーゼとして、もう一回自然とのつながり、田園と都市のつながりを取り戻そうという流れのなかでの食ですよ、地産地消。それを謳ったのがスローフード運動で、これは非常に重要な役をしているはず。それをまちづくりに持っていったのがスローシティ運動です。

アーバンとルーラルの交流の実際

学生時代に留学したときから知っている南イタリアのプーリア地方とい



図3 田園の再発見
田園での食事が新たなライフスタイルに



図4 トスカーナ、オルチャ渓谷では5つの小さな街 comune が連携して、2004年に世界遺産登録が実現した

うのが、この20年くらいのあいだに、地元の自然、歴史的な蓄積、豊かな土地が生み出す農業生産物、そういうもののクオリティを上げて、すぐく元気になってくる、私はその状況をずっと目撃してきました。農地・田園というのは、従来は第一次産業の場で、農業生産物をつくる場だけだったけれども、いまやそうじゃない。多様な役割、価値、つまり景観・環境・生態系・生物多様性・文化的価値・食文化、生き甲斐、ツーリズムなど21世紀的なフェーズで人間にとって重要なあらゆるものを田園が提供してくれるということです。

華やかさ、楽しみ、文化創造、発信、こういうものをアーバンな舞台が提供してきたんですが、一方でルーラルなものは単に第一次産業の生産の場だけじゃなくて、このような大きい価値をいま持っている。いまやある意味で、ルーラルが創造的な要素も持っているという時代に来ているということを感じます。

これはブルネロ・クチネリさんです(図5)。この人はまだ若いんですが、ラグジュアリーなデザインの会社を立ち上げているんですね。それで、奥さんの地元であるウンブリアの、中部イタリアの小さな村に本社も工場も移しました。このことの意味はなにかというと、これまで農業そのものの多面的価値というのを言ってきたわけですけど、同時にファッション・デザインの分野でもこういうところを舞台に新たな価値を生み出す、ということです。日本でも新潟の大地の芸術祭とか瀬戸内でアートを通じて過疎の村を蘇らせるというようなことをしていますが、こっちはアートではなく、イタリアらしいデザイン、ファッションの生産を行う舞台を村に埋め込んだということです。14世紀の建築、お城を購入してそこを本社にして、たくさんの方の人たちを雇用する。こういう土地で事業展開することの可能性を切り拓いて、地元へたいへんな貢献をし、こういう美しい風景をもう一回再評価する活動にもなっているわけです(図6)。

去年9月に木村先生たちとも一緒して、アマルフィ海岸の調査に行ったときには、もう一度そういう視点で見直してみました。ご存知の通り、アマルフィは文化的景観、街だけでなく回りの農村や自然も含めて、そのテリトリー全体が世界遺産になっているところで、これは世界で最初の試みだと思うんですね。そのなかにラヴェッロという素敵な中世からの街があります。これは街、アーバンなんですが、13世紀の、アラブの影響を受けたヴィツラがあったりしてルーラリティもある、そういうところ(図7)。その街の背後にトラモンティという地域があって、ここは小さな村が13くらい連携して自治体になっています。そこで伝統を生かしながら本当にさまざまな農業生産が行われています。アマルフィ海岸の西奥の山間部には、4つの地区からなるアジェロラというルーラルな地域があり、やはり農業・牧畜とその農産物の加工生産が活発です。アマルフィ海岸全体でワイン、リモンチェッロ、それからプチトマト。こういうのがいまや輸出産業にまでなっているんだそうです。アジェロラのプチトマトを乾燥させて保管してパッケージに入れてクリスマスのプレゼントにする、というのがアメリカで売れているらしい。つまりルーラルなところで、ちょっとアーバンなセンスも入れながら、自分たちの伝統的なものに



図5 ブルネロ・クチネリ (BRUNELLO CUCINELLI)



図6 ブルネロ・クチネリ本社。14世紀に建築された城を修復し、美しい風景をそのままに新たな経済活動ができることを示した



図7 ラヴェッロのヴィツラ・ルフォロ 13世紀の建築

付加価値をつけて、輸出産業にまでする。また、さらにこのトラモンティの山奥、本当に中山間部、日本で言えば限界集落のようなところでも、家族経営でソフトチーズ、フィオル・ディ・ラッテっていうんですけどね、モッツアレラ的一种を牛のミルクからつくっている。一度停滞していた家業を、がんばって復興させて家族でやっている、と。本当に生き生きとしていて、キロメートル・ゼロの、まさに実践者で、地元の口コミで販売したり、キロメートル・ゼロのマーケットに息子が車に積んでいって売っているそうです。つまり輸出するものもありながら、基本はこのアマルフィ海岸に観光で訪れる国内外のお客さんに売っている。こうやってアーバンとルーラルが本当に近いところでお互いに交流している様子が、調査をしてよくわかりました。

テリトリーと日本の特性

それで、東京ではどうかということを変更して考えてみたいと思いますが、建築の分野で大きなヒット作となった川添登の『東京の原風景』という本がありますね（図8）。1979年に出版されています。ここでは、東京の山の手、江戸の山の手、つまり巣鴨や染井は緑と花であふれるところで、田園的な風景をずっと持っていた、と、アーバンとルーラルの融合を見事に訴えていました。ちょうどコンクリートジャングルのイメージがまだ抜け切らなかったところに、東京というのは実はそうじゃない姿もちゃんと持っていたんだよ、ということアピールした、東京論のなかですごく重要な本なんです。

また、福井先生、米家先生がずっと研究してくださっている広重の名所江戸百景の分析からも、そのまなざしがルーラルのほうを向いていることがよくわかります。もちろん都市、アーバンなところを対象にしているものもあるけど、多くがルーラルなものに非常に関心を向けている。都市の外側のランドマーク、山や田園や自然風景を描いている。これは西洋とはだいぶ違う感性を持っていて、日本人は本来、ルーラルなものへの親近感をすごく持っているんじゃないかなというふうに思うんです（図9）。

また、客員教授で去年 Olimpia Niglio 先生が福井先生の招きで法政で教えてくれていたんですけど、彼女が法政のゲストハウスに泊っていておもしろいことを言ったんですよ。この周りがルーラルな感じを持っているというんですね（図10）。ここは中野区の杉並寄りなんですけど、そういわれて周りを見るとたしかにルーラルっぽいものがたくさんある。生産緑地に指定されてがんばっている農家さんの活動があったり、祠があったり、本当にとびとびにけっこうあるんです。実はその延長上で、杉並もようやく、遅れていた都市内農業にも目を向けだして、地主さんから農家を譲り受けて、一回解体してその部材を使いながら農家風のものをつくり、そして畑を継承しながら農業と福祉、環境を全部一体としたような拠点をつくって活動をはじめました。杉並区としては画期的で、コモンズとしての可能性を感じさせるものが生まれたということですね（図11）。

一方で、私たちが以前から注目していた東京の西側のほう。今日も発表があった日野はもちろん重要なんですけれども、同時に都市農業という点



図8 『東京の原風景』川添登著 1979年 NHK 出版刊



図9 歌川広重『名所江戸百景』の目黒新富士。『名所江戸百景』では80%が水辺の風景を描いている



図10 法政大学向坂逸郎記念国際交流会館。宅地化・都市化して家が建て込んでもエッセンスが受け継がれる



図11 杉並区の新たな試み。農福連携農園「すぎのこ農園」

ではむしろいまリーディング的なポジションにいる一つが国立だと思えます。重要なのは、JR 国立駅よりもっと南の谷保ですね（図 12）。図 13 で示したように崖線のところに重要な古代、中世の神社、山城、寺院などがあって、その下に「はたけんぼ」という、都市農業のリーダーの方が農場を開設しています。小野さんというんですけど、本も出していて、都市農業の可能性について述べられています（図 14）。本当にアーバンとルーラルの接点なんです。さらに谷保には南武線の駅があって、駅前の商店街はさびれていたんですが、むしろそこにいま光が当たっている。古い街のなかの商店というのは、テナント料が安いので若い人でも出店しやすいんですね。ここに地産地消をベースにしなが、いいお店、おもしろいお店ができてきた。シャッター通りだったところが少しずつシャッターをあけて、サロン、カフェを兼ねた設計事務所、さらに素敵なスナックも誕生したんです。ママさんは一橋大学の社会学部を卒業したばかりの女性で人気のママさんになっています。こうしたお店に農業やっている人も来る、おもしろい活動も始まる。つまり背後に農業ゾーンがあって、ルーラルとアーバンが一緒になっているわけです（図 15）。

日野もルーラルとアーバンが一緒になっているところですね。図 16 は航空写真ですが、耕作地と住宅がモザイク状になっているのがわかります。こういうものを我々は否定的に見てしまいがちですが、ローマ大学の Paola Falini 先生、オルチャなどを世界遺産にした立役者ですけど、彼女は「これはこれでユニークで素晴らしい田園都市だ」って言ったんです。農地のまだら構造というより、居住地のあいだに農地が入っている。そういうふうに見てもいいんじゃないかって。

このほかにも国分寺で展開されているランドスケープの人たちの活動や、銀座のミツバチプロジェクトなどおもしろい活動はいくつも、そしてあちこちで始まっています。

こういったことを踏まえてテリトリーオとはなんだろうと考えてみたいのですが、イタリアの Alberto Magnaghi さんは「共有資産」だとおっしゃっています。共通資産、つまりコモンズですね。はっきりこう言っちゃっていいんじゃないか、と。大中小の都市、集落、村落、農林業、環境システム、都市と農村のインフラストラクチャーなどから構成される、まさに生き物のような存在であるということです。アーバンとルーラルを、いままで分けてしまってきたけれども、そうじゃなくて日本の特性を生かして融合していくという可能性、ロジックは大いにあるんじゃないかというのが今日の問題提起です。

よろしく願います。

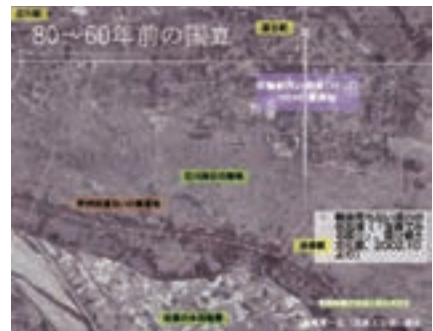


図 12 80～60年前の国立



図 13 崖線に沿う谷保地区の重要拠点



図 14 『東京農業クリエイターズ』小野淳著
2018年 イカロス出版刊



図 15 谷保で人気のスナック。ルーラルエリアを背後に持って、ルーラルが人を惹きつける



図 16 日野の航空写真。農地のまだら構造というより、居住地の間に農地の自然・緑・水が多く分散する

懐かしい未来に向けて～地域循環を取り戻す～

石神 隆

成城学園にはなぜ緑が多いのか

こんにちは。石神です。今日は「アーバンとルーラルの対と融」というテーマについて、普段考えていることをお話したいと思います。

まずこの写真、まさにアーバンとルーラルのイメージの一つかと思えます（図1）。イギリスのサフォーク州のカーギーという、もとは羊毛で発達した村です。アンウィンのスケッチでも描かれていたと思いますが、田園都市の一つの原型なのかもしれない、そんな趣のあるところです。

さて、今日はまず足元からということで、今住んでいる地元の話から始めたいと思います。世田谷区成城の地で長いこと自治会役員をやっていますが、あと数年で街がつくられて100年ということで、それに向けて現在いろいろな活動の準備を行っています。この地域は、もともと正にアーバンとルーラルのちょうど中間のようなところです。武蔵野の台地に街がどんなふうに出てきたのか、あるいは発展してきたのかについて改めて振り返りつつ、次の100年を展望しようということで、2024年から4年間に渡ってさまざまな行事や活動をするようになっていきます。

成城地域は比較的緑の多いところです。その緑が多いのは何故なのかという素朴な疑問があります。道にも銀杏とか桜とかいろいろ並木があるのですが、何故でしょうか。

100年前、新宿牛込の成城学校から、自由教育をしようと移転して、こちらに新しい学園ができるわけですが、そのとき同時に台地の雑木林のところを選んで区画整理し「理想的郊外住宅地」として分譲をするわけですが（図2）。もともと緑の多い地で、当初から緑が多く残されてきたのですが、その理由は要するに開発当時、周辺の農村の人たちが街の開発に疑心暗鬼だったからということのようです。その農村、つまり当時の喜多見村の人たちは、果たして台地に何が新しく出来るのかと、開発に首をかしげていたということでしょうか。台地が開発され、木が伐られてしまうことで、台地の下に田んぼを持つ喜多見のお百姓さんたちの懸念は湧水などの水が不足し困ってしまうということでした。それで都市開発側と農村喜多見のお百姓さんとがどうやって手を打ったかということ、街をつくってもいいが木を減らさないということです。開発したら道に木を植える、さらに、それぞれの住宅の敷地に木を残し、加えて新しい木も植える、つまり台地の緑を大切に守りますということで折り合いをつけたと言われています。

昔の地図を見ますと、開発前の大正末より前には雑木林、一部桑畑がほとんどでした。その雰囲気が開発後もずっと続いており、たとえば昔のスケッチ、特に丸山永敏という画家が描いた絵がたくさん残っていますが、緑の感じがよくわかります（図3）。喜多見側から見た崖線のスケッチを見ると、松の木がいっぱいありますが、こんな状況だった。この上を開発されてしまったら確かに田んぼが困ってしまう。農村側のそういう深刻な懸念が、結果的に緑豊かな街を形成していったというわけです。



図1 イギリス、サフォーク州の村カーギーの風景



図2 成城学園住宅地の初期分譲広告

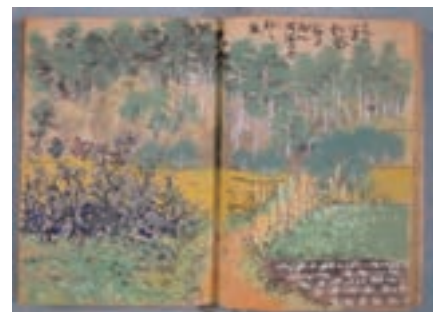


図3 喜多見から見た成城台地（国分寺崖線）
昭和20年代 丸山永敏

柳田國男と玉野井芳郎

このような、いわば都市と農村の間柄から成城のまちはスタートしたのですが、その成城の地がかつて、アーバンとルーラルについて考えた人がいました。その代表的な一人が、農政学者であり民俗学者の柳田國男です。その都市農村観については『都市と農村』（1929年）という約100年前の書物に示されています。書の中で、まず、中国の都市の周りには高い障壁があって、西洋も同様で、都市を外部からはっきり分けているが、そのようなものは日本には昔からなく、田舎と対立した都市は存在しなかった、との旨が記されています。そもそも田舎というのは、「田を作る為の家」のことで、「都市にいる者の側から、農戸を指していうべき語であった」と、田舎とは単に都市にいる人がつけた名前なのだ、とも言っています。

つまり、もともと新しく出来た都市の多くの人々の故郷は田舎で、田舎の人は田舎とは思っていなかった。「鄙」ではないと。都市と農村の問題というのは、都市と鄙の問題ではない、というわけです。鄙というのは野暮で下俗だという意味だと思われそうですが、農村は、都つまり京都と比べればたしかに鄙かもしれないけれども、一般的な都市、特に新しく出来た都市などと比べると決して鄙ではない、というわけです。

もともと日本の都市、たとえば城下町の場合、領主が人を集めてつくった。その後領主も変遷を得るが、一方の農村はずっと健在で、周辺の村に住む農民が、城下町の支持者として加担して行って、都市が成長したというわけです。その意味で、日本の「都市は外形上の障壁が無かった如く、人の心も久しく下に行き通って、町作りはすなわち昔から農村の事業の一つであった」と柳田國男は書いています。農村の事業の一つが都市だ、というわけです。

さらに、もともと日本には純農村と呼べるものはなかった、とも言っています。ここで純農村というのは米作りとかを専業にしている村の意味ですが、もともと農村は、「量はおかしい程少ないにもせよ、一戸で十五種二十種の作物」を作る添持（そえかせぎ）で、いろいろなものを作っていたというわけです。これがやはり、かつて農村が強かった理由のようです。現代に至り作物が商品化されてしまって、こういう農村は少なくなっているようですが、農村が相対的に弱くなってしまった原因かもしれません。なお、このような話を敷衍して内外の飢饉の歴史をみると、単一作物化、商品作物化によって農村が弱くなり悲惨な状況になった例がよくあります。

柳田國男は、『都市と農村』の最終節で、「事情が許すならば出来るだけ永く、今の一番よく調った農村の程度に止めて置きたい」、また、「農村の生計に幸いに余裕の出来た場合、地方地方に愛する都市があるということが、最もその余裕を味わうに適當なる機会を供する様にしたい」と希望を述べその著を結んでいます。生き生きとした農村と、魅力あふれる地方都市の併存を、国造りの基礎と見据えていたものと思われます。

もう一人、30年前に玉野井芳郎が農業観・地域観ということで、都市と農村の話をしています。玉野井芳郎も東大の教員になった1951年から1978年の退官まで当地に住み、成城の住みよさを考える会などというの

を組織していました。玉野井芳郎は『等身大の生活世界』（1990年）という著書の中で、まず「生産概念を問い直す」として、土地は単なる土地ではない、特に農業の場合には、土地のもつ力だと言っています。

「農業生産では地力概念が不可欠である。工業の場合には、生産が土地から切り離されるのでこの問題を回避しようが、農業ではそうならない」と述べ、「地力といえ、このような生きた土と水の生命力とのかかわりこそがまず最初に問われなければならないのだ」と強調しています。この意味で、「農業の世界を生命系の世界と呼び、工業の世界を非生命系の世界と呼ぶ」と明確に区分しています。

工業と農業、都市と農村の対立をどう克服するかについては、「これまでは、都市の方からアプローチして、農村を都市化するとか、田園都市をこしらえるかという発想だった。それを逆にする。つまり、大都市をバイパスして、農村や中小都市地域から、いのちを守るための新たな道をつける」と述べ、「近代に猫も杓子も狂奔してきた〈都市化〉とは別に、言うなれば、“農村化”いや“地域化”を展開する社会的運動です」と、都市化を超える動きが必要だと言っているわけです。

したがって、「生命系にかかわる農業、牧畜、林業、漁業など」を、「地域の視座から立て直し、それぞれの地域の自然素材を生かしきれるような技術を、既存の巨大技術とは別に考え、これを拡大していかなければ」と思うとつながっています。

そして、玉野井芳郎の一貫した主張でもある「等身大」の考えが出てきて、生活者、ヒューマンスケールという話になるわけです。風土的個性を尊重して一体感をもちながら、行政的、経済的あるいは文化的な独立性を追求するのだとし、「人間等身大の視座に立つとまさに生活者、その生活者は地域において土と水からなる日常性の生態的生活環境のなかで生命を生み出し、生命を育て、生命を守っている」というわけです。こういうことを、30年前に、既にたくさん書いているわけですが、この辺に、都市と農村、つまりアーバンとルーラルを考える上での一つのエッセンスがあるのかなと思っております。

田園都市からユートピアへ

都市と農村というと、田園都市のことに触れないといけないわけですが、以前、田園都市巡りというのをやったことがあります。田園都市については、その後の展開や発展の方向から、いろいろな評価があるようです。どちらかというとニュータウンにつながる形としての場合は、厳しい見方もあるようです。ただ、本来の趣旨は、その後の展開とちょっと違っていたのかなということをもっとも思います。

田園都市は、ご承知のとおり、都市と田園がうまく共存していくことを目指して、たしか1000エーカーの都市と5000エーカーの農業地帯、これの合体で1ロットということで32000人の規模でハードなどは考えたと思います。今から考えるとコンパクトシティとか、あるいは公共交通の指向とか、そんなことになるわけです。

イギリスの田園都市は最初のレッチワースや二番目のウエルウィンが有

名ですし、また、田園郊外として展開したロンドン市内のブレンサムやハムステッドも美しい住宅街になっています（図4）。

この田園都市の原型となったのが、ロウントリーのつくったニューイアーズウィック（ヨーク郊外）、ロウントリーはチョコレート会社の経営者です。現在はネスレになっていますが、有名なキットカットを発明したところです。それからリーバの造ったポートサンライト（リバプール近郊）、ここは石鹼会社ですね、現在のユニリーバに展開しています。さらにカドベリーのボーンヴィル（バーミンガム近郊）、ここもチョコレート会社ですね。あとはソルトのソルテア（リーズ近郊）、ロバート・オーウェンのニューラナーク（スコットランド）はいずれももともと紡織工場で有名です。

こうして前史を見てみると、みんな、ある種、心にやましいところがある経営者だったのかも知れません。何かというと、チョコレートはカカオと砂糖、石鹼はヤシ油、それぞれ奴隷労働の産物で財を成していたわけで



図4 ロンドンのグリーンベルト（計画図）と田園都市、田園郊外



図5 田園都市の前史としての展開

す。紡織の原料の綿花も同様だったと思われます。せめて工場の従業員には理想的な環境の住宅を提供しなくてはということだったのかと想像されます。一種の償いかも知れません。なお、チョコレート工場の経営者のロウントリーやカドベリーはクエーカー教徒ですが、こういうことをよく考えるのかとも思えます（図5）。

ということで、田園都市の結局行きつく先は、理想郷を求めてということで、ユートピアということになりそうです。そこでユートピア、理想郷とはいったいなんだったのか、とあらためて考える必要があると思います。イギリスにはユートピア思想というのがあって、ユートピア関係の本もたくさん出ています。多くは小説ですが、元となったのがトマス・モアのユートピア島です（図6）。

要するにユートピアを島ベースで考えると、非常に発想が湧くようです。島は孤立しており、すべてが自給で、資源も限定されている。それこそが想像力を掻き立てるのに必要な装置だ、そんなふう書いてあるものも多いのですが、やはり限定されているといろいろ知恵が湧く、そういうことだと思います。



図6 トマス・モアとユートピア島

地域循環の大・中・小

実は私も、ずっと以前、南九州で離島の仕事を担当していたことがあって、あちこちの島に行ったことがあるのですが、たとえば製糖会社に行って驚きました。この写真（図7）は与論島の製糖会社ですけど、全部自給なのですね。驚くべき自給システムです。サトウキビの殻を燃料にして蒸気タービンを動かしてキビの圧搾をする。出てくるのは砂糖と糖蜜で、糖蜜は黒糖酒になったりします。そして最後に残ったカスは肥料に使う。もう完全に使い切っているわけです。こういう一つの循環、地域循環というのは、島だからこそ出てくる知恵なのかなと思います。



図7 奄美の製糖会社（昭和50年代）

昔は日本全体が地域循環ですが、20世紀の例では、沖縄の地域循環の時期は興味深いものです。元沖縄国際大学の多辺田教授が分析されていましたが、戦後、1年間くらいですけど無通貨期というのがあったのですね、混乱状態でお金がなかったころです（図8）。このときには物々交換となった。そのあとはB円になる。B円というのはB型軍票、沖縄でしか使えない円です。このときには地域循環が成立して、地場産業がけっこう出てくる。その後、米ドルですね。米ドルといっても沖縄でなにかアメリカのものを買うわけにはいかないので、これも結局は地域通貨に近い。だから地域循環は続いていた。ですから昭和47年に日本に復帰したというのは、沖縄にとっては一種のグローバリゼーションなのです。それで円に包摂されるわけです。円に包摂されたとたんに、たとえば従来、地場産業の製品であった醤油とかそういうものが駆逐されてしまう。キッコーマンとか本土の大手の製品がどっと入ってくるからです。



図8 戦後沖縄の通貨の変遷

これは現在の観光産業もそうですね。沖縄のリゾート施設などを設計するのは東京の会社、鋼材とかセメントも本土の会社から。観光に来る人も本土の人、投資するのも本土の資金、ホテルでの食材もひょっとしたら本土から。まさにいくらお金が投下されても地域に回らない、いわゆるザル

経済になっている。地域循環していた時代を、模式的な絵にしてみました(図9)。一番小さいのが島で小循環です。小循環がかつてはとても太く、島のなかで回っていた。それが急速に逆転していったというのが沖縄の地域エコノミーです。

地域循環の例をもう一つ、練馬について述べたいと思います。練馬は中循環ともいえます。小循環がまだ生きていて、中循環もある。練馬はいまでも都市農業にけっこう熱心ですが、かつての練馬を考えると、都市近郊農業が盛んで、新鮮な野菜を都市に供給していた地です。需要条件はあったわけです。また、野菜の生産の条件として肥料が重要なのですが、この肥料の供給、つまり都市部からの下肥の供給も潤沢にあったわけです。下肥の金額ってけっこう大きく、ちょっと調べてみたら、大根の儲けと同じくらい下肥を使っている。そういう需給条件が整っていた。さらに発展条件として、特に大根など野菜は産地間の競争が激しく、競争があるから発展したという部分があるようです。大きな競争相手は葛飾などの近郊農業だったのですが、そこは土が違うので練馬の土にあった大根を主要品にした。さらに技術革新があつて、腐らないものをつくるようになる。干し大根とか、沢庵漬けです。これでけっこう練馬の沢庵というのは有名になって、その材料の大根もけっこう競争力を持つ。これは一種のローカルエコノミーで、小さい地域循環があつて、それから江戸や東京、つまり近くの都市とで中循環が成立していた(図10)。ただしグローバルな循環はあまりなかった、という、このくらいがどうも適度ではないかなとも思います。

一方で現代の象徴とも言える例を簡単に見てみます。学生とよく行っていた内蒙古ですが、そこに建設された大型乳業工場です。これはアジアで最大だと思えます。ひょっとしたら世界一かもしれません。もともと中国では牛乳を飲む人は少なかったのですが、90年代になって学生に牛乳を飲ませると政府が決めたとたんに、世界から大手がどっと入ってきた。ネスレとかテトラパックです。それで巨大な工場ができた。これ、ロボットによる全自動工場では雇用はあまり多くないようです。搾乳も完全ロボット化です(図11)。牛は数千頭の規模で飼う。ですから地域の草は食べさせられない。地域乳業は地域の草を食べさせるのが大事と思われませんが、エサは穀物を南米など、ひょっとしたら焼き畑から持ってくる。このようなことをやっているわけで大変にグローバルです。投下資金もウォールストリートで上場している。なおかつできた製品は集中、大型工場ですから広い国土の需要地に運ぶという。ロングライフのパッケージが必要でこれは彼地のテトラパックが儲かるだけです。この場合は、グローバルのほうが大きくなって地元循環は非常に小さい形です(図12)。これは一つの工場の例でしたが、このような姿は、広く現在の経済を象徴しているように思えます。いま日本の食料自給率は、カロリーベースで38%くらい、肥料や燃料を、さらに労働力(6割のカロリーが外国産食料による)など加えれば相当に自給率は低いわけですが、現代は、すべてがこのような状況になっているということなのかもしれません。

こういう動きに対抗する例も一つ出しておきます。グローバル・エコノ



図9 かつての沖縄のローカルエコノミー
地域内小循環が太く、グローバル循環は細かった



図10 かつての練馬のローカルエコノミー
地域内小循環とともに中循環も活発、グローバルな循環はほぼない



図11 内蒙古の大型乳業工場の自動搾乳風景



図12 内蒙古のローカルエコノミー
グローバルばかりが太く、地域循環は少ない

ミーに対抗しようという、そういうタイの農村の例です。これも学生と訪れた例ですが、地域では、ちょっと甘いお米のお菓子とか魚醤のナンプラー、また、有機米も作っていますし、そのための有機肥料も作っている。たとえばナンプラー、これは大都市バンコクには出さないそうです（図13）。なぜか。いままで自分たちはバンコクやあちこちから、それを買っていたのだけれども、それを地域内部循環にしているのだということです。それで、地域の人たちが食べるための一番美味しいものをつくるのだと。他所には余ったものしか売らない、という発想です。

これは、一種の輸入代替あるいは移入代替です。外部循環を地域内部循環に置き換える。これはたしかジェイン・ジェイコブズが『都市の経済学』で言っていたことで、輸入代替することによって、地域が豊かになるという話そのものです。ローカルエコノミーの復興で、こういう頑張っているところもあるわけです（図14）。

「懐かしい未来」に向けて ～自分で制御できるものを取り戻す～

今いわゆるソサエティ 5.0 の時代に入ると言われています。グローバル化や ICT、AI 活用の時代はいわば必然の急速な流れですが、そこでどうするか、ということをよくよく考える必要が出てきたことは言うまでもありません。

いろんな方向があると思いますが、一つの道のりとして『懐かしい未来』という本を眺めたいと思います（図15）。インド最北部ラダックの地域経済の変化のレポートです。ここで何が述べられているかということ、要するに地域から生まれたものに直接触れてみるのが大事で、自然のなかに身を置くというのは非常に重要だ、と。柳田國男は農村の豊穰、豊かさということを言いました。本当に豊かだし、そこに身を置いて深いレベルで地域とつながりを持つという、そういうことが本当の豊かさだ、と書いていました。この『懐かしい未来』で語られるローカリゼーションの幸せの経済学も同じような話です。人々や自然、場所とのつながり。これをもう一回蘇らせる中に、安心して将来が見える、安心して暮らせる未来というものを考えるということです。ラダックはもともとそういうところだったのに、グローバリゼーションで商品化経済が入って、いろいろガタガタになっているのが現在。それに対してまた「懐かしい未来」を取り戻そうという話です。

最後に、個人的にはどうするかということも問題です。

『単純生活』（明治38年訳）という、その昔、シャルル・ワグナーという人が書いた本があります（図16）。その一部には次のように書いてあります。

「今日の大機械の車輪は殆ど無限に精巧なり、僅少の不注意不熟練、怠慢の為に甚だしき損害を生ず。其存在の程度は実に之より一層不完全なる過去の機械に依て生ずる者より遥かに大なり。故に精巧なる機関を運転す可き人の品性は深く之に注意するの必要あり」。

要するに、自分で扱いきれないモンスターを我々は扱っている。ソサエティ 5.0 そして AI もそうかもしれない。自分が知らず知らずそういう世



図13 タイ農村でつくられるナンプラー（魚醤）



図14 タイの農村のローカルエコノミー 地域内での小循環を取り戻そうとしている



図15 『懐かしい未来 ラダックから学ぶ』ヘレナ・ノーバーク＝ホッジ著 2018年 懐かしい未来の本刊（初版は2003年、山と溪谷社刊）



図16 『単純生活』 Charles Wagner 著、中村嘉寿訳 1905（明治38年）（仏語初版1895年）

界に入りつつある。あるいは組み込まれつつある。そういう時にこそ、改めてもう一回、自分で制御できる、自分と関係ある、そういうものを取り戻すことが必要なのではないか、と100年以上前の本で書かれています。都市と農村、アーバンとルーラル、のテーマに触れるとき、あらためて現代文明とは何か、どう対応するかということを、考えざるを得ないようです。

ありがとうございました。

地域からの発信で活性化する～イタリアとあわら温泉の事例から～

小堀哲夫

田園と都市をつなぐデザインの力

小堀哲夫です。現在、法政大学のデザイン工学部で教えながら設計事務所をやっています。建築の設計をしていると地域のことを調べることも多いです。また建築の材料や家具あるいは工場検査など、いろいろなものを見に行く機会が多くて、それが都市と田園というものを考えるきっかけにもなっているのかな、と思っています。

設計の仕事でオフィスをつくると、イタリアの家具と向き合う機会が多々あります。イタリアの家具がほしいという話がよく出るんですね。それでイタリアの家具のデザインを参考にしながら自分たちで設計して、イタリアの家具職人につくってもらおうということをよくやっています。

そういうきっかけで、ついこの前、イタリアとドイツに行ってきました。イタリアの家具メーカーは、北イタリアの、スイスとの国境に位置するブリアンツァ地方に集中しています(図1)。我々がよく知っているカッシーナとかモルティーニとかビーアンドビーとかユニフォーとか、いろんな家具メーカーが全部そのあたりに集まっている。その理由を聞いてみたら、スイスから良質な木材が手に入るということがまずあって、スイスの近郊には多くの家具職人や工業の生産者がいっぱいいたんですね。それが、戦争に負けて散り散りバラバラになったときに、なにかしないと自分たちの職がなくなるということで、ミラノサローネを企画するんですよ。それがすごくおもしろいと思ったんですね。

私たちは、こちらでデザインした家具をつくってもらっている、1934年創業のモルティーニグループ(図2)というところに行きました。ここはイタリアで唯一、いまだに一族が経営しているところです。カッシーナもアメリカの資本が入ってしまいましたし、いろいろ外国資本が有名ブランドをどんどん買ったなかで、このモルティーニさんはがんばっている。彼らは豊富な木材が後背地にあるので、ここを拠点にして、コモあたりに集中的に工房をたくさんつくっていました。

アンジェロ・モルティーニさんが創業して、息子のカルロ・モルティーニさんがさらに大きな工場をつくって、現在はお孫さんのカルロ・モルティーニさんが社長さんになられています(図3)。それで2代目のカルロ・モルティーニさんがミラノサローネを企画する。もちろん彼一人ではなくて、近隣の家具職人さんや家具会社の人たちと企画していく。これはどういうことかという、もともとミラノがどんどん都市化して行って、家具や建築、ファッションなどが急速に発展していくなかで、自分たちがそこに展示場をつくることで大きく世界にもつながっていく、さらに自分たちの産業もつながっていくんじゃないか、ということがあったんですね。技術の研鑽の場とビジネスをうまく融合させて、単なる展覧会ではなく、自分たちを守るためのミラノサローネというものを企画していくところが、非常におもしろいと思いました(図4)。



図1 ブリアンツァの位置



図2 モルティーニの労働者たち(1947年)

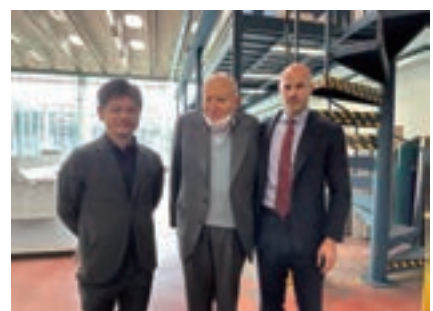


図3 カルロ・モルティーニ氏(右)



図4 ミラノサローネ(1961年)

それで次に彼らが何をしたかという、自分たちのプロダクトを建築家に頼んでいくんです。工場をアンジェロ・マンジャロッティに頼んだり(図5)、家具をアルド・ロッシがデザインしたりします。つまりイタリアでは、建築家が田園と都市をつなぐ立役者として大きな役割を果たしている。デザインの力がつなぎ役として大きな役割を果たすんだ、ということを感じました。

コモでキロメートル・ゼロを実感する

その後、すごくいいブランドがあるから来いと言われて行ったのが、バルサミコ酢の製造地として知られるモデナというところ。モデナのバルサミコが本物で、ほかは実は醸造酢なんだ、というわけです。

バルサミコ酢は、ランブルスコというブドウからできるもので、もともと喉の薬なんだそうです。それで子どもが生まれたら一つ樽をつくる、と。それを熟成させて毎年減ったら次の樽に移していくという、とても手間のかかった工程を経てつくられる。図6でバルサミコ酢の樽がずっと並んでいます、一家族一列です。これ、だんだん小さくなっていくんです、熟成して。子どもが大きくなるまで風邪の喉薬として使いつつ、どんどん熟成させていくと、その家の一つのブランドになっていく。とてつもない時間なんですよ。いまのバルサミコというのは、化学調味料なのですぐにできちゃうんですけど、これはそうとう時間をかけるので高いわけですよ。でも、話を聞いているとだんだん年代物がほしくなるし、さらに本当においしいんです。工程を見学したあと、2階で料理をふるまわれるんですけど、なんというか、とろりとしている、熟成したねっとりとした食材で、実際に味わってしまうと、やっぱり70年物を買っちゃうんですよ。2万円とかするんですけど、みんな買っちゃう(笑)。

これも時間というものが一つのブランドになっていて、時間が長いからこそ価値があるということを教わりました。また、瓶のデザインを建築家も含めていろんなデザイナーがデザインしていて、ここでもやっぱりデザインと産業や農業がうまく融合しているなと感じました。

モデナに行ったあと、コモのほうに移動します。コモに行くなら、コモ湖の近くの農村に泊って、一回アグリツーリズムを体験したらどうだということで行くんですけど、そこではキロメートル・ゼロというのを徹底的に言われました。とにかく1キロ圏内ですべて取れるんだよ、と。コモの近くのスキニャーノという小さな農村なんですけど、農家が一つひとつ小さなホテルになっているんです(図7)。食べ物を出してもてなしてくれるわけですが、素朴といふかなんといふか。チーズは近くで飼っているヤギのチーズで、ブドウもワインもあっちの畑でできたブドウで、という感じですべて地域のを振るまわれる(図8)。別に大したおもてなしというわけではなくて、そっけないんですけど、むしろそれが心地よくて、すべてがキロメートル・ゼロなんだということを感じました。

温泉という地域資源を見える化する

こうしたイタリアでの経験を踏まえたうえで、自分たちのプロジェクト



図5 アンジェロ・マンジャロッティの設計による本社



図6 樽に詰められたバルサミコ酢一列一家族。樽は毎年詰め替えられ、熟成して少しずつ量が減っていく

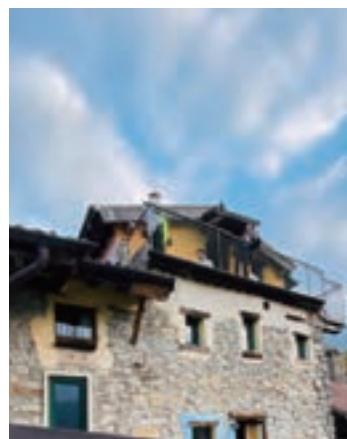


図7 スキニャーノでのアグリツーリズム。小さな農家がそれぞれホテルになっている



図8 地元の食材でのおもてなし

の話に移ります（図9）。

実はイタリアの旅をする前に、あわら温泉という温泉旅館の設計をすることがあって、そこで実はテリトリーオということを実感するようになっていました。陣内先生とも、テリトリーオとはなんぞやということを徹底的に議論して、行きついたのは温泉という地域資源が一つのコモズになっているということでした。そこでまず、この旅館という場所がどれだけネットワーク化されているのか、ということの分析から始めました。

べにやというのはもともと田んぼのなかに雪が降らない地域があって、穴を掘ったら温泉が出てきたという、特異な場所なんです。福井県では唯一の温泉です。べにやさんはもともと三国というところで北前船で運ばれてくる紅粉を売っていた廻船問屋で、当時でも長者番付の1位2位を争うようなお金持ちだったんですけど、北前船がなくなって、これから鉄道の時代だということで福井駅ができると同時に温泉旅館として移住してくるんです。それが140年続いて、老舗旅館として数寄屋造りの建築で営業していました。ところが、3年前の5月5日に大火事で全焼してしまったんですよ。僕はちょうど燃える半年くらい前に泊ったことがあって、火事のお見舞いに行ったんですけど、そのときに実は設計をどうしたらいいかというので相談されたのがきっかけで、設計することになったのですが、140年の歴史があって、有形文化財にもなっていた温泉旅館の後の計画で、我々はなにをすればいいんだろうと思ったんです。周囲を見渡したときに、バブルの頃に建てられた高層の温泉旅館のなかには潰れて廃墟になっているものもある。実は温泉産業というのは衰退しているんですよ。その風景を目の当たりにして、これからどういう温泉がいいんだろうか、なにをすることが地域にとっていいんだろうか、ということで、最初、ワークショップをやって、いろんな人に来てもらいました。

そしたら温泉をつくるワークショップなのに、農家の人とか蕎麦屋さんとか卵を売っている人とか豆腐屋さんとか、来るわけですよ。みんな、温泉旅館に品物を卸しているんですよ。それで、温泉という場を通して地域がかなり循環しているということに気づいたんです。べにやさんはもともとそれをすごく守っていた。食材なども地元の農家さんから買っていたんです。そこで私たちはもう一回温泉という熱をうまく建築として使おうというのはもちろんのこと、つくrikataそのものを考えていこうということで、建材の産地とか地元の職人さんなどにこだわって設計を進めていこうと考えました（図10）。

ただ、そういう方針で基本設計を終えたときに見積もりを取ったら予算の5倍くらいになることがわかりました。つまり残念なことに建築の業界においては、もう地産地消というのはほぼ不可能だというのがわかった。それでやむなく変更した部分もあったんですが、1階建てにしよう、平屋でいく、という我々の提案は残しました。もともと平屋だったので、思い切って平屋にしましょう、と。それから、以前のべにやが持っていた、増築増築を繰り返した迷宮のような空間をつくるということをやってみました（図11）。終わったあとには、携わった地域の人たちやもちろんゼネコンの人たちも、全員棟札をつくって屋根裏に入れておこうということ



図9 べにや～田園のなかのあわら温泉



図10 設計時のコンセプトスケッチ



図11 竣工したべにや

やったり、つくられた経緯やその場その場で起きていたものを我々としてはもう一回記録し、発信していこうとしています。

建物とともに「場」もデザインする重要性

もう一つやったのが食です。一人ひとりインタビューしたんですね。どういう人が、どういう思いでつくっているのかということ掘り下げていったんです。おもしろいなと思うことがけっこうあって、たとえば越前ガニ。越前ガニって殻がゴミになるんですが、その越前ガニの殻を粉砕して肥料にしていくという試みをしていて、「カニ殻トマト」ってもうブランド化しています。非常に栄養価が高いうえにカニ殻には細菌を寄せ付けない殺菌能力もあるそうです。図12はおけら牧場です。ここは卵とかブルーベリーとか全部有機農法で食べ物をつくっている。そういうものを使った料理がべにやさんでは出てくる、と。朝食なども、なにげない朝食なんですけど、すべてそういう地元のもののでつくられているんだというのは、わかるとなぜかおいしく感じます。一つひとつ説明してくれるんですよ。これがやっぱりすごく贅沢なんだなということを感じますよね。それで、これをもう一回ブランド化しようということで、いまべにやさんはテリトリーオというテーマで、温泉街を復興させようとしています。

その一環として最近沢庵ワークショップというのをやりました。我々、設計の段階で5回くらいワークショップをやったんですけど、竣工後も年に2回くらい、べにやさんにワークショップをやらせてもらっています。これは僕たちが離れた後も、べにやさん主宰で若者たちと一緒にやる、ということです。沢庵ワークショップでは、大根掘りからやって、それを全部一つひとつ手洗いして干す。干したあと、その干されたものをどう漬けるかということをもたワークショップでやっていくわけです。そうすると、食べ物がどうやってできるのかというのを、従業員全員が感じ始めるんですね。こういうワークショップを通して、食材が地域とどうつながっているかということを感じながら、最後に勉強会をするっていうことをこのときはやりました。

このプロジェクトをやって、建築というものが単なるオブジェクトではなく、そこで起きえる場も一緒にデザインしていくということは非常に重要だなと改めて思いました。また、おもしろいなと思ったのは、地域の資源を探して回り始めると、地元の人たちも独自で動き出すんですね。沢庵ワークショップの後、お味噌もやったそうなんですけど、地域の人たちを巻き込んでやっていこう、と。このほかにもべにやの部屋着を有名な越前和紙でつくってみようというようなこともやっています。こういう地域の資源をどうデザインしていくか、デザインと建築でくっつけていくか、地域のブランドを織り上げていくかが、非常におもしろい大切なことなのかな、と思っています。

以上です。ありがとうございました。



図12 あわらテリトリーオの生産者の皆さま
(写真提供：Hudge)

パネルディスカッション

アーバンとルーラルの対と融

パネラー：陣内秀信、木村純子、小島聡、根崎光男、石神隆、小堀哲夫

司会進行：高見公雄

「第四のイタリア」はあり得るか

——第2部の前半で、陣内先生と石神先生と小堀先生にお話をいただきました。その内容に関連するようなお話があれば、話を広げていきたいと思えます。もちろん質問やご意見でもけっこうです。まずは木村先生からお願いいたします。

木村 経営学部の木村純子です。たまたま先週、アメリカに久しぶりに行ってまいりました。アメリカは今日の陣内先生のお話のなかでも大量生産、効率化によって競争力をつくってきた経済大国であるというイメージでしたが、今回、アメリカのウィスコンシン州という酪農で有名な州で調査をいたしまして、一つわかったことがあります。それは、競争力を上げるために大量生産をしたから地域性を失ったのではなく、地域性をもつということがそもそもアメリカ人にとっては絶対にしてはいけないということです。アメリカとヨーロッパの貿易戦争を見ていただいたらわかるのですが、ヨーロッパでは、たくさんのお産地呼称や地理的表示が示すように地元でしかつけれない、モデナのバルサミコ酢もそうですね、そういったものを保護します。地域性を大切に、あるいは地域に根ざす、根づいているのがヨーロッパです。それに対してアメリカは、そもそもヨーロッパの人たちが移民として渡って行って、自分たちが知っているチーズの作り方でつくって、そのチーズをゴーダやパルメザンと言ってしまった。あの人たちが地域、つまりこのウィスコンシンの風土、あるいはこの地域の特徴があるからこのチーズができると言った時点で、ヨーロッパの土俵に乗ってしまって、貿易交渉で負けてしまうのです。ですからチーズなんてどこでつくっても同じであると言いつけられないわけですね。これは今回、すごく大きな発見でした。アメリカは歴史がないからってふたこと目には言いますが、すでに300年以上の歴史はあり、そろそろ地域性が出てきてもいいはずなのに、絶対に地域性を持つてはいけない。ですからアメリカのアイデンティティのつくりにくさといえますが、もがいているような印象を持ちました。

それに対して、イタリア、特に南イタリアというのは、地域の特色を守り続けている人たちです。先ほどの陣内先生のご報告のなかで「第三のイタリア」という言葉が出てきました。南イタリアのカンパーニャ州が北の「第三のイタリア」とはまた違う新しいイタリアになっている、「第四のイタリア」という言い方は聞いたことはありませんが、なにか一言で表現できるとすれば、どういうふうに言えるのかお聞きしたいなと思いました。

陣内 「第三のイタリア」ということがあって、じゃあナポリ周辺の動きは、あるいは特徴はどうかということなんですけど、まず「第一のイタリア」と「第二のイタリア」についてお話ししましょうか。ミラノ、トリノ、ジェノバ、これが産業の三角地帯というか、戦後のイタリア経済を引っ張ってきたところなんです。フィアットやオリベッティなど文化性のあるところもあるけど、石油化学コンビナートとかあるいは製鉄とか、大規模な工場、企業で、政府が応援する、そういうのが「第一のイタリア」ですね。北イタリアです。それに対して、第二というのが南のほうのことを言ったんじゃないかと思えます。ローマ以南、ローマが入らないとすればナポリ以南の遅れた、本当は歴史があるし、重要なんだけど、近代化で取り残されて効率が悪い、生産性が低い、遅れている、封建的、マフィアもいる、そういう、ちょっと足を引っ張っている感じのところを「第二のイタリア」と言った。「第三のイタリア」は中北部なんですけれども、新しい産業、バルサミコ酢というお話がありましたけどモデナとかその辺も含めて、ベネト、ロンバルディアの一部、それからコモ、ミラノもちょっと入る。それからエミリアローマニャなどが台頭してきて、70年代に仕込みをやって、80年代に開花した。小さな会社で、ファッション、デザインなどの分野でイタリア人の創造性のある能力を発揮した、と。そういう80年代のイタリアの動きが、いまのイタリアに通じる新しい道を切り拓いたと思うんですね。いわゆる工業化とか生産性追求とか大規模なものじゃない、クオリティで勝負する。

そして土地らしさを大切に、都市の魅力も回復した。歴史も重要である、自然とのつながりも回復する。そういうふうになってきたうえに、いま僕らは新しい現象を見ているような気がするんです。そこでの経験、そこでの自然を回復するとか、ファミリーの経営のクリエイティブな様子が、農業、農村地域の活動にも見られるのではないかと。さっきのバルサミコのお話でも、やっぱりファミリーでやっている。それらはクリエイティブなんだけどグローバルなことも、みんなちゃんと学んでいるんですよ。グローバルなのを一度学んで、戻って来るとか、そういうよさは取り入れながら、だけど新鮮な目で地元を見直す、と。そういうふうに見ると、一度取り残されて、時代から切り離されたかのように見えた、お荷物だったように見えたナポリ周辺などが、すごく力があるというのがわかるわけです。それがいまの状況ですよ。たしかに「第四のイタリア」って我々がネーミングして、価値づけたり意味づけたりしていったら、彼らもおもしろがるかもしれませんね。たぶん外国の人がやらないとなかなか出てこないだろうから、我々がそういう動きを評価することをやってもいいかもしれません。

マクロとミクロのアーバンとルーラル

――では続いて小島先生、お願いします。

小島 今日テーマである「アーバンとルーラルの対と融」というのは、一冊の本になるようなとてつもなく大きな話で、たぶんいろんなところに飛ぶなと思ったので、ちょっと日本の現実のなかで、これがどういうシーンで論点あるいは課題になり得るかということをつくつて申し上げたいと思います。

まず日本全体で見たときの「アーバンとルーラルの対と融」という論点というのがたぶんあると思うんですよ。いま、国の政策として多極分散に対して、多極集住とか多極集中とか言い出してきていて、明治大の農政学の小田切徳美さんなどは、「これは新たな農村畳み論だ」と言っている。つまり農村がどんどん限界集落化しているので、多極のなかに集中してもらってコンパクトにして、どんどん真ん中に集まって住んでください、と。コンパクトシティ論というのは、農村を畳むのとは全然違う話のはずなんだけれども、そういうのを誤用しているというか。でもこういう日本全体のなかでの「アーバンとルーラルの対と融」という論点が、必ずあるんですよ。たとえばプラス面で見

れば、再生可能エネルギーを横浜や23区などが東北地域と協定を結びながらエネルギーの供給網をつくっていくという動きがあります。そのバスターで、地域づくりに協力をしていくと、と。そうしないと横浜なども再生可能エネルギー100%なんかできっこないです。こういったダイナミックな国全体のなかでの「アーバンとルーラルの対と融」というのがあって、他方で農山村漁村における「アーバンとルーラルの対と融」があるのではないかと。

都市の浸食ではなくて、たとえば過疎地域のなかにどんどん若い移住者の人たちが、アーバンなところで育った人間が、その感覚と知的ないろんな技術などを持った人たちが行って、そこにイノベーションを起こしていくような状態ですね。そういった「融」というのはあり得るわけであって、実はそのことによって全国でいま、町と村の格差に対して、村々格差が起きています。つまりそういうことに成功したところはイノベーションが起きるんだけど、そんなことやられたら困る、と外部に対して排除性を表明して、昔からのルーラルな壁をつくっているところは、移住者が来ても逃げ出してしまうわけです。ルーラルに都市的なものが入ってくるということに対して各地の差ということですよ。

他方で、先ほど石神先生が奄美の話がされましたが、たとえば五島列島の五島市は再生可能エネルギーによるエネルギー自給率100%を目指す政策を推進している。そうすると、再生可能エネルギー100%によるビジネスを目標とする、RE100に参加するような企業が都市あるいは世界からやってくる。このように自治体の環境政策によるアーバンとルーラルの融というシーンも見え始めているのです。

さらに都市におけるルーラルとの新たな融合ということもあります。中心市街地のなかで、先ほど陣内先生がおっしゃった杉並のケースのように、都市の中に農的なものを組み込んでいく、埋め込んでいく。こういうようなシーンがどんどん出てきています。昨年12月に東京の北区で、「エディブル・シティ」というアメリカの映画を見ながら、食と農でなにができるかというワークショップを50人くらいの区民の人たちと行いました。北区は生産緑地が3か所しかなくて、都市農業振興基本法上の計画を持っていません。だからこそ隙間を見つけましょう、農地法の外の世界に新たなコミュニティファームをどうつくるかという、

50年後の北区のまちを構想しましょう、とまとめたら、参加者の皆さんはすごく元気になりました。つまり都市空間のなかに農的なものをどうやって組み込んでいくのか、そのなかでどのような融合の可能性を見だしていくのかということがあられるでしょう。

あとは圏域レベル、複数の市町村とか首都圏などですね。これはコロナで50キロ圏のなかで人が移動していて、郊外に若い世代が移住をしたということがあります。東京に一極集中しているなかで50キロ圏、100キロ圏のなかでの人の移動です。私が関わっている横須賀などは、人口減少していますけど、そういったところにあるルーラルなものに都市の人たち、若い世代が、なにか魅せられて移動している、あるいはそこで新しい生活をどうやって形成していくか、という視点があります。

あと二つ論点があります。それは都市のなかにもともとあったルーラルな部分の課題です。たとえば、都市計画法上の市街化区域と市街化調整区域です。市街化調整区域というのは、一応、市街化を抑制するという名目ですけど、調整区域です。つまり市街化を前提として調整していきましようとも読める言葉です。そのなかで農地が残り、あるいはさまざまな荒廃が起きている。ここに対してどういうアプローチをするかについては、まったく構想がない。逆線引きということは以前から言われてきましたが、人口が減り続けたくないから、とりあえず住宅建設を認めるなど、市街化調整区域の行方について、いま各地で揺れていますね。ここをどうするか。

最後は、もともとルーラルだったところ、宅地開発によって郊外住宅地にしたところ。実はこの1年間、住宅メーカーの方を研究生として大学院で受け入れてきました。住宅メーカーは分譲住宅の新規需要がどんどん落ちているので、住宅地域の再生へと経営戦略を転換せざるをえない。私もよく知らなかったのですが、住宅メーカーにとって、点で開発したところだけではなくて、面的に開発したところもけっこうあるそうです。そこをどのように再生できるか。これ、自治体にはできません。ですから、あなたの会社が面的開発をしたところを再生させるときには、ルーラルを取り戻してください、と伝えました。都市計画法が改正され、第一種住居専用地域のなかに田園居住区域つくれることになりましたから、ルーラルをどう取り戻すか。これは住宅メーカーにとっても新たな地域価値

の創造であって、CSV経営の試金石になるのではないかと示唆を与えました。

このように、実は日本社会にも、いろんなエリア、いろんなフェーズ、いろんなシーンのなかにそれぞれ「アーバンとルーラルの対と融」に関する具体的な政策論点や課題、あるいは実践課題というのがあるということをおし上げておきたいと思いました。

江戸期のアーバンとルーラル

——続いて根崎先生、お願いします。

根崎 根崎です。私は江戸時代の研究をしているものですから、今回のテーマである「アーバンとルーラルの対と融」が江戸時代、江戸の町ではどうだったのかな、ということをお改めて考えてみました。都市の構造はけっこう複雑なんです。簡単に都市と農村というような分け方では把握できないところがあります。たとえば、みなさんご存知のように江戸の町には武士も住んでいる、町人たちも住んでいる、お寺や神社もある。この身分の枠組みというのが江戸時代にははっきりしておりまして、江戸の町に農民は住めないんです。その外郭、町の外側にいる。しかし、そういう身分に基づく支配という枠組みと同時に、都市と農村をつなぐ支配の枠組みというのがある。たとえば鷹狩を将軍がする場所というのが都市にも設定されています。都市にも設定されているというよりは、都市も農村も一面的に鷹狩の場所というのが設定されています。つまり江戸幕府は、身分で都市の支配、村の支配と分けていながら、それを包み込む、まとめたような支配のあり方というのを持っていた。重なり合っているんですね。そういう枠組みになっています。それぞれの支配のあり方で役人も違う。つまり、都市も農村も何重にも支配が重なり合っている、という状況でした。

ただ、都市のなかにも意外と自然が多いところがあります。大名の庭園などもそうなんです。実は都市のなかに農地もあるんです。農地というのは、町奉行が支配している土地ではありません。代官なんです。町奉行が管轄できるのは町人だけです。大名と旗本は老中や若年寄という人たちが支配をしていて、お寺や神社は寺社奉行が管轄する。江戸の町といっても本当に複雑な支配関係があるんですね。

江戸の町というのは、範囲の問題もありますが、京都の町や金沢の町のように、いわゆる総構えというの

がないんです。たとえば洛中洛外というときの洛外は洛中ではないわけですので、そこに土手のような区分けがあります。金沢の町も同じで、いまも一部残っていますが、江戸の場合には町とその外側を分けるときの土手がありません。つまり江戸の町というのは融通がきくようにできているんです。どれだけ拡大していくかわからないので、常に放射線状に延びられるようにできている。

そういう特徴を踏まえて今回のテーマに沿って江戸の町と周辺の農村ということを考えてときに、たとえば物質の循環ということがよく言われます。郊外で栽培した野菜などが江戸に入ってくる、その野菜を食べた町人たちの排せつ物が下肥として農村に循環していく、というようなことがよく言われるわけです。一方でそういうことを巡って、都市と農村が対立するという局面もあります。先ほど沢庵の話がお二方から出ましたが、沢庵一つ取ってみてもやりとりがある。下肥って個別契約なんですね。農民一人が、大名屋敷なら大名屋敷と契約を結んで、排せつ物を汲み取っていく、という契約です。ですからその下肥を分けてあげる農民から、その引き換えにお金や沢庵をもらう、ということがあります。その農民の漬けた沢庵がまずいということになれば、すぐ契約解除されてしまいます。農民側からすると、沢庵以外に生の大根を欲しいとか、干し大根がほしいとか、要望に基づかないといけません。そういうことで、周辺の農村は下肥の代金として渡す野菜栽培というものが宿命づけられてくる、ということもあります。お金で欲しいという人もいるだろうし、ナスの漬物がほしいとか、いろんな要望に応じていく、と。ですから都市と農村の垣根がある一方で、垣根らしいものがあまりないというようなところもあって、両面持っている。それがまさしくアーバンとルーラルの対でもあり融でもあり、対立でもあるのかな、と思ったりしています。

メンタルにルーラルを取り込むアーバン生活

——通り皆さんからお話をいただきましたので、議論に移りたいと思います。では、陣内先生、よろしくお願ひいたします。

陣内 いまの根崎先生のお話、とても興味深いですよね。支配が身分に基づくだけでなく、重層的な支配があった、と。福井先生たちが江戸東京研究センターでやっていらっしゃる広重の名所江戸百景の研究など

を拝見していておもしろいと思うのは、町のなか、つまりアーバンなエリアにも名所がそれなりにありますけれど、それよりも日帰り行楽圏、日帰りで行ってこられるくらいの、いまでいうと荒川線の沿線とか、飛鳥山とか、そのくらいの距離のところにもみんなリフレッシュに通うわけですね。意識がそっちに向いているというか。これ、すばらしい都市文化じゃないかな、と思います。都市に住みながら、ルーラルなところとの交流が日常の意識のなかに確実にあったんじゃないかと思うんですね。そういうことが、だんだん忘れられてきちゃっているんじゃないかな、と。

実は去年、ちょっとおもしろいシンポジウムに呼んでもらいました。それは都市景観画とか図屏風とか、そういうエコノグラフィ、図像ですね、に描かれた都市と実態としての都市を、西洋と日本で比較しようというもので、僕がベネツィアを中心にイタリアの話、ヨーロッパの話をして、日本近世の絵画を専門にされている芸大の有賀祥隆先生が、京都の洛中洛外図を中心に日本の近世の話をされました。洛中洛外図にはお祭りとかいろんな風俗が描かれているんですけど、けっこうルーラルなものを手掛かりにしてアーバンの人たちが楽しんでいるお祭りが多いです。それから、ルーラルなところには畑を耕作している農民の絵が本当にいっぱい描かれているんですけど、アーバンに近いんですよ。だからそういう意味で支配がいろんなレベルがあるという話は非常におもしろいと同時に、人々の心のなか、メンタルのなかにルーラルなものを自然に取り込んでいるアーバン生活というものがあったのではないかな。俳句とか錦絵、折々の変化が読み込まれる都市文化というのもすごいと思います。そしてたぶん食文化も、江戸湾の江戸前の魚が料理に入ったり、近郊の野菜が加わったり、周辺のいろんなものがアーバンな暮らしを豊かにしていった。そういう行き来が、本来はあったんじゃないでしょうか。もちろん重要なもの、たとえば石は外から運んでくるとか、お酒も灘から来るとか、大きな視点での、日本全体のなかでの流通もあったけど、あるところからは地回り経済圏も発達していった。そういうヨーロッパの城壁で都市と外をはっきりわけるのは違った、相乗りの関係性があったのではないかな、と思います。

いろいろなところで融合の芽が出始めている

陣内 それと小島先生のお話。いろんなレベル、いろ

んな次元で、アーバンとルーラルの関係をもう一回掘り起こして意味づけることが重要だということをつくづく思いました。この前、横須賀の行政のなかにいる人が、やはり地域をテリトリア的な感じで見直したいということで連絡をくださったんです。三浦半島とイタリア半島の形が似ているって（笑）。たしかに言われてみるとそっくりなんですよ、大きさは違うんですけど。形だけじゃなくて、海岸線が複雑だったり、背後に丘や山が迫っているという点でも非常に似ている。横須賀も背後に丘があり山があり、おもしろい市街地を形成していて、魚もいっぱい取れる。そんなポテンシャルがありそうなところでも、人口が減り、さびれているという。逗子、葉山はもう有名で、それぞれ自立して人を惹き付けられるけど、ほかのところは本当に地盤沈下で、どうするのかって。日本各地でそういう問題がある。そのときにやはり手掛かりはテリトリア的な視点ではないのか。それには一つの自治体で完結しちゃったらできないことも多いですよ。もうちょっと小さな町とか村とか、小ぶりの都市どうしが、自治体どうしが連携して、かつて存在した、かつて街道であるいは船でつながっていたところをもう一度結びつける、そういう大きな視点というのが重要なのだらうと思います。さっきちょっと驚いたんですけど、小さな村とかについて、生き残るところとそうでないところをふるいにかけようとしている、ということなんですか。

小島 限界集落は、消滅していくところと、都市の人たちが移住して、アーバンなものを持ちこんで、そこに融が起きて、再生していくところ、そういう差がどんどん出てきている、ということですね。農政学者の人たちは、このアーバンを持ち込んだ再生について「賑やかな過疎」というような言い方をしています。それを見ていると、やっぱり単にクローズしていたら、明らかにどこかの時点で消滅をする。それは地域の人々の自己決定なのでやむをえないのですけれど、もしサステイナブルであろうとしたなら、アーバンなものを取り入れていくことは避けて通れない、と思います。

先ほどの横須賀の話ですけど、なぜ東京一極集中がこんなに終わらないのかというと、ソフトパワーが強いからだだと思います。高度成長期以降、ルーラルなものを捨てたアーバニズムのソフトパワーを日本中でいろんなかたちで演出してしまった。このソフトパワーがいまでも強い。これを変えていくには、アーバンと

ルーラルが融合した新たなアーバニズムをどうやってソフトパワーとしてちゃんと演出できるか。それにはやはりヒューマンスケールにおけるユートピアの思想と実践が重要ではないかと思っています。ユートピアというところにもない国や地域などと思われがちですけど、いろんな苦悩のなかで新たな時代を切り拓こうという知的な営為のなかから生み出されたもののはずです。エベネザー・ハワードは批判もされましたが、ユートピアを事業として実践した。今でいえばソーシャルビジネスです。このユートピアの喪失ともいえる時代状況で、どうしたらアーバンとルーラルが融合したようなユートピアを構想し実践できるかということです。横須賀の話をする、三浦半島のなかでも、実はいろんな動きがある。アーバンとルーラルが融合したようなエリアとして逗子や葉山がみなされ始め移住者が増えている。しかし、横須賀はまだそのような地域価値が発見されていないので、人は減り続けています。つまり三浦半島のなかでもアーバンとルーラルが融合した、ある種の芽みたいなものが出てきている。そのような地域の可能性をさまざまところで拓いてくことで、近代以降のルーラルなきアーバニズムに対する、ルーラルとアーバンが融合したオルタナティブな社会像を提示できるのではないかと思います。

陣内 ルーラルを切り捨てて、自然を切り捨てて、農業を切り捨てて、アーバンへ突っ走って、都市文明をつくってきちゃった限界に、ヨーロッパの人はもうだいぶ前から気が付いているんだと思うんですね。日本はまだ幻想に寄りかかっている面が強いですよ。特に政治をつかさどる人とか、財界でもそういう考えが多いけど。

あと団地再生も大きな問題ですね。建築や都市計画の分野では、ずいぶん前からいろいろ議論があって、学生の卒業設計とかでも団地再生のなかで畑を取り込むとか周辺の農業ゾーンと連携するとか、単に郊外に住んでいるというだけじゃない、なにかメリットを探そうと。やっぱり郊外に住むおもしろさとかメリットを、もう一回社会的に高めていくことが大事なのかもしれませんね。現実には起きているのは、都心回帰の状況のなかで、中央区とか千代田区、港区のマンションに住むのはすごくお金がかっちゃうから、たとえば国分寺駅直近の高層マンションなんていうのが不動産業界でどんどん出てきて、ルーラルな楽しみをまったくしないで郊外に住む人が出てきている。これ最悪で

すよね。なにか価値観を変えていく必要があると思いますね。

「食政策」を打ち出してほしい

陣内 もう一つ、小堀さんがイタリアのことをすごく上手に、感性豊かに捉えて、話をしてくれたんですけど、僕がイタリアでおもしろいなと思っていたことが一つあって、それはある程度の規模の町はみんな見本市会場を持っているということなんです。それはみんな地元のものをアピールする、プロモーションするためにつくられてきた。たとえば共和国時代のベネツィアだと、フィエラというのがサン・マルコ広場で行われてきました。仮設の展示会場をつくって。ファッションが特にすごいんだけど、島のなかでつくられていた織物とか皮なめしとか、それを加工したバッグとかを展示する。ヴェローナは石と農業、特にすごいのがワイン。ポローニャもそうだろうと思います。だからマーケットなんじゃないでしょうかね。マーケット、市、もともと都市が持っていた「市」ですよ。そういうスピリットというの、アーバンとルーラルをつなぐ重要な経済行為であり、そこに集まってきて交流するというのがまた楽しい。都市の華やかさというのかな。そういうものを日本の都市は失っているんじゃないかと思います。もののやりとりじゃなくて情報とか金融とか見えないものばかりになってしまって、ものを介して、それを説明して、みんなが交流する、信頼関係をつないでビジネスにしていくという経済行為が、見えないものばかりになってしまっている。だから集まる場がない。楽しみがない。そういうのをもう一回、いろんな角度で作直していくというの、重要なと思いました。

そういう意味でも、先ほど石神先生が紹介して下さった柳田と地域主義の玉野井先生のテキストですね。そこに、ああいう含蓄のある、いまもう一回思い出さなきゃいけないことがいっぱい含まれているというお話はすごく示唆的でした。

小島 柳田國男は、均霑努力という言葉を使っています。都会を目指しましょうという、中央を見習いましょうという近代社会における支配的な思考です。農本主義的な対抗精神もありましたが、アーバニズムを理想化するエネルギーが近代を通して働いてきたことはたしかで、もちろん柳田國男はそれを揶揄していますが、21世紀前半の今日、それをどうやって反転できるか、

ということだと思います。最後に、アーバンとルーラルをつなぐ回路が重要ではないかと思うのですが、「食」はかなり重要な手がかりになるはずですよ。

陣内 「食」については木村先生もよくご存じだと思います。いかがですか。

木村 日本の場合は、アメリカの余剰生産物の処理国になっております。戦後でしたら、脱脂粉乳を無理やり押し付けられて、給食の学乳で飲まされましたし、小麦も余剰生産物を大量に運ばれて、コメを食ったらバカになるということで、パン食に変えられていきました。いまでしたらトウモロコシあるいは大豆。最近で言うと、アスリートだけじゃなくて、高齢の人たちもプロテインを飲んで、健康になろう、筋肉付けようと。あれも、アメリカやオーストラリアで余ったものです。ですから、外国との貿易のことから考えると、アメリカからのプレッシャーが強いので、日本の国内で食を通じてアーバンとルーラルをもう一度結びつけるというのは、難しいかもしれないなと思います。これはすごく大きな問題だと思っています。

陣内 僕は秋田公立美術大学というところに客員で呼ばれているので、ときどき行くんですが、いつも行くと大歓迎してくれるんですよ。この前も行ってきتانですけど、おいしいですよ、食が。まだ雪が積もっているのに春の野菜が芽吹いていて、いろんな種類の野菜が出してくれて、魚もおいしい、肉もおいしい、そしてコメがおいしいじゃないですか。だからお酒もおいしいわけ。全部揃っているんですよ、本当に。東京にいとそれがわからないんだけど、全国それぞれ、みんなけっこうそういう地産地消をやっていると思うんですよ。あわら温泉はその代表で。もっとそういう意識を、テリトリー的に全国で共有してやっていけば、食大国の日本としてはかなりおもしろいポトムアップの動きができるんじゃないかと思うんですけどね。

小島 たとえば再生可能エネルギーなどを見ると、ヨーロッパでエネルギーデモクラシーという言葉が出てきていますよね。これはエネルギーの供給を一般市民もやるようになって出てきた。日本でも、電力が小売り自由化になって市民が自己決定できるようになりましたし、自分の自治体のエネルギー政策に対して一票投じることもできるようになった。つまりエネルギーデモクラシーとかエネルギー自治とかという言葉は、わずかここ10年でこの国でも広がってきたん

だと思うんです。そうすると類推した言葉で、フードデモクラシーとかフード自治、フードセルフガバナンス、そういった理念とか考え方、価値観をどうやってつくれるか。陣内先生がおっしゃったスローフードって、まさにそうじゃないかと思うんです。

もう一つ言うと、自治体には「食政策」というのはないんですね。「農業政策」はあるけど、「食」はいろんな分野に散らばっているのだから、それをトータルに考えた「フード政策」は、政策領域として確立してないんですよ。ただこの数年で、フードバンクとか子ども食堂とか福祉の観点でも食の問題が出てきたじゃないですか。つまり食というものを一つの政策のテーマ領域として、どこかの自治体がちゃんと「食政策」というものを打ち出してくれると、たぶん木村先生がおっしゃったようなことも含めて、食というテーマをトータルに捉えて、そこから地域のいろんなものを見直していきましょうという動きが起きるんじゃないかと思います。

陣内 そうですね。その方向、いいですね。

生命力を取り戻す

陣内 石神先生と小堀先生、いかがですか。

石神 これは本当に文明論の話ですよ。先ほどちょっと玉野井先生の話をしましたけど、生命世界と非生命世界、これをどう考えるかということだと思います。あえて農村を生命世界、都市をグレーインフラというイメージで非生命世界、あるいは機械が動いているというイメージで考えてみたいんですが、でも都市は非生命世界かという、都市は人間がいるわけです。人間って最大の生命世界でしょうから、都市のなかにそういう意味では大きなルーラルがあるわけです。だから人間一人ひとりが生き生きとするなかに都市のルーラル化という、アーバンとルーラルの融合があるのかなという、そんな感じがするんですね。そういう意味で、木村先生が冒頭でアメリカの地域性のお話をされたんですけど、アメリカは農村、ルーラルはけっこう単一ですが、都市は非常に多様ですよ。最近ではアジア系とかアフリカ系とかさらに多様になっていますけど、もともとヨーロッパ系にはモザイク状にいろんな人がいたわけだから、そこから、つまり都市文化のなかからルーラルとアーバンの融が生まれてくるんじゃないかな、と思うんです。だからアメリカっていまの州とか都市とかからなにか新しい融合されたもの

が生まれて、そういう意味で非常におもしろい実験をしているのかなと、そんなふうにも思います。

非生命世界と生命世界で言えば、生命って意外と既存の分析科学ではわからないところがあって、暗黙知が多いんだと思うんです。それに対して非生命のほうは工業とか科学で、要するに形式知が多い。形式知と暗黙知で、両方常に循環していない。暗黙知のなかにいろんな発見があるし、納得性があるわけですよ、お互いの。形式知のほうは、一種のグローバル性がある、みんなが共有できるという意味。あるいは意外と融合できる。ほかの科学と融合できる。ということで、ルーラルとアーバンの結合というのは、形式知と暗黙知の循環が始まると、そこにすごいイノベーションがあるのかな、と。そういう意味ではこれは融合しないと損だという、そんなふうにも思った次第です。

陣内 ちょっと思い出したんだけど、ヨーロッパの人たち、ローマ時代から都市に住みながら、別荘を構えるという文化をつくったんですよ。都市にずっといると自分も生命力がなくなるというか、消耗しちゃう。それを別荘、海浜や田園のなかにあるヴィッラに行くと回復する。ローマ時代ですよ、古代の話。それをルネサンスに復活させて、現在でもみんな夏1か月休暇を取る。それはまさにルーラルあるいは自然のなかで生命力を復活させるっていうことでしょう。日本人はどうやってその生命をもう一回取り戻すということをやってきたのか。あるいは日本の都市のなかには、ルーラルなものが入っていて、生命的なものが常にけっこう入ってたんじゃないか、と僕は思うんです。だからあんまり非生命的な都市から抜け出して、生命的な農村に行くというのがないんじゃないかとも思っていて、これはある意味で日本の都市のメリットかもしれない。日本の都市が本来持っている生命的なものをもっと強くしていくとか再評価するというのも必要だし、本当の意味で生命力を持っているはずの農村を大切に、もっとクオリティを上げていくとか、そういうことも大事になってくる。まあ、あわら温泉にいと生命力を取り戻すよね。温泉で元気になって、またおいしいものを食べて(笑)。どうですか、小堀先生。

小堀 最近、ちょっと感じるんですけど、副業がOKになったり多拠点で働けるようになったりして、働き方が変わってきたというクライアントが多いんですね。軽井沢とか熱海とか、ちょっと郊外のようなとこ

ろに住もうかな、という人がけっこう増えている。そうすると社会の変化として、なにか副業とか働き方が変わっていくような気がするんです。百姓的な暮らし方というんでしょうか。僕の生まれ育った地域でも、家を建てる時に来てくれる大工とか瓦屋さんとか畳をつくってくれる人とか、それ以外のときにはみんな農業やっていたんですよ。必要なときに知的な要求を共同でやろうという意識がそもそもあるんですよ。僕の住んでいた地域は輪中地域なんですけど、自治体に頼ってなくて自分たちで輪中をつくるんです。それで水害を防いで、遊水地をつくって、そこに水田をつくろうっていうふうに、ある意味、都市を二重構造化していた。自分だけではできないことを、みんなでやろうよみたいな発想がけっこう村にはあるなあって、ちょっと思いました。でも都会は、自分の欲求を自分で解決できそうな雰囲気がある（笑）。そういうなかで共同体意識のようなものがあるとすれば、唯一建築をつくる場所なんではないかと僕は思っているんです。建築をつくるという行為そのものが、実は知的欲求をみんなでつくっていきこうっていうきっかけにはなるな、と。それでできあがった「場」でどういう活動ができるか、あるいは誰が寄ってくるかみたいなことが重要なのではないか。最近は共同体じゃなくて、共同意識が寄ってくるかみたいなことが非常に重要だなと思っています。べにやなどはあの場所ができて、いろんな人が集まってくるわけですよ。そうすると、その地域のことをどんどんわかってくる。泊りにくるのは東京とか大阪とか、金持ちがやって来てお金を落としていくんですが、沢庵づくりとかへしこづくりなんかは、地域の人たちとみんなでつくっていきこうよ、みたいなことになっています。そういうのがうまく循環していくと、そういう場ができてくると、アーバンとルーラルがうまく循環していくんじゃないかなって、ちょっと思うんですね。

べにやが燃えたときに、一番悲しんだのは地域の人なんです。なくなって困るのは本当はべにやさんのご主人たちなんですけど、みんなのものっていう、そういうコモングの感覚はやっぱり温泉にはあったんだということに、すごく僕は感動しました。それを再生するというか、強化するというか、見える化するということを、なにか建築を通してとか、デジタルを通してとか、デザインを通してやるというのが可能なんです。だからそういうことをやっていくべきなのかな、と。

陣内 ありがとうございます。今日の発表のなかにも素敵な内容がたくさんありましたよね。ルーラルなものなかには、どうしたってみんなとつながらないと生きていけないというところがあって、つながりやすい土壌は当然あります。これにUターン、Iターンの人が戻って行って、また別のつながりが生まれてくるみたいな、そういうダイナミズムというか、コモングということとか、つながるということをいずれにしてもアーバンでもルーラルでもやって行って、そしてアーバンとルーラルがつながる。そういう方向に持っていく必要があるんじゃないかな、と今日思いました。——ありがとうございます。「アーバンとルーラルの対と融」というのはたぶんしばらく時間をかけて議論していくもので、今日たちどころに答えが出るようなものではないんだと思います。エコ研の運営委員会を月に一回やっているわけですが、今日は実は拡大対面運営委員会風にやりたいと考えて進行してみました。みんなが報告をして、陣内先生がいろいろと話して下さって、それをみんなで聞いてわいわい意見交換をする、というかたちですね。今後、運営委員会は対面でもリモートでもやっていきますが、皆さんにもお知らせをいたしますのでぜひご参加いただいて、これの続きに皆さんも参加してもらいたいと思っています。年に1回イベントでやるぞというのではなくて、もっと密にというか、運営委員会でも皆さんも参加いただいて、議論をしていくというイメージですね。今後、エコ研をそうやって運営していきますので、ぜひここにいらっしゃる方、リモートでお聞きになっている方も運営委員会に参加いただいて、やっていきたいなと思います。今日はありがとうございました。

4 基調講演録

「石牟礼道子の世界と地域の未来

～生命たちの賑わいを感じ取れるか？～」

田中優子（法政大学名誉教授／特任教授）

講演日 2022 年 12 月 17 日（土）
第 47 回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー
「新たな地域主義の構想に向けて」より

本日は「都市政策セミナー」です。政策の話をする立場にはないのですが、石牟礼道子の話を、と提案してくださったので、それなら話してみようかと思いました。

私は専門が江戸時代なので、江戸時代の地域の自治などについては大変関心がありますし、むしろ政策ということであろうと、江戸時代の自治のありようはこれからの日本につながるのかもしれないです。しかし今日は石牟礼道子の話ですので、自治ではなく石牟礼文学の方向から地域に踏み込んでみようと思います。地域はかつて、何によって成り立っていたのかを、あらためて考えてみようと思います。

1930年代の水俣・その町と周辺

石牟礼道子の作品に『椿の海の記』があります。これは石牟礼道子が3歳から、小学校に入った8、9歳ごろまで過ごした「場所」について書いた作品です。1930年から35年ごろになります。水俣市の栄町という中心地と、その外れにある水俣川の河口の「荒神」というところ、通称「とんとん村」と呼ばれていたへき地ですが、この両方について、記憶を辿って非常に詳細に11章にわたって書いた作品です。

まず地理的に辿ってみます。町と村が江戸時代と同様の構成です。町があり、それを囲む村があります。村というのは生産地で、生産地と町、あるいは都市というのは決して無縁ではなかった。それぞれ違う生活をしているわけではなく、周辺の農村で生産するものが都市に運ばれ、また都市の中の、例えば排泄物だとかゴミだとかは肥料になって地域に運ばれるという循環が江戸時代から行われています。そういう中でコミュニティというのは成り立っていくのですが、農村におけるコミュニティ、町の中のコミュニティというのも非常によく似たコミュニティの構成をしています。

ところが、そこに大企業「チッソ」がやってくるわけですね。これは江戸時代には起こらなかった事柄です。日本を代表するだけでなく、チッソ株式会社は戦争中に朝鮮半島にまで進出していて、アジアでも大規模な展開をした大企業です。そういう大企業に勤める人たちはエリートたちです。その人たちが暮らす地域、住まい、その人たちの子どもたちが通う学校が町の中にできてきます。そうすると、空気が一変するわけですね。このことは水俣だけではなくて、福島も同じでした。福島の場合には1960年代に原子力発電所がつくられるのですが、そのときにはアメリカの企業、ゼネラル・エレクトリックがやってきて、これをつくっていく。ですから、工事期間中は一帯がほぼアメリカになってしまう。そういう現象が起こるわけです。どちらにしても、そのように企業城下町になっていくこ

とは、日本の近代化とは何だったのか、をよく表しています。その近代化の中で暮らした人たちがどういう思いをもったのかということも、よく分かるケースなのです。

水俣の場合にはよく分かるどころではなく、それによって何十年もの間続く被害を受けました。福島についてはどのくらい被害が続くのか、いつ完全な復興ができるのか、いまだに分かりません。福島と水俣の違いがあります。福島は原子力発電所の事故が終わった後で、多くの方たちが他の土地に移住したということです。水俣にそれはなかった。漁師の方たちは、そのままそこに住まわれて漁師を続けようとした。なかなかそうはならなかったけれども、その方々は現在でも水俣に住んでいます。胎児性水俣病患者は、ほぼ私と同じ世代です。施設に入っている方もおられ、あるいは短命ですのもうずいぶんとくさんの方が亡くなっていらっしゃる。しかし水俣にとどまりました。

こういうことを私たちは一つの事件や事故として客観的に捉えるだけではなく、そこに暮らした人たちがその生活をどう表現したのか、注意をはらうべきです。水俣の場合には、石牟礼道子が非常に詳細に書いてくれた。ですから、私たちはその言葉に向き合わなければならぬと思っています。

藤原書店から『石牟礼道子全集・不知火』全 17 巻が出ています。2 巻と 3 巻の『苦海浄土』は皆さん、よくご存じだと思います。『苦海浄土』の第一部が 1969 年に刊行されて、多くの方たちが知るようになりました。実は、私が石牟礼道子を読むようになったきっかけは、この第一部の『苦海浄土』が出された 69 年の次の年、1970 年に法政大学に入学したことだったのです。その年に益田勝実という古代文学の先生の授業で、『苦海浄土』が朗読されました。古代文学の先生なのですが民俗学者でもありました。ですから、日本の一地域で何が起きているのか、よほど関心をもたれていたのだと思います。1 年生に向かって、『苦海浄土』の第一部のくだりを朗読なさったんです。朗読するとはどういうことか。つまり私は文字で見たのではなくて、音で聞いたわけです。文学の中で方言を音で聞くのは私にとっては初めての経験でした。実際に読んでみると、それだけではなく医学データもしっかりと書かれている著書でした。世の中にこんな文学があったのかという、非常に大きな衝撃でした。そして文学観が変わってしまった。法政大学で初めて、私はそれに気づくのですが、それから水俣あるいは石牟礼道子という人に関心をもつようになりました。その第一部のかなり後に第二部、第三部が書かれています。1970 年に大阪厚生年金会館でチツソの株主総会が開かれました。第二部は、そこに患者さんたちと一緒にやった、その顛末を書いた作品です。

これはニュース映像にも残っています。舞台の上にチッソの社長、その他の幹部の方たちが並んでいるところに、白い巡礼の衣装を着て、笠をかぶった患者さんたちが次々に舞台に上がって行って、社長を取り囲むのです。当時は江頭社長です。雅子皇后の祖父にあたる方でした。このことをきっかけにして、江頭社長は辞任して会長になる。次の年に今度は丸の内のチッソ本社に籠城することになります。これが第三部です。

第二部も第三部も非常に面白いんです。とてもユーモラスで生活感にあふれているんです。この第二部、第三部を通して、石牟礼道子は『苦海浄土』だけではなく、全く別のことを考えるようになっていきます。何かというと、第三部の籠城のときに、島原・天草一揆のことを思い出すのです。そして後に『春の城』という作品に、それが結実します。もう一つは、世阿弥の『風姿花伝』をそのときに読んでいます。それが後の能に、また結実します。このように 1969 年、70 年、71 年が石牟礼道子にとって非常に重要な時期で、これが第 2 巻、第 3 巻にあたるのですが、その基底にあったのが、第 4 巻の『椿の海の記』です。これを読むと、ああ、この人が水俣病に向き合うようになったのは、この幼児体験があったのだなということが分かります。これはコミュニティの体験であると同時に、自然の体験、自然界と向き合うという体験です。これが身体と精神の基本のところにしっかりと据えられていて、そこから見たときにチッソの問題というのはとんでもない問題なのだ気が付いていくわけです。

第 5 巻、第 6 巻、そして 7 巻、8 巻もかなりたくさんのお書きになっている。例えば 10 巻では、「食べごしらえ」という言葉をよく使っています。石牟礼道子は「料理」という言葉を使わないのです。「食べごしらえ」と言う。自然界から人間はものをもらって、食べ物にして生きています。衣食住、全てそうです。「食べごしらえ」というのは、自然界のものそのままでは人間は食べられないので、食べられるようにこしらえることなんです。「料理」ではなくて「食べごしらえ」と言った途端に、自然界の素材全体が浮かび上がってくる。そういう言葉の使い方をします。第 12 巻の『天湖』は、ダムのある村が全部沈んでしまった、その後の話です。第 13 巻は先ほど言った島原・天草一揆のことを書いた『春の城』です。それから非常にたくさんの詩歌・俳句を作っていて、能も作っています。それが第 15,16 巻に収められています。そういう方ですから、全 17 巻プラス別巻という、多くの作品が残りました。

『椿の海の記』は 1976 年に刊行されています。第 1 章から第 11 章まであります。非常に長いので、今日はとても全部ご紹介することができないのですが、『椿の海の記』の

時代とはどんな時代だったのか、まずお話しします。1927年のなんと3月11日に、石牟礼道子は天草で生まれ、すぐに水俣に移住しています。その後水俣で育つのです。



『石牟礼道子全集・不知火』別巻1より

栄町というところにいました。栄町にある小学校に入学しました。ところが8歳の時に祖父が事業に失敗して、栄町の自宅が差し押さえられるのです。それで水俣川河口の荒神、通称「とんとん村」と言われているところに引っ越します。そして、祖父が妻妾同居します。道子は母方のおばあさんと一緒に暮らしているのですが、それとは違う人が来る。ですから妻妾同居になる。小学校も転校する。このときに、既にチッソは水俣にあります。1908年にチッソができています。

栄町がどなたのところだったか、石牟礼道子が自分で地図を書いています（「わたしの栄町通り」）。栄町のまさに中心のところに、最初は暮らしている。右上のところにチッソの工場があることが分かると思います。その隣に「しゅりがみ山」という山が書いてありますね。「ここの狐たちが舟をやとって天草に渡った」と書いてある。狐たちが天草に渡っ

たという話があった。チツソがあるけれどもそこに裏山があつて、裏山には物語があつた。それはチツソができる前からの物語です。町があつて、周辺の村があつて、里山があつて、さらに奥の方に奥山があるはずです。そういう構成の中で人は暮らしている。里山というのは、生活にとっては大変重要な山なのですが、そこには動物もたくさん暮らしています。そして、子どもたちはそういうところに年中出入りするわけですね。海にも面していますから、海と山と両方に、町で暮らしている子どもたちも出入りをしています。これは非常に詳細に書いてあつて、どこに誰が住んでいたか、全て覚えているんですね。



『石牟礼道子全集・不知火』別巻1より

『苦海浄土』第2部、チツソの株主総会の終了後のところにこう書いてあります。

会社の裏山はもと「しゅり神山」という立派な名を持っていて、そこは狐たちの持ち山であつた……

前面に不知火海が、その沖は天草の島々、右手には梅戸の二子島、左手には明神が岬（はな）を連ねていた。天草島には眷属たちも棲んでいるので、チツソが来てこの山をうち崩した時、大方の狐たちは伝（つて）を求めて渡海した。……

「今は持ち合わせがござりませんが、向こうの島に渡してもらってから、必ず都合をつけて、渡し賃はお返しいたします」と申し出たのも少なからずいたという。……そういう時は人間も畜生もな、変わりません。哀れでなあ、……。

「チッソの人方もて、魂の高かお人なら、しゅり神山のおしゅらさまのことは、お解りになりそうなものでございますよねえ。位の高か狐ですがねえ」

（『苦海浄土』第二部・第六章「実る子」）

「天草島には眷属たちも棲んでいるので」というこの「眷属」とは、狐たちの仲間のことです。「渡し賃はお返しいたします」と言ったのは、狐が言った、という意味です。こういう会話が、町の中で取り交わされていたのです。狐と人間との間に区別がありませんね。狐は当然しゃべれると思っている。別にそれはおかしくも何ともないわけです。

「位が高い狐」という言い方と同時に、「魂が高かお人」という言葉があります。これは『苦海浄土』の中にもたびたび出てくるのです。石牟礼道子だけではなく患者さんたちも含めて、チッソという大企業には社長さんという偉い人がいる。偉い人は魂も高いはずだ。だから、自分たちの苦しみ分かるはずだ。だから話をさせてくれというわけですね。魂が高いのだから、自分たちの気持ちが分かり、謝るはずだと思っているのですが、実際には謝らないし、話もさせてもらえないんです。

「魂が高い」ということと、「偉い」ということは同じことだという感覚が、かつてはあった。けれども近代の大企業におけるエリートたちの魂は少しも高くなかった、ということがだんだん分かってくる。患者さんたちも、近代社会において「偉い」とは何かを、次第に学ぶわけです。今、私たちは政治家の「偉い人」たちを見ているから、魂が高いどころか、「偉い人」とは魂が低い人だと、残念ながらわかってしまっていますが。

『椿の海の記』の中にこういうくだりがあります。

先隣の女郎屋「末広」、隣りは衣笠まんじゅうを置いて、焼酎も吞ませる「万十屋」、筋むかひの「渡辺飲店」……

酒屋、女郎屋、お湯屋、紙屋、万十屋、米屋、野菜屋、豆腐屋、アンコ屋、竹輪屋、石塔屋、こんにゃく屋、タドン屋、と商いの名をそのまま屋号にして、髪結いさん……

その間の空地に「会社ゆきさんの家」、がぼつぼつと建った。わたしの家から下手

には、染屋、鍛冶屋、米屋、船員さんの家、学校の小使いさん、タドン屋、花屋、煙草屋、学校の道具屋、第二小学校と続き、その先の田んぼと溝をへだてて、ひとときわ広大な日本窒素株式会社があるのだった。

（『椿の海の記』第三章「往還道」）

この中の「会社ゆきさん」が、チッソに勤めている人のことです。「その先の田んぼと溝をへだてて」とあるように、やはり町の周辺に田んぼがある。当然、畑もあります。それから山がある。そういう構成になっていて、典型的な日本の町と農村の関係です。では漁師さんたちはどこにいたのかというと、栄町にはいません。むしろチッソとは逆の方向のところに漁師さんたちが住んでいるのです。その人たちが栄町に魚を売りに来るんです。

魚を売りに来る女たちの女籠（めご）は、ことにつくりが大きく深く丈夫に出来ていて、八代女籠と云った。……

魚売女房は、体力と気っぷと計算にたけて、商い上手でなければならず、そのような女たちは、丸島とか梅戸とか明神、月ノ浦、出月、湯堂、茂道の漁港漁村で育ったのである。夜が明けかけると、丸島港と梅戸港につなげて祖父たちが造った栄町の道路の上を、八代女籠を担いだ女房たちが調子をつけて、ぎっし、ぎっしと揺りながら通ってゆく。たたらを踏んで踊りあがってゆくような足つきであった。女籠を揺る調子の合間に、張りのある声で呼ぶ。「魚はいらんかなあつ」… 栄町はそのような彼女たちの気塊によって夜が明けるようなものだった。この女房たちの二代目、三代目がことごとく、後年水俣病になってゆくのである。

（『椿の海の記』第三章「往還道」）

道子のおじいさんとお父さんは石工として道をつくっていたので、栄町の道は、彼らが作った道路なのですね。その道で魚を売って歩く女性たちが水俣病になっていく。そしてこの人たちのおなかから生まれた子どもが胎児性水俣病として生まれてくるのです。胎児性の場合には胎児が全部吸ってしまいますので、本人は水俣病にならないケースがあります。先ほど言いましたように、胎児性水俣病の人たちは 1952 年、53 年、54 年ぐらいに生まれています。私は 1952 年生まれですので、同世代です。生まれた場所が違っただけのことで、自分はこういう時代に育ったのだ、と私は考えるようになりました。

湿田地帯の中を突っ切って出来たあたらしい一本道の栄町道路の両側には、女郎屋の末広がが建つと、その弟の店の、焼酎といなりずしとうどんと、焼酎の肴に竹輪や酢ダコなどを出す文字どおりの飲食店が出来、その隣りに酒屋が出来、酒屋の前に髪結いさんが来て、末広の妓たちの髪を一手にひき受けた。……

「みっちやん、そら汚なかけん、まちっと美しかっぱあげまっしゅ。こっちおいでなはりまっせ」妓たちの髪結い時や化粧どきには、そういうわけでなんとなく末広か、髪結いさんにあがりこむ。……

町のものたちから後指をさされているこのような妓たちは、天性ほとんど優しくかった。『椿の海の記』第三章「往還道」

道子は、この髪結いさんのところにしょっちゅう上がり込むようになるのです。そこには、女郎屋の女たち、つまり娼婦たちがいたのです。その人たちを道子は「天性ほとんど優しくかった」と書いています。子どものころに、そういう人たちと友達のように接するという経験をもっていた。後の時代になると、親がそんなところへ行っちゃ駄目だと言う。町の中ではそういうことが起こる。そういうことがなければ、こういう世界は子どもにとってなじみのある世界となり、同じ人間として接することができる。つまり、差別観を持たずに大人になることができます。

そして、とんとん村です。「わたしの家は、水俣のいちばんさい果ての村の、そのまたはずれの墓場と避病院と火葬場の間の、舟納屋のような藁小屋に、栄町から移り住んだのである」(『椿の海の記』第二章「岩どの提燈」)。これが家を追い出されて、移り住んだ場所です。町のはずれには何があるのか。お墓があります。結核など、人と接することのできない病人たちが入っている病院があります。それから火葬場があります。死の世界がこの周りに広がっているのです。そういうところは家賃も安いでしょうし、つまり町の真ん中に暮らせなくなった人たちが行く場所でもあった。

そして隠亡がいます。死体を焼く人です。「火葬場の隠亡の岩殿は、日の昏れ方のお葬式のうしろからついて行って、夜中か夜明けに、水俣川の川口の千鳥州の、なよなよと夜も揺れている芒の土手道を、提燈とぼして行き来していた」「岩殿は、無人のとんとん村にやって来た最初の住人とかで、兄者の方は、犬猫の皮をはいで太鼓三味線を自分で張って」とある。岩殿の兄弟は被差別民だと分かります。

被差別の人たちはだいたい村のはずれか、あるいは大阪とか関東の場合には特定の地域に暮らしたのです。私は白土三平の劇画『カムイ伝』を使って社会学部で講義をしました。その講義をまとめた『カムイ伝講義』という本を刊行しています。『カムイ伝』で非常によく分かるのは、被差別民は職人だということです。ここに書いてあるように、太鼓を作り三味線を張るのです。近代になって屠殺が始まりますが、江戸時代は動物の肉を食べませんから屠殺業というのは存在しません。馬とか牛は田畑で使役していて、自然死をします。馬や牛が自然死すると、村の人たちがそのテリトリーを担当している被差別の人たちに声をかけて来てもらって、運んでもらいます。彼らはその後、できるだけ早く、つまり腐らないうちに皮を剥いで、なめして、川で洗ってきれいにして、太鼓だとか三味線をつくる。つまり職人なのです。

『椿の海の記』の舞台は 1930 年代ですから、もう江戸時代ではありませんけれども、やはりそういう職人たちが必要だったのです。どこでも太鼓が必要です。三味線も必要でした。必要だから、村のはずれにいる。それから、この時代はまだ土葬の時代です。地方にもよりますが、1930 年代の水俣は土葬でした。だから、なぜ火葬場があって火葬する人がいるのか、書いてあります。「火葬場に来る死人さん」は、ゆきだおれだったり、よそから来ていてまだ墓地がなく檀家が決まっていなかったりする。そういう人なのです。無縁仏に近い人たちだった。そういう人たちが、土葬する場所がなくて、火葬にされるわけです。そのために火葬する役割が必要だったということが、よく分かります。「磯風の吹きさらす中で焼き払われたり」するのです。非常に「哀れにさびしく見えていたから、大崎（うざき）ヶ鼻の火葬場といえば、町の人びとが忌むのも仕方なかった」と書いています。（『椿の海の記』第二章「岩どの提燈」）

それから、岩殿たちが住んでいるさらに奥です。

猿郷の丘の奥の迫（さこ）にもうひとつの部落がある。その部落からいちばんひきあがったところに、屋根の藁はほどけ、ほどけたところから竹の垂木が露出して来て、壁も破れはてた家が一軒あって、そこには、鼻が欠け、両掌の指も欠け落ちてしまった癩者の、徳松殿（どん）の一家が住んでいた。

とあります。癩病の患者さんたちが住んでいたのです。すでに病院に入っていた時代だけでも、そうでない人たちもまだまだいるわけですね。隠亡さんとか被差別民が住ん

でいる、そのさらに向こうに、差別された癩者たちが住んでいたことが分かります。非常に貧しい暮らしをしていた。奥さんと娘がいるのだけれども、めったに外に出ない。ときたま行き逢うと、木綿縞の衿元をかきあわせるようにして、丁寧におじぎをしていく。そして、やがていなくなった。「噂では、県の衛生課の役人たちが晩のうちに連れに来て、熊本の本妙寺に連れて行ってしまったというのであった」。おそらく病院に連れて行ったのだと思うのですが、この熊本の本妙寺というところが伝説の場所になっているのです。ここに癩者の人たちが集結しているという物語があったのです。だからそういう噂が広まっていたと書いています。(『椿の海の記』第二章「岩どの提燈」)

こんなふうにして、『椿の海の記』が書かれている。今、文章を読んでいただきながら、栄町を中心にした空間配置を知っていただいたわけですが、さらに何が書かれているか、今度はその「自然世界」ご案内したいと思います。

『椿の海の記』の自然世界

『椿の海の記』の冒頭には、石牟礼道子の詩集の中に収められている詩の一部が切り取られて、書かれています。「ときじくの かぐの木の実の花の香り立つ わがふるさとの 春と夏のあいだに もうひとつの季節がある」。「死民たちの春」という詩の一部です。「死民」という字に注目していただきたいと思います。まず「ときじくの」という枕詞ですけれども、これは『日本書紀』から使われている古語で、めったに使わない枕詞です。「かぐの木の実」というのは柑橘類の原種的な、大陸から渡ってきたばかりの柑橘類のことを言うのですが、つまりミカンです。そういう古代の言葉を使っている。

それから春夏秋冬の四季ではなくて、「春と夏のあいだに もうひとつの季節がある」という言い方をしている。この辺のニュアンスを感じとっていただきたいと思うのですが、つまり石牟礼道子は近代を書いているんだけど、その頭の中で古代とか近世とか現代を行き来しているんですね。ですから能の世界も、能についてほとんどご自身が見たことがないらしいのですが、書けるのです。古語をしょっちゅう詩の中でお使いになる。それだけでなく、この世から見えない「あいだ」を書きます。春と夏の間、隠されている別の季節が、かすかに見えるのです。

「死民たちの春」については、詩とは別に「わが死民」という文章があるので、この意味を受け取っていただきたいのです。私たちの言う「市民」と「死民」の違いを書いています。

「市民といえば景色のいろが急にうらぶれる。

未来永劫の世界であれば、〈村〉のなかの〈群〉のまぼろしが生き死にしているところであらねばならぬ。木の間隠れに、まぼろし世界と通じあっていなければ、ここでは延命できないのだ。」

「死民とは、市民という概念の対語ではない。

いや、市民、といえば、まぎれもなく近代主義時代に入ってから概念だから、わが実存の中の先住民たちは、たちまちその質を変えられてしまうのである。まして水俣病の中でいえば〈市民〉はわたくしの占有領域の中には存在しない。」

「死民とは生きていようと死んでいようと、わが愛怨のまわりにたちあらわれる水俣病結縁のものたちである。ゆえにこのものたちとのえにしは、一蓮托生にして絶ちがたい」。(全集第三巻より)

ここで、石牟礼道子は共同体というものをどう捉えていたかが分かります。『春の城』の中にも出てくるのですが、共に死を目前にして、死と向き合っている。そこに共同体というものがあらわれてくるのです。何となく一緒に暮らしている共同体というものと、全く違う感覚を共同体の中にもっています。それが死という概念の中で考えられているのです。その「死民」を詠んだ「ときじく」の詩から始まって、「岬」という『椿の海の記』の第一章が始まります。一部だけご紹介します。まず冒頭です。

春の花々があらかた散り敷いてしまうと、大地の深い匂いがむせてくる。海の香りとそれはせめぎあい、不知火海沿岸は朝あけの靄が立つ。朝陽が、そのような靄をこうこうと染めあげながらのぼり出すと、光の奥からやさしい海があらわれる。

大崎ヶ鼻（うざきがはな）という岬の磯にむかってわたしは降りていた。やまももの本の根元や、高い歯朶（しだ）の間から、よく肥えたわらびが伸びている。クサギ菜の芽や、タラの芽が光っている。ゆけどもゆけどもやわらかい紅色の、萌え出たばかりの樟（くす）の林の芳香が、朝のかげろうをつくり出す。

（『椿の海の記』第一章「岬」）

私はうまく朗読できないのですが、井上弘久さんという方が『椿の海の記』1章から11章を全て朗読しています。朗読というと今私がやってみたいに文字を見ながら読むのですが、それとは違って、演じているのです。全部覚えていて、その場で演じる。道子を演じるわけですね。一人称は道子になりますが、お父さんとの会話とか、おばあさんとのやりとりも出てくるのですが、それを演じ分けていらっしゃいます。すごいです。つまり今読んだようなこの場所が、聞いただけで浮かび上がってくる。やはり石牟礼道子の文章は、耳から聞くことにとっても大事な点があるのだなと、井上弘久さんの演劇であらためて感じます。海に行く場面もよくあります。

潮のしぶきがかかりそうな岩の上まで降りると、磯椿はまだ咲きのこっている。鳥は椿に来ていて、目白たちが多かった。ここらの椿は、もう真冬から咲きはじめ、そのような岩盤の層をめぐらせている岬という岬をつないで、山つつじの開花までの時期を咲き連なりながら、海の縁を点綴（てんてい）する。そのような岬の影が、朝の海にさしていた。

「やまももの木に登るときゃ、山の神さんに、いただき申しやすちゅうて、ことわって登ろうぞ」父の声がずうっと耳についてくる。（『椿の海の記』第一章「岬」）

繰り返し、お父さんの言葉としても、おばあさんの言葉としても出てくるのが、山の植物は自分のものではない、山の神さまのもの、山のものなのだから、何かを採るときには「いただき申す」と言ってもらわなくてはいけないよ、という教えです。

おばあさんがそれを言うときには、山に住んでいる「あのひとたち」のものだからと言うのです。「あのひとたち」というのは、動物たちのことです。先ほどのキツネとか、タヌキとかウサギとか、いろいろな動物がいるのですが、「あのひとたち」のものなんだから、もらいますよと言ってもらわなくてはいけないよ、と。

私はこういう言葉のやりとりから、江戸時代の人たちの自然観をあらためて学んだのです。なぜ彼らは採り過ぎないのか。つまり、とことん採って、売ってお金にするという発想が全然ないんですね。来年も豊かな実りがくるように、という説明を私はよくするのですが、それだけではないです。つまり、これは自分のものではない、ということです。実は人間のものではない。その自然の恵みをいただいて私たちは食べたり、使ったりしているのであって、そもそも自分のものではない。だから、まるで自分の権利のようにして採

るわけにはいかない。そのことを親子の会話の中で、こうして子どものころから教わっているんです。親子だけではありません。近隣のおばさんとかおばあさんとか、おじさんとか。そういう人たちとの会話にそれが出てきます。例えば、こういう事例です。

「井川ば粗末にするな。神さんのおんなはととばい、ここにも」孫たちが散らかすつわ落の葉を、手拭いをかぶった婆さまたちがていねいに片付ける。

「川の神さんな、たしか、山にも登んなはととじやもん」囲炉裏に、手のひらや膝をくべるようにして集ってきて、川祭の頃、年寄たちがよく話す。「やっぱり春の彼岸の頃じゃもん」。

「海からそれぞれの川の筋をのぼり、村々を区切って流れるちいさな滝川に至りながら、田んぼの畦などを、ひゅんひゅんという声で鳴きながら山にむかっておいでになる」。(『椿の海の記』第一章「岬」)

そのことを繰り返し毎年のように聞いている道子は、一体いつになったら自分はこのひゅんひゅんという音を聞くことができるようになるんだろうと思って、おばさんたちに聞くんです。「そのうちなと」言われるんですね。

では、その神さんたちってどんなふうなの、大きい人なの、小さい人なのと聞くんですが、それは見てはならんと言うんです。見てはいけないし、聞こえてこない、道子には。だけど彼らは聞こえてくる。特にこの時期、春の川祭りのころはすごく騒がしく通り過ぎていくんだということを、囲炉裏で話しているんです。そういう話を常に聞いている。

そういうときの神さん、神さまというのは宗教団体の神さまではない。つまり川そのもの、海であり、風であり、季節の風、季節の変化、そういうものが耳に聞こえ、また五感で捉えられるということを言っているのであって、それはほとんど『古事記』の世界です。アニミズムの世界です。でもそれがごく当たり前のことで、これは木の実が人間のものではないという感覚と、もちろん繋がっているわけです。

「山に成るものは、山のあのひとたちのもんじゃけん、もらいにいたても、慾々（よくよく）とこさぎ取ってはならん」。慾々というのは、欲を張ってということですね。全部取ったりしてはいけない。「カラス女（じょ）の、兎女の、狐女のちゅうひとたちのもんじゃけん、ひかえて、もろうて来（け）」というのをおもかさまが言う。おもかさまというのは、母方のおばあさんのことです。

道子も「あのひとたち」になってしまう瞬間がある。

霧雨が豪雨に変れば、岬の中腹のけもの道は、たちまちいさな細い流れになって走り下る。その流れを半分泳ぎながらすべり下り、磯の上に出て、渚伝いに帰れば迷うということはなかった。狸の仔のような本能で、山茨や茱萸（ぐみ）の樹の棘のしげみに出没していた。あけびの実を齧（かじ）って食べる「あのひとたち」の仔（こ）のような鼻つきになるのが自分でわかった。

山の稜線や空のいろが虚空のはてに流れ出したり、そびえ立つ樹々の肌が、岩より硬く大きく割れだしてみえる日に、そのような世界の間を吹き抜けてゆく風の音が、稚い情緒を、いっきよに、人生的予感の中に立ちつくさせることがある。

（『椿の海の記』第一章「岬」）

これは子どものときに何を感じたかを、道子が大人になってから表現しているのです。予感、生命観など、このときに自分は何をどう感じていたのかを、できる限り言葉にしています。それは、もちろん文章を書くようになってからの石牟礼道子が言葉にしたのです。

ということは、もしかしたら私たちにもできるのかもしれないね。記憶の中にあるあのとき、私は何を感じていたかと。そのときには言葉にできなかったけれど、それ自体は記憶に残っているんです。だから、それを後に言葉にすることができる。そのことは実はとても大事なことです。そういうことを全て忘れてしまうので平気で開発するようになるし、自分の中のその自然観を裏切るようになっていきます。ですから、言葉にしていくことの重要性というのはこういうところで感じます。「『あのひとたち』の仔（こ）のような鼻つきになるのが自分でわかった」と。つまり、自分も動物になってしまう、と言っています。これはいろいろなところに出てきて、『春の城』で江戸時代の人たちが籠城しているときに、自分たちはもう虫になりましたよね、と笑いながらお互いに話している場面がある。人間でなくなるということについて決して否定的には思っていない。とても自然にそう思い、面白がっている。

山の中腹の萩や葛の花の下にもぐり込んで横たわり、彼方を仰げば、花頂をはなれた全山の綿穂や花粉がいっせいに、きら、きらと光りながら霧のようにただよいのぼり、山々の姿が紗をかむったようにゆらめいているのを見ることもある。

山野が放つ香気のようなものが目に見えるのである。稚いものにはそのような山野の精気は過剰すぎ、ある種の悶絶にわたしはしばしばおちいった。光りながら漂う花粉とともにわたしの感覚は山々をめぐり、それは早すぎる官能の告知ともいべきで、空のはたてに離魂しているような酔いからようやくさめて、とんびにさらわれたような目つきになって帰るときを、たぶん、ものごころつく、というのででもあったろう。(『椿の海の記』第一章「岬」)

これもそうですね。先ほど言ったように、子どものころに感じたことを後で言葉にしているのですが、あのとき何かが分かった。つまり、あの時に「ものごころ」がついた、と認識したわけです。

おもかさまと「家」と「食べごしらえ」

決定的な影響を与えたと言われている母方の祖母「おもかさま」についても、たびたび書いています。

栄町の通りを、日に何回となく青竹を曳いて往ったり来たりする盲目の老狂女の、その竹の杖を、銭湯帰りの末広の妓（おんな）たちが、二、三人で曳いたり背中を撫でてやったりして、連れて帰って来てくれることがときどきあった。…むかえに出ているわたしに、曳いて来た青竹の先のおもかさまをひき渡すのである。

誰がみても、ひとめで正気人とはちがう神経殿（しんけいどん）だったから、道筋の家々とても、戸口のそばにたたずまれ、不意に荒々と呪言めいたひとりごとなど云われたりしては仰天し、迷惑することこの上もなかったろう。……

おもかさまのそのような姿は、この界限に出没する異形のものであったにちがいない。雪の降る日も跣（はだし）のまんま、左の足は象皮病に罹って異様に肥大しひび割れている。着せても着せてもひき裂いて、あらわな肌が出る腰巻の、前も後もはだけほどけてしまうめくらの狂女と、道筋の昼間にはなじまれぬ昼風呂帰りの雛御前たちが、白い蓬髪と、黒い洗い髪を風になびかせ、一本の青竹につらなりながら道行をするさまは、人目をひくに充分だった。

(『椿の海の記』第五章「紐とき寒行」)

おもかさまは外に出て行ってしまうので、道子が追いかけて行って、いつも連れて帰るんです。何を言っているのか分からないし、今で言えば認知症なのでしょう。それだけではなく、足もうまく使えないような状態になっていました。けれども、道子がこのおばあさんの面倒を見続けるんです。その親たち、父親と母親も大変おもかさまを大事にしています。おもかさまというのは母方の祖父の奥さんなんですが、祖父にはお妾さんがいて外に出てしまっていますので、帰ってこないんですね。

そういう家の中で、例えば食べ物のことなどもよく出てくるんです。「塩味だけで味付けしたよめ菜飯」だとか、「その春の海のくさぐさと、野の芽立ちぼくさぐさを集めた五目も六目もの雛の祭のときのちらしずし」とか、「あさりご飯をつくろうとおもえば、あさりを採りにゆく」とか、それから「山道のついでに、つわ蒨もわらびも山椒も採れた」とか、そら豆は「どこの畠でも作っていた」とか、「うるちと餅の両方の米をひき合せて」おだんごを作っていた、というような、食べ物についての描写がたびたび出てきます。

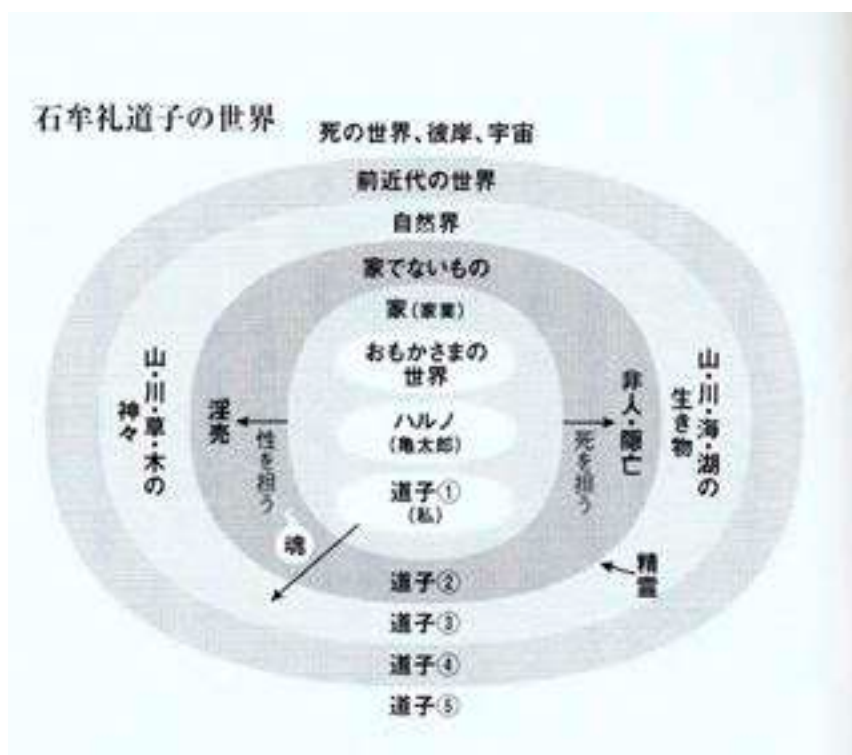
これが「食べごしらえ」です。「食べごしらえ」という題名の文章もあります。それは自分たちで摘んできた草や、近くで採れた穀物から作るおだんごやサツマイモや山芋。そういうものです。それから海で採れたもの。これも、自分で採ってきて調理する。お店に行っても当然あったはずですが、ほとんど出てこない。記憶に残らなかったんでしょう。むしろ山野とか海辺で何かを採ってきて、それを食べるということが人間としての食べ方だと、道子さんは考えています。この「食べごしらえ」ということは、食べ物にどう向き合うのかということです。食べ物とは、自然からもらうものが最もぜいたくなものだと思っている。

道子さんは、テレビで「グルメ」とか言って人がテレビカメラの前でものを食べている、あれは不思議ですね、というようなことを書いています。しかもレストランのメニューの金額を見ると、もう目が飛び出るほどの金額。実際に東京でそういうのを食べてみると、別段おいしくも何ともない。ああいうものって何なんでしょうね、と。ほとんどもう理解できない世界です。晩年まで、ずっとそうでした。

ですから食べ物はご自身でつくるか、お年を召されて食べ物を次第につくれなくなりましたが、そのときは渡辺京二さんがつくっていたんですね。渡辺京二さんは石牟礼道子を発見して、本を出すときには編集者としてついていて人で、歴史思想家でご自身もたくさんの賞をとっている評論家です。『逝きし世の面影』という名著があります。私も対談に

お邪魔したときに、台所に立っている渡辺京二さんを見えています。何人もの方が、石牟礼道子さんのところへ行くと、台所に渡辺京二さんがいるのをご覧になっている。そうやって食べ物というのはどこかから単に持ってくるということではなくて、食べ物とどうやって向き合うのかということがやはり生きることであり、道子さんにとっての生き方の一つだったのだと思います。

今お話ししてきたことを、私は著書『苦海・浄土・日本』の中でこんなふうに表現してみました。



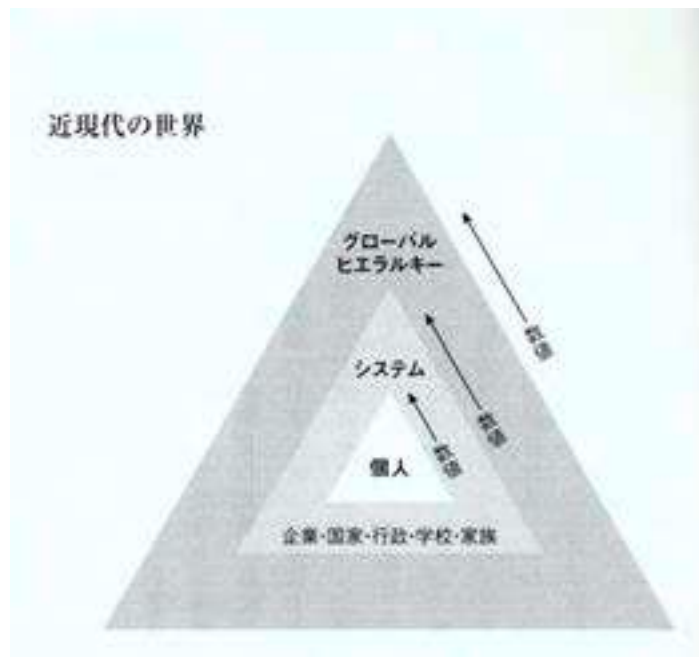
田中優子『苦海・浄土・日本』（集英社）より

道子がたくさんいます。まず幼いころの道子があります。家の中を中心にして、幼いころの道子は、祖母のおもかさまがいて、お母さんのハルノさんがいて、お父さんの亀太郎さんがいます。石工が家業で、その家業の中には石工の職人さんたちもいます。ですから、家というものがしっかりあったことは確かです。だけれども、その家の中でみんなが幸せだったかという、おもかさんという人の不幸を間近で見ているんです。

そして家から一步出ると、淫売さんという言い方もします。「おんなたち」という言い方もしています。そういう人たちが町の中にはいつもいて、とても親しくしている。それから隠亡さん、岩殿もいて、やはり友達のようにしている。死を担う人、性を担う人たち

が町の外れや町の中において、道子はそういう世界をしっかりと見ています。さらに、その向こう側に自然界がある。山や川や草や木、生き物、見たことはないし、音も聞こえないけれど、いるよと言われていた神々がいる。その全体を覆っているのは、まさに前近代の世界観なのです。そして、さらにその向こうに死の世界、彼岸や宇宙がある。

実は、石牟礼道子さんは 24 歳ぐらいまでの間に、3 回ほど自殺未遂なさっているのです。特に嫌だったのは結婚です。結婚したお相手は教師でもあって、大変いい方だったようですが、そういう問題ではなく、結婚という制度そのものがとても嫌だった。家というものがある、その家を中心にして人間の生活が成り立っていることを、道子は十分に分かっているのです。分かっているけれども、共同体としておかしいと思っている。そのことが大事な観点です。



田中優子『苦海・浄土・日本』（集英社）より

道子は、数字に対して恐怖感を持っています。無限に続く数字の世界というものを考えて怖くなる、とたびたび書いているんですけども、実際にヒエラルキーとして私たちの近代社会をつくっている企業とか国家とか行政とか学校とか家族というのは、個人であったとしても、例えば家の中の個人であったとしても、その家の中の個人が学校でどのぐらいの成績をとるかとか、どんな学校へ行くかとか、収入がどのぐらいかとかという数字で判断される。個人の価値が数字で判断されるのです。組織もそうやって判断されます。

これがグローバルヒエラルキーの中におかれて、世界で何番目かと、そういう判断をされます。そういう近現代の数字で表現される世界観とか位置付けに対して、道子は非常に敏感に反応します。敏感にというのは、それは本当に人間が生きる世界なのか、と疑問に思う意味での敏感さです。そういう数字による近現代の世界と、先ほどのような道子さんの世界は、全く違うものとして立ち現れています。

共同体とは何か

共同体とは何かということが、石牟礼道子の作品世界に、とても大事な要素としてあります。「家族共同体」についても、たびたびいろいろなところで書いているのですが、『あそこの嫁御は女のくせ、朝っぱらから新聞広げて読みよらす。よっぽど暇人ばい』新しく来た嫁たちは、そういう村の気風に試されるのが常だった」と書いています。『おなごは三界に家ない』と父親の亀太郎に繰り返し脅され「代用教員を退職し、二〇歳そこそこで父の決めた相手の家に嫁に出され」「夫の実家の石牟礼家に『嫁じょ見習い』として半月ほど入った」というのです。あけの明星が出る頃水汲みに行く。その数、往復20回です。そして新婚四ヶ月で、3回目の自殺未遂を図ります。

これは、つらいというのだけではないんです。つまり家族共同体というのは、道子にとっては本当の共同体ではないのです。役割しかない。つまり先ほどの数字と同じように、数字と共に役割があります。嫁はこうするものだ、男はこういうふう生きるものだと、役割の中に押し込められるわけです。これは本当に「共同体なのか？」という疑問を持ち続けるのです。では道子は、どういう共同体観をもっていたか。

「だまって存在しあっていることにくらべれば、言葉というものは、なんと不完全で、不自由な約束ごとだったろう。それは、心の中にむらがりおこって流れ去る想念にくらべれば、符牒にすらならなかった」「この世は生命あるものたちで成り立っている。この生命たちは有形にも無形にも、すべてつながりあって存在していた」。『椿の海の記』第九章「出水」では、言葉を越えた「つながり」をそう表現しています。そして、私との対談の中で、「共同体というのは、万物が呼吸しあっている世界だと思ってきました」とおっしゃった。つまり生命というのは有形であっても無形であっても、すべてつながりあって存在して、それが共同体だと。だから万物が呼吸しあい、どの存在ものびのびと呼吸しているのであって、その中の何かが役割を与えられて、その役割だけやりなさいと言われていくわけではないんですね。近代における家族共同体というのはそうやって役割を与えられ

て、その中で生きるしかない。

江戸時代の家族共同体の中での武家社会はそういう社会でした。しかし農家などはそんなことは言っていない。人口の 80%を占める江戸時代社会の農業者たちというのは、むしろ役割が決まっていなかった。あつたらやっていたらならなかったのです。常に誰でもが自然と向き合っていなければならないですから、それが優先されるのです。

けれども近代社会になって、石牟礼家は夫が教師です。そうやって外に出て働いている男たちが出てくるわけです。女性たちも明治になると、工場労働に出たりしています。石牟礼道子自身が代用教員として働きに出ていました。つまり、外に出て働く近代社会というものを、皆で歓迎したわけです。

例えば、天草では娘が身を売らなければ家族が生活できないなどということが、現実にあった。けれども勤め先があれば、そんなことをしなくてもすむ。それから、例えば福島などがそうでしたけれども、東北の場合には企業城下町になれば出稼ぎに行かなくてすむんですね。それはそれである種の解決になるわけです。その代わりに代償がある。つまり極めてきつい、厳しい家族共同体というものができあがっていく。

明治5年に壬申戸籍というものができて、日本の近代戸籍制度ができるのですが、これが家父長制なのです。家父長というものを決めて、そこに強い権限を与えて、家族を支配する形をつくる。これが近代の家族制度です。このときにはもう侍がいない。武士階級がいないので、国民全員が苗字をもって、全員が武家のような家族制度の中に入ったということになります。庶民は家族制度というものについての違和感を、ずっと持ち続けるんですね。

では、人間の絆というものをどういうふうに考えていたか。これは一つの事例です。山本亦由さんという方について、『苦海浄土』が書いています。

山本亦由（互助会会長・訴訟派と一任派が分裂した時、その間にいた）という人が荷なったものは何であったか。……わが娘も、発病しているものですからと語った時、声をおとし、目を伏せて、いかにも言葉少なであった。会社幹部の誠意、国の誠意を信じ、同じ郷党の園田大臣の誠意を感謝するというとき、この人は、自分と同じ厚情を、あるいはそれ以上の篤い心を当然相手も持っていると思いついて疑わなかった。……山本亦由氏は一人で、すべてを引きうけていたのだ。（『苦海浄土』第二部・第五章「人間の絆」）

園田大臣という人は熊本から出ている。つまり郷里から出ている大臣ですね。その地元の大臣や、チッソの幹部の誠意、国の誠意、全て「偉か人」なのですが、首相も含めてこういう政治の世界での偉い人たちというのは自分よりも篤い心をもっているはずだ、と。篤い心というのは、他人を思いやる心ということです。しかしそうではないということが分かってくる。最近はますます、偉い人たちの篤い心など、遠い過去の産物です。

ここではさらに道子は「この沿岸の人びとの心の中にある人間の絆」の重要性を述べ、「人間の権利」という言葉は、それとは同列に並びえない、としています。「それはどんなに身をよじっても、そこから自分を切りとることのできない大地の絆、大地化した人間のうちなる絆をいうのではないのか」と。人権とか人間の権利という言葉で主張しようとしても、無理です、と言っているのです。「大地の絆、大地化した人間のうちなる絆」という言葉が、失われたものの重大さを告げています。1970年代前後の運動について石牟礼道子は、こう書いています。

一人の人間に原罪があるとすれば、運動などというものは、なんと抱ききれぬ程の劫罪を生んでゆくことか。人の心の珠玉のようなものを、みすみす踏みくたかすにはいないという意味で。そのことに打たれ続けることなしに、事柄の進行の中に身を置くことなど、できなかった。(『苦海浄土』第二部・第五章「人間の絆」)

「運動」とは、チッソへの反対運動です。ここには新左翼系もいろいろな左翼系もどんどん合流して、まさに社会運動になったわけです。ところが、石牟礼道子は社会運動について「劫罪だ」と言っているんです。いろいろなものを壊した。「動き出している運動体に対して、私一人の気持を言えば、集団というものになじまないものをひそかに持っていた」と書き、兵隊ことば、組合ことば、活動家のセクト用語を極めて具体的に書いています。兵隊から戻ると、元々その土地にいたときに話している言葉とは全く違う言葉をしゃべるようになる。兵隊ことばで人と関わるようになる。組合活動が始まると、組合ことばが口から出てきて、組合用語というのを並べながら人を説得するようになる。活動家が入ってくると、活動家がセクト用語を使いながら話すようになる。そういうのが「弱者の上に特権と持って立つ者の、人間的な鈍感さ」だ、と。

私も含め、社会運動に関わった方たちは、多かれ少なかれ体験していると思います。自

分の心で感じていることではなく、上からやってきた言葉や、外から仕入れた言葉を相手に対してそのまま使う。正しいものとして押し付ける。教条主義です。うんざりします。そういうようなことを、ずいぶん石牟礼さんは経験したわけですね。

村では魂がないと言うとみんなで心配する伝統があつて、むしろそういうことが消えていくのに対応して「人権」という言葉が出てきましたから。それはそれで意味をもつ言葉ではありますけれど、それ以前の共同体に生きていた言葉に比べれば、まだ歴史が浅いというか、間に合わせにはよいけれど、大ざっぱで魂に届かない。「人権」では、どうも出生の奥の世界が見えてきません。草木にも魂があるという、お供養なさる、魚の供養とか、キツネの供養、ネコの供養をなさるというのは、ペットを可愛がるというのとは、全然違うわけですよ。(全集第十六卷所収「対談・未完の世紀」)

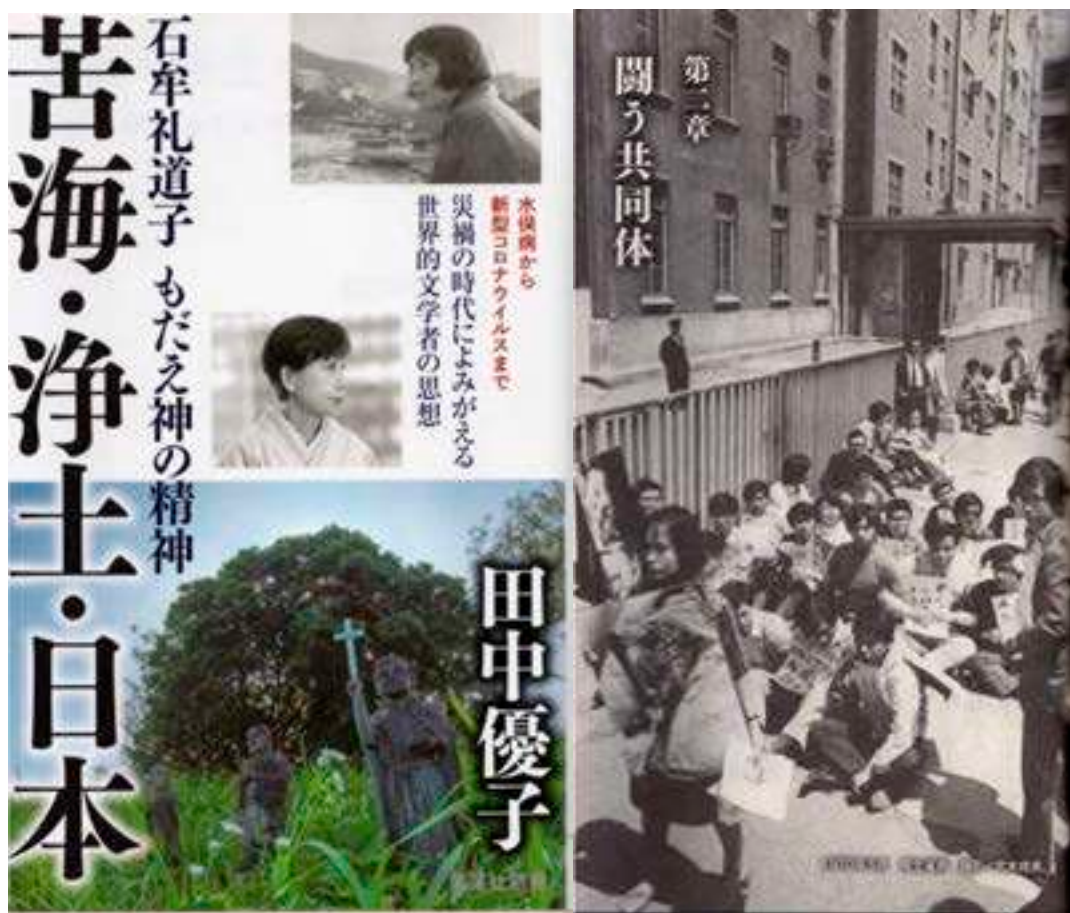
私たちが日常に使っている言葉の奥に何がありますか？ という問いを、常に投げかけています。市民運動も同様です。

公害を告発する市民運動、などといういい方の中に、たとえば水俣病事件を入れてみるとその質感がまことにうすくて、名づけようもない一箇の存在者としての感性からは、非常に遠い。それは表層の現象や、状況さえあらかわしえず、分類用語のひとつとしていたしかたないことではあっても、衝迫力を持ちえまい。まして、存在の河床に沈む魂たちにはとどかない。けれども、今のところ他の表現も考えつかないままに、運動らしきものの起こってくる時に立ちあい、そのような、魂たちのいるところになんとかいざり寄るべく、かかわりうるかぎりの人間関係の核の中に、わたくしはしどろもどろの秘かな志を織りこみ埋めこみ、護摩を焚くかわりに、ことばを焚いてきた。ことばが立ち昇らなくなると、自分を焚いた。

闘う共同体

私の書いた『公海・浄土・日本』の表紙の下半分の写真は原城の跡です。石牟礼道子にとっての「闘う共同体」は市民運動ではないです。人権の運動でもない。闘う「共同体」なんですね。それを『春の城』という作品の中に込めました。1971年にチッソの東京本

社に籠城したときに、『春の城』の構想を得た。



「当時、「団結」とか「連帯」、「自立」という元気のいい言葉が流行っておりました。わたしは何か足らんなあ、なにか情愛において足らんなあと思っておりました、それで、この人たちと「道行き」を共にするんだと思いきかせましたのです。道行きといいますと、人と人が、どのくらい絆を深めることができるか、見も知らなかった人たちとだんだん相知るようになって、煩惱がわいて来てはじめてできることです。」

「心の隅々まで、あるいは肉体の隅々まであたため合うような、死んだ先までも忘れ難い絆というものがないと、あんな、北風がびゅうびゅう吹く東京のど真ん中で座られたものではありません。」

(全集第十六卷所収「対談・石牟礼道子文学の世界」)

東京のど真ん中というのは、チッソ本社の籠城の時のことなのですが、籠城といって

もビルの中にずっといるわけではなく、本社の外に座り込みをしていたんですね。それがお正月の前後で、真冬の寒い日です。そういう日に座り込みをするんですが、それを「団結」とか「連帯」と言っている人たちもいるのだけれど、彼女の中ではそれは何だったのかというと「道行き」でした、と。つまり運命を共にする、先ほどの「死民」です。死を共にする人たちとの道行きだった。そうでなかったら、とてもやっていたらなかったということを行っています。ここで、世阿弥の『風姿花伝』を読みながら、島原の乱のことを思い出し、『春の城』という作品を書くことになりました。

「私、その場にて不意に三百五十年前、キリシタンの殉教者たちが立てこもった島原。原城の中の情景が浮かび上がったんです」と。そしてチッソ本社の籠城も修羅場なのだけれど、「人間が試される聖域に変わっていく」というのです。それで『春の城』の中では「もう一つのこの世」という構想を持ちながら、原（はる）の城の戦いを書いていきます。ご存じのように、1637年から38年にかけて3万7000人が一挙に亡くなった。せん滅された百姓一揆です。キリシタンの戦いと言われますが、実際には島原藩の松倉家や唐津藩の寺沢家がいろいろな不正を行って、非常に重い年貢を負わせ、拷問や処刑を行っていたのです。それに対して一揆を起こしたのです。

農民一揆、百姓一揆というのは江戸時代の10年ぐらい前から非常に盛んに行われるようになって、明治初期までで数えると、だいたいひと月に1回は日本のどこかで一揆が起きていました。それほど盛んだった。今の、抵抗しないとされている私たち日本人とはちょっと考えられないくらいに、必ずどこかで何か抵抗運動が起こっていたと断言したいと思います。

一揆というのはただ理念的なものではなくて、極めて具体的なもので、このことをこう変えてくれ、という具体的な目標・要求があって、その要求を書いて傘連判状という輪の形のサインをするんですね。誰でもいいから無責任に、名も知れぬように参加するということはありません。必ず参加者はサインをします。責任を取ります。サインをするんだけど、首謀者が分からないように、サインを輪形にします。そうすると、どこから始まっているか分からないから首謀者が分からない。その真ん中に要求項目を書いたり、それとは別に要求書をつくったりするんですね。そういう形ができていく。この島原・天草一揆が、その形が形成されていくごく初期のころです。

島原藩と唐津藩、天草などに対して、彼らは単に要求をしているだけです。それなのに幕府が他の藩を動員して20万人ぐらい兵を送り込むんですね。これは単なる百姓一揆だ

と、幕府の側は思わなかったということです。幕府はオランダ東インド会社に話をつけて船を用意させていたようです。ポルトガル船が原城側にあったという話もありますが、それはなかったようですが、本当にあったとすると、オランダとポルトガルの代理戦争になった可能性がある。つまりプロテスタントとカトリックの戦争になる可能性があったということです。しかしこの最大の百姓一揆が起こったからといって、一揆がなくならなかったことが大事なことです。むしろ一揆の方法がこれで確立されたんです。それでずっと続けていくことになります。

『春の城』の籠城ですが、「アオサ」が採れたとか「嫁が笠」という一枚貝が採れたとか、何か海から採ってきたり、山から採ってきたりして食べ物の交換を行い、食べ物をみんなと一緒につくる。まさに共同体です。共同体とはこういうものだという一つの様子、モデルというのでしょうか。それを『春の城』では書いています。籠城している人たちの中に初めて生まれてくる、「役割のない共同体」です。もう死を目前にした人たちの中で発生してきた、生まれ出てきた共同体の姿です。石牟礼道子にとっての真の「闘う共同体」がここで描かれたのです。

「自分が虫どもに似て来たと思うがのう」仁助がそんなことを言い出したのに、豆の皮をむいていたおうめが応じた。「じつはあたいも、左様に思いやす。前世は、虫か魚じゃったろうと思ひやす」「そこじゃて。虫であった頃にはしかし、御明りを拝みよったかのう」「虫どもは御明りが好きでござりやす。……百姓は虫けらとおなじじやと言われて来やしたが、地面の上下にやあ、虫もいろいろおって、可愛ゆうござりやす。信心深か虫もおひやすぞ、きつと」「うむ。お前の方がわしらより、泥まみれで働いたゆえ、地の中におる者のことはよう知つとろう」「何もかも知つとるわけじゃござせんが、あれたちが昼と夜の区別を知つとるのが感心で」

(『春の城』)

「自分が虫どもに似て来たと思うがのう」という会話です。虫でも魚でもいいというふうに思いながら、会話をしている。こういうシーンや、踊ったり歌ったり、食べたり飲んだりというシーン。いろいろな情景が描かれます。つまり、籠城といってもそこには生活がある。人間としての生活がある。これはチッソ本社の籠城でも同じだったということです。

そして、その共同体には必ず「もだえ神」がいる。誰かが窮地に陥ったときにたまらない気持ちになって、とにかく駆けつけて加勢したいと思う。力になれないかもしれないけれども、助けになりたいと、悶える。悶えるのは、助けられないから悶えるのです。その「もだえ神」が共同体には大事です。『春の城』には天草四郎が登場します。差別と貧困の中にいる人たちに寄り添っている少年です。そういう人を、もだえ神として設定しています。まさにチッソ東京本社籠城のときは、石牟礼道子のもだえ神としての役割を果たしていたんだろうと思います。

水俣学と谷中学

水俣学というのがもう既に成立していて、いろいろな観点から行われています。その水俣学のテーマの可能性がどういうものになり得るのか、整理してみました。

第一は、近代とは何かです。戦後の高度経済成長によって私たちは何を失ったのかという事は、水俣学の大事なテーマになると思います。第二は、「もだえ神」という言葉によって表現されていた共感の力とは、一体何なのか。第三は、「たましい」と表現されていた人間の徳義とか、山川草木と人を同じ価値に思う価値観とはどういうものであり、どう失われてしまったのか。第四は「闘う共同体」です。本来の共同体とその闘いとはどういうものであるか。第五は女性の歴史。これに石牟礼道子は取り組んでいます。高群逸枝の『女性の歴史』を読むことによって石牟礼道子は救われていくのです。女性がどのように古代から生きてきたかということ客観的に知ることによって、自分がなぜ今ここにいるのかということが分かってくるわけですね。ですから、女性史というのはそういう意味で単なる歴史というよりも、女性の一人一人がなぜ自分は今ここにこのように生きているのかということ、歴史の中で考えるという意味で非常に重要で、これが地域の歴史とも関わってきます。第六に、共同体のあり方の歴史です。第七に食べ物の歴史。そして第八に、「もう一つのこの世」、つまりさまざまな宗教と関連する、一種の精神の歴史です。これらのテーマが、石牟礼道子の文章の中から抽出できるのです。

水俣学の範囲とは一体どのぐらいなのかと考えたときに、谷中学を思い浮かべます。「真の文明ハ山を荒さず、川を荒さず、村を破らず、人を殺さざるべし」と、田中正造は1912年に書きました。ここから考えると、「真の文明」を求める、あらゆる環境学が範囲に入るだろうと思います。

谷中学が残したことは、鉍毒の公害という課題だけではなく、治水上の問題、憲法の

問題、人道の問題、経済の問題、衛生の問題、生命の問題、そして「谷中の貧乏人」を追い出すという「人権の問題」でもありました。つまり差別の問題、格差の問題でした。

「感心なのハ谷中人民の忍耐ニて候。我々の考の上ニてありし。……研究研究。精々研究いたし申すべく、真相未だ相分りかね候点これあり候」と言って、田中正造は谷中学をやりながら何を考えたかという、地元の人がすごい、と言ったんですね。この地元の人のもっている忍耐力とか精神力を自分は理解できない。これこそが研究の対象だと言ったのです。二人の地元の人物の事例を挙げながら、「及ばざるもの必しも愚にあらず。智者必しも知らざる」と。要するに知識をもっているということと関係がなく、どんな思いをしても「水の中に安座して怒濤をさけるまで殆ど平気、……この人々の自覚ハ神ニも近き精神」だったと。田中正造はこういうところに辿り着きます。そこから谷中学ということを考えようとしたんですね。

同じようなことを実は石牟礼道子も言っています。

水俣の患者さんたちは、全存在を奪われ、海も空も、言語を奪われたにもかかわらず、相手を殺すことを考えつかなかった。決定的な治療法もなく、日々苦しみ続けて……。生まれたときの姿のままの胎児性患者さんもいる。亡くなった方を解剖すると小脳などはハチの巣状態になっている。にもかかわらず「ひとさまに二度とこういうことがないように」と、人類の受難を引き受けた気でおられる。患者さんにお目にかかるたびに感動しています。雄々しく、気高く目の前にいらっしゃるのを書き残さなければ、と思ひまして。この能がきっかけになれば、と思っています。(新作能『不知火』とミナマタ)

これは『不知火』という能をつくったときの石牟礼道子の言葉です。なぜ能にしたのか。事件そのものというより、この患者さんたちの存在のすごさを伝えたい、と思った。田中正造と同じもの、谷中学と同じものを、石牟礼道子はそこに感じとっていました。

地域の問題というのは政策だけではなくて、そこに生きている人たちは一体何を見て、何を思い、何を食べて、どういう共同体をつくってきたのか、何を失ってきたのかということなんですね。本当はそれを私たちは知らなければならない。それは再構成できるのか。再びつくることはできるのかという、それは無理かもしれません。けれども、何がそこにかつて存在していたのか、ということを知ることは、地域を知る上で非常に重要なこと

だろうと思います。

さまざまな地域

私が実際に合宿などで、例えば佐渡に行ったときに感じたことは、一つはどんな地域にもそれぞれの全く違う特徴がある、ということでした。佐渡の場合には、東なのに言葉が関西系です。それは貴族たちが流されたところなので、京都の貴族文化が入っているからです。それから江戸時代は天領として大変栄えたので、武士文化も入っている。北前船の寄港地なので、商人の文化も入っている、という混合文化なのです。他にはあまりそういう場所はありません。



この方は、文楽の人形遣いとして大阪や全国で活躍をしていたのですが、辞めて佐渡にこもりました。西橋健（八郎兵衛）さんと言い、代表を務める「猿八座」は2021年のサントリー地域文化賞を獲得しました。なぜ佐渡に行ったかという、江戸や大坂で消え去った文楽とその人形が佐渡にあるんです。江戸や大坂の芸能は商業的な目的で行われて

いましたから、人気がなくなると廃れます。廃れた芸能は消えるのかというと消えません。どこか他のところに移動する。そうすると、それも面白いね、という人が継いでいくのです。それが江戸時代からずっとつながっているのです。それに気がついた文楽の人形遣いが、いや、自分は文楽よりこっちの方がいいと言って、佐渡に居着いてしまいました。漁師をしたり、人形づくりをしながら生きています。

ゼミ合宿では、その地域にしかない特質を、学生たちに知ってもらう方法を実践してきました。その特質は多くの場合、江戸時代から続く要素を持っています。佐渡の場合は、佐渡にしかない特徴的な文化や祭り、芸能、ものづくりなどを実践しておられる方々に案内していただきました。そうすると、学生たちは自分の生まれ育った場所はどういうところなのだろうか、と考え始めます。

最後に、秋田の事例を一つだけお話しします。これは白神山地です。



白神山地はゼミで何度も行っています。地域には必ず特徴がある、というのが学ぶべきことの一つです。それから、地域は必ず問題を抱えているというのが、もう一つの学ぶべきことです。どんな問題を抱えているのか。白神山地は青森と秋田と両方にまたがっています。1986年、87年辺りですが、まだまだ白神山地の重要性というのは誰にも分かっておらず、ここに道路を通そう、林道を通そうという案が湧き上がりました。たくさん木を切って林道を通すということは、それを利益につなげようという話です。

それに対して非常に激しい反対運動が起こりました。青森県側と秋田県側で反対運動が

起こって、まず秋田県側の工事が 1986 年 11 月にストップするのです。それで青森県側の運動に譲り渡されて、最終的にストップした。その結果、世界遺産になった。ブナの原生林は守られました。

この林道工事の中止を求める運動は、非常に大きな意味をもったのですが、実はこのときに関わった方に秋田に案内していただくことになりました。学生たちを連れて毎年行きました。もう亡くなりましたが、小説家でエッセイストでした。『千年の夜』『涙ぐむ目で踊る』『菅江真澄みちのく漂流』『獅子ヶ森に降る雨』など、秋田にまつわる歴史を書いていた方です。

地元はいろいろな人間関係があります。家族関係、親族関係、血縁関係。この反対運動のときに、彼の奥さんが自分の子どもを連れて自殺なされたんです。入水自殺なされた。そのときに秋田で出版社をやっていたのですけれども、この出版社を畳んでしまいました。その後は細々と執筆だけで、亡くなるまでずっと秋田から一歩も出ないで、生きていらしたんですね。それで私たちが行くと、丁寧に案内してくださる。縄文遺跡の発掘現場だとかそういうところにも連れて行ってくださるのです。

それぞれの地域には何かの曲がり角になる事件とか時期というのがあって、そこで力を発揮する人がいますが、そういう人たちが必ずしも幸福なわけではない。いろいろな目に遭ったり、いろいろな思いをしたりする。事件に巻き込まれる。人生が変わってしまう。そういう人たちに、私は巡り会ってきました。

地域にたくさん人が行けば発展していいよねとか、企業が行けばみんな勤め人になれていいよねという話ではなく、地域が変わっていく曲がり角にいた人は何を体験して、どういう思いでその後生きてきたのか、そこに注目する必要があります。人間に注目しなければ、地域が今のような近代化の方向だけではない別のあり方を求めて、もう一度再生する、あるいはクリエイティブなものになっていくという端緒は、やはりつかめないのではないかと思うんです。そういうことを、さまざまところで私は考えるようになりました。

駆け足でしたが、ぜひ石牟礼道子をこのきっかけでお読みになったり、あるいは朗読でお聞きになったりしながら、また地域のことを絆という問題だとか、共同体の問題だとかを考えるきっかけにさせていただけたらと思います。

5 研究業績

Research Achievements

研究業績

2023年1月以降

刊行書籍



[EToS 報告書]

書名：『東京発掘プロジェクト 水辺編V』

標題：東京発掘プロジェクトとは？

著者名：皆川典久 監修

発行：法政大学 江戸東京研究センター

発行年月：2023年3月

01. 舟運美術館
02. 目黒川舟入場をまちの発着点に
03. 河岸の更新 ―時代を刻む日本橋川―
04. 都市の流速
05. かざぐるまの道
06. 東京の水辺に賑わいを ―御茶ノ水・水道橋―
07. 亀島川の湊再編 ―「抜け」がつなぐ水辺空間―

著書



書名：『狭山丘陵を守った男』
著者名：清水淳
発行：けやき出版
発行年月：2023年2月25日



書名：『MACHIYA Practical Handbook シン町家実践ハンドブック・2』
著者名：アリソン理恵, 山本郁也, 能作淳平, 寶神尚史, 山道拓人, 香月歩,
佐竹雄太, 森中康影
発行：法政大学 江戸東京研究センター
発行年月：2023年3月



書名：『東アジアの都市とジェンダー 過去から問い直す』
著者名：小林ふみ子・染谷智幸編 高村雅彦・金谷匡高 他
発行：文学通信
発行年月：2023年3月31日



書名：『シリーズ水辺に暮らす SDGs1：水辺を知る』
標題：－湿地と地球・地域－
著者名：高田雅之・朝岡幸彦（編集代表）
発行：朝倉書店
発行年月：2023年4月



書名：『シリーズ水辺に暮らす SDGs2：水辺を活かす』

標題：－一人のための湿地の活用－

著者名：高田雅之・朝岡幸彦（編集代表）

発行：朝倉書店

発行年月：2023年4月



書名：『シリーズ水辺に暮らす SDGs3：水辺を守る』

標題：－湿地の保全管理と再生－

著者名：高田雅之・朝岡幸彦（編集代表）

発行：朝倉書店

発行年月：2023年4月



書名：『落語がつくる〈江戸東京〉』

著者名：田中優子編著、陣内秀信・高村雅彦・栗生はるか 他（共著）

発行：岩波書店

発行年月：2023年9月

論文 (査読付き)

論文標題：「土砂貯留関数」を用いた貯水池堆砂量
推定モデルの更新と検証－熊本県緑川ダム貯水池と
山形県寒河江ダム貯水池を対象として－
著者名：高橋大地・石川忠晴・道奥康治
雑誌名：ダム工学
発行年月：2023年3月

論文標題：日本の地域発展モデルの構築: イタリア
のテリトリー戦略の適用
著者名：木村純子・二階堂行宣・佐野嘉秀
雑誌名：イノベーションマネジメント, 20
発行年月：2023年3月

論文標題：Impact of Soviet worker residential area
design on Beijing No. 2 textile factory: Research of
worker residential planning during the First Five-
Year Plan
著者名：Shuai Shao, Masahiko Takamura
雑誌名：Japan Architectural Review
発行年月：2023年6月

論文標題：Flow regime transition of rubble mound
weir during a flood
著者名：K. Michioku
雑誌名：Proc.IAHR
発行年月：2023年8月

論文

論文標題：江戸の都市性と「公衆トイレ」
著者名：根崎光男
雑誌名：法政大学江戸東京研究センター『新・江戸
東京研究の世界』
発行年月：2023年1月

論文標題：「地球環境適応策としての下水道のあり
方」～グリーンインフラとしての下水道への提言～
著者名：神谷 博
雑誌名：下水道協会誌 2023年2月号

発行年月：2023年2月

論文標題：自転車専用通行帯の整備実態における
道路空間再構築に関する研究-東京都及び神奈川県を
対象に-
著者名：入倉理人, 高見公雄
雑誌名：法政大学大学院概要集
発行年月：2023年3月

論文標題：市街地整備推進による自然・地形改変の
経緯に関する研究－水の郷日野を中心に－
著者名：志村綾音, 高見公雄
雑誌名：法政大学大学院概要集
発行年月：2023年3月

論文標題：産業観光が発展する要因に関する研究-新
潟県の産業観光に着目して-
著者名：宋陽, 高見公雄
雑誌名：法政大学大学院概要集
発行年月：2023年3月

論文標題：東京湾横断道路開通後における君津地域
の人口動態に関する研究
著者名：福山主磨, 高見公雄
雑誌名：法政大学大学院概要集
発行年月：2023年3月

論文標題：法政大学イノベーション・マネジメント
研究センターシンポジウム「地理的表示(GI)と持続
可能な社会」講演録
編者名：木村純子
雑誌名：法政大学イノベーション・マネジメント研
究センター・ワーキングペーパー, 252
発行年月：2023年3月

論文標題：企業緑地の野鳥飛来ポテンシャルを考え
る
著者名：高田雅之
雑誌名：都市緑化技術
発行年月：2023年3月

論文標題：文化財保存運動と「地域博物館」の理論的接点に関する研究— 加曽利貝塚保存運動と千葉市立加曽利貝塚博物館の活動を中心に —
著者名：森屋 雅幸
雑誌名：21 世紀社会デザイン研究 (21)
発行年月：2023 年 3 月

論文標題：博物館法改正と日本のエコミュージアム活動の在り方—エコミュージアムの「まちづくり」言説への警鐘を込めて—
著者名：馬場憲一
雑誌名：現代福祉研究 第 23 号
発行年月：2023 年 3 月

論文標題：後藤新平のエネルギー観と衛生思想
著者名：堀川洋子
雑誌名：別冊『環』28 後藤新平—衛生の道 1857-1929
発行年月：2023 年 3 月 31 日

論文標題：地理的表示のない世界:北米のアルチザンチーズの事例
著者名：木村純子
雑誌名：法政大学イノベーション・マネジメント研究センター・ワーキングペーパー, 253
発行年月：2023 年 4 月

論文標題：駒橋発電所落水水路橋と中原岩三郎について
著者名：知念 浩生, 森屋 雅幸
雑誌名：地域と社会 (13)
発行年月：2023 年 6 月

論文標題：豊かな社会の実現:テリトリー戦略によるイタリア農村地域の活性化
著者名：木村純子
雑誌名：農業, vol.1705
発行年月：2023 年 7 月

論文標題：テリトリー・マネジメントによる内発的発展:中山間地の地理的表示(GI)生産地の事例
著者名：木村純子・高倉成男・今村哲也
雑誌名：法政大学イノベーション・マネジメント研究センター・ワーキングペーパー, 256
発行年月：2023 年 7 月

論文標題：イタリアの都市と食
著者名：陣内秀信
雑誌名：『すまいろん』第 113 号、2023 年夏、pp.41-45.
発行年月：2023 年 8 月 25 日

論文標題：生口島における集落構造の類型化
著者名：樋渡彩、吉田真子、田中碧衣
雑誌名：『海際から描く、くらしの教養—生活・生業・技術・文化—』
発行年月：2023 年 9 月

論文標題：みかん蔵からみた岡村島
著者名：吉田真子、樋渡彩
雑誌名：『海際から描く、くらしの教養—生活・生業・技術・文化—』
発行年月：2023 年 9 月

論文標題：4つの産業から成る忠海について
著者名：田中碧衣、樋渡彩
雑誌名：『海際から描く、くらしの教養—生活・生業・技術・文化—』
発行年月：2023 年 9 月

論文標題：テラス席の展開と郊外の再評価
著者名：樋渡彩
雑誌名：『グローバル時代の景観デザイン』
発行年月：2023 年 9 月

論文標題：イタリア産オリーブオイルのブランド化プロセス

著者名：木村純子
雑誌名：法政大学イノベーション・マネジメント研究センター・ワーキングペーパー, No.258
発行年月：2023年10月

論文表題：江戸における「公衆トイレ」の成立・展開とその利用
著者名：根崎光男
雑誌名：『人間環境論集』（法政大学人間環境学会）第24巻第1号
発行年月：2023年10月

論文表題：隠岐の島西郷港周辺地区の河川利用の変遷と水辺景観形成
著者名：渡邊真由，福島秀哉，福井恒明
雑誌名：第68回土木計画学研究・講演集
発行年月：2023年11月

論文表題：重要文化的景観の価値保全と治水計画の両立—山形県大江町百目木地区を対象に
著者名：神山謙悟，鴨潤矢，岡田一天，福井恒明
雑誌名：第68回土木計画学研究・講演集
発行年月：2023年11月

論文表題：テリトリーに根ざした農業が創る豊かな社会
著者名：木村純子
雑誌名：法政大学イノベーション・マネジメント研究センター・ワーキングペーパー, No.259
発行年月：2023年11月

論文表題：駿河台緑地のモニタリングからわかること：野鳥は増えている
著者名：高田雅之
雑誌名：東京人
発行年月：2023年11月

論文表題：「イタリアの都市空間とその描き方」
著者名：陣内秀信

雑誌名：『第50回美術講演会講演録』鹿島美術財団 pp.51-81.
発行年月：2023年11月10日

論文表題：沼津市中心市街地の都市形成過程と景観価値の関係に関する研究
著者名：山田莉緒，福島秀哉，福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集 19
発行年月：2023年12月

論文表題：重要文化的景観選定範囲内の公共事業設計協議の体制と運用に関する事例分析
著者名：川上健太，佐瀬優子，福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集 19
発行年月：2023年12月

学会発表（招待講演・国際学会）

発表標題：銭湯から発展する、地域の文化・観光・福祉のつながり
発表者名：栗生はるか他
学会等名：PPP/PFI 大専校
発表場所：WEB
発表年月：2023年1月

発表標題：つぐ建築
発表者名：栗生はるか他
学会等名：愛知建築士会名古屋北支部
発表年月：2023年1月

発表標題：祭りが生まれる時—銭湯山車巡行の試み
発表者名：栗生はるか他
学会等名：江戸東京研究センター
発表場所：法政大学
発表年月：2023年1月

発表標題：19世紀から20世紀初頭におけるヴェネツィアの都市構造の変化
発表者名：樋渡彩
学会等名：都市史学会

発表場所：イタリア文化会館

発表年月：2023 年 7 月

発表標題：Issues of Subjectivity and Objectivity in Ubiquitous Mapping

発表者名：Takashi Morita

学会等名：The 31st International Cartographic Conference

発表場所：Cape town, South Africa

発表年月：2023 年 8 月 18 日

発表標題：Expectations for Visualization of Local History and Culture in Disaster

発表者名：Tsuneaki Fukui

学会等名：International Conference “Education in Digital Era”, PAVIA DIGI WEEK 2nd Edition

発表場所：University of Pavia

発表年月：2023 年 9 月

発表標題：身近な地域の魅力を掘り起こす

発表者名：栗生はるか

学会等名：東京都印刷工業組合文京支部

発表場所：株式会社大塚商会本社

発表年月：2023 年 9 月

発表標題：文化財を活用した地域創生のあり方—旧尾県学校を事例として—

発表者名：森屋 雅幸

学会等名：淑徳大学地域創生戦略フォーラム in 山梨「地域文化と地域づくり」

発表場所：都留市尾県郷土資料館

発表年月：2023 年 10 月

発表標題：地域活動から奇跡の保存再生事例まで

発表者名：栗生はるか

学会等名：日本建築家協会（JIA）再生部会

発表場所：JIA 建築家会館

発表年月：2023 年 10 月

発表標題：本郷エリアの文化資源について

発表者名：栗生はるか他

学会等名：全国まちづくり大会

発表場所：明治大学

発表年月：2023 年 10 月

発表標題：Agroecology and GI in Japan

発表者名：Junko Kimura

学会等名：International Conference Angers 2023, Forum Origine, Diversité, et Territoires and École Supérieure des Agricultures

発表場所：Angers, France

発表年月：2023 年 10 月 11 日

発表標題：関東大震災と東京の復興—建築・景観・思想・コミュニティ

発表者名：陣内秀信

シンポジウム名：関東大震災 100 年「大震災と都市空間—過去に学び、近未来を描く—」

学会等名：法政大学地理学会

発表場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

発表年月：2023 年 10 月 21 日

発表標題：環境水理学私史と水工学への期待

発表者名：道奥康治

学会等名：土木学会第 23 回水工学オンライン連続講演会

発表場所：Webinar

発表年月：2023 年 10 月 27 日

発表標題：Comparison of Italy and Japan on the preservation of historical and cultural landscapes

発表者名：Tsuneaki Fukui

学会等名：Corso di Restauro Architettonico

発表場所：University of Pavia

発表年月：2023 年 11 月

発表標題：世田谷三軒茶屋の近世から近代

発表者名：金谷匡高

学会等名：近代文化研究所
発表場所：昭和女子大学
発表年月：2024年2月

学会発表

発表標題：竹原・安芸津・西条における酒造業で形成されたテリトリーについて

発表者名：田中碧衣、樋渡彩
学会等名：『日本建築学会中国支部研究報告集』46巻
発表場所：広島大学
発表年月：2023年3月

発表標題：生口島における町および集落の空間構造の比較について

発表者名：栗田修史、樋渡彩
学会等名：『日本建築学会中国支部研究報告集』46巻
発表場所：広島大学
発表年月：2023年3月

発表標題：赤穂の技術継承から見る児島と平生における塩田の比較研究

発表者名：小野愛実、樋渡彩
学会等名：『日本建築学会中国支部研究報告集』46巻
発表場所：広島大学
発表年月：2023年3月

発表標題：蘇州における農業都市から商業都市への変化に関する考察

発表者名：章単婁、樋渡彩
学会等名：『日本建築学会中国支部研究報告集』46巻
発表場所：広島大学
発表年月：2023年3月

発表標題：ヴェネツィア共和国を示すシンボルの位置に関する考察

発表者名：原田拓海、樋渡彩、久安佑歩
学会等名：『日本建築学会中国支部研究報告集』46巻
発表場所：広島大学
発表年月：2023年3月

発表標題：パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察—サント地区を対象として その1

発表者名：樋渡彩、西真人
学会等名：『日本建築学会中国支部研究報告集』46巻
発表場所：広島大学
発表年月：2023年3月

発表標題：パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察—サント地区を対象として その2

発表者名：西真人、樋渡彩
学会等名：『日本建築学会中国支部研究報告集』46巻
発表場所：広島大学
発表年月：2023年3月

発表標題：パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察—プラート・デッラ・ヴァッレ地区を対象として

発表者名：岡部和真、樋渡彩
学会等名：『日本建築学会中国支部研究報告集』46巻
発表場所：広島大学
発表年月：2023年3月

発表標題：パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察—オンニサンティ地区を対象として

発表者名：有田雄一郎、樋渡彩
学会等名：『日本建築学会中国支部研究報告集』46巻
発表場所：広島大学
発表年月：2023年3月

発表標題：パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察—サンタ・ソフィア地区を対象として

発表者名：岩谷柊治、樋渡彩

学会等名：『日本建築学会中国支部研究報告集』46巻

発表場所：広島大学

発表年月：2023年3月

発表標題：イタリア大使館敷地の水環境総合調査報告（その2）

発表者名：神谷 博

学会等名：日本環境学会

発表場所：静岡文化芸術大学

発表年月：2023年6月25日

発表標題：日本型エコミュージアムの要件とその提唱—その設置に向けた一試論—

発表者名：馬場憲一

学会等名：日本エコミュージアム研究会

発表場所：法政大学大学院

発表年月：2023年7月

発表標題：因島の歴史的要素に関する研究

発表者名：上田健一朗、樋渡彩

学会等名：特定非営利活動法人 瀬戸内海研究会
議、瀬戸内海研究フォーラム

発表場所：山口大学

発表年月：2023年8月

発表標題：ユビキタス・マッピング概念における“動的”要素についての考察

発表者名：森田 喬

学会等名：日本地図学会

発表場所：岐阜県図書館

発表年月：2023年8月27日

発表標題：南関東における湿地目録と現状特性

発表者名：市川菜菜子・高田雅之

学会等名：日本湿地学会

発表場所：法政大学

発表年月：2023年9月

発表標題：蘇州の変遷に関する考察

発表者名：章単婕、樋渡彩

学会等名：日本建築学会

発表場所：京都大学

発表年月：2023年9月

発表標題：広島県安芸津の酒造業で形成された地域構造の変遷について

発表者名：田中碧衣、樋渡彩

学会等名：日本建築学会

発表場所：京都大学

発表年月：2023年9月

発表標題：ヴィチェンツァのポルティコの位置について

発表者名：久安佑歩、樋渡彩

学会等名：日本建築学会

発表場所：京都大学

発表年月：2023年9月

発表標題：ポーランドの絹産業について

発表者名：吉田真子、樋渡彩

学会等名：日本建築学会

発表場所：京都大学

発表年月：2023年9月

発表標題：サンテラズモにおける空間構造に関する歴史的考察

発表者名：樋渡彩

学会等名：日本建築学会

発表場所：京都大学

発表年月：2023年9月

発表標題：ダムへのアプローチ

発表者名：道奥康治

学会等名：法政大学Lステ・オンライン・ゼミ

発表場所：Zoom

発表年月：2023年10月18日

発表標題：雨庭普及のための技術的検討～東京都世田谷区の事例をもとに～

発表者名：神谷 博

学会等名：雨水資源化システム学会

発表場所：琉球大学

発表年月：2023年11月4日

発表標題：日本における「文化ボランティア」に関する施策の消長について—2000年代以降の動向と

文化財保護の観点を中心に—

発表者名：森屋 雅幸

学会等名：社会デザイン学会

発表場所：立教大学

発表年月：2023年12月

発表標題：東京都心部における橋詰空間の空間特性と整備・管理方針及び利用者意識

発表者名：福井昂平，荻原知子，福井恒明

学会等名：第19回景観・デザイン研究発表会（ポスター発表）

発表場所：中央大学

発表年月：2023年12月

発表標題：東京圏における市民参加型広場の空間特性と提供者及び利用者意識

発表者名：前澤健心，荻原知子，福井恒明

学会等名：第19回景観・デザイン研究発表会（ポスター発表）

発表場所：中央大学

発表年月：2023年12月

発表標題：地域活動における地域史共有の実態把握モデルの構築

発表者名：新井奏音，佐瀬優子，福井恒明

学会等名：第19回景観・デザイン研究発表会（ポスター発表）

発表場所：中央大学

発表年月：2023年12月

発表標題：七尾・敦賀における港湾と背後地域の連携

発表者名：大旗望，佐瀬優子，福井恒明

学会等名：第19回景観・デザイン研究発表会（ポスター発表）

発表場所：中央大学

発表年月：2023年12月

発表標題：岩手県大船渡市の差し込み型防災集団移転促進事業における地域特性の影響

発表者名：車谷綾花，福島秀哉，福井恒明

学会等名：第19回景観・デザイン研究発表会（ポスター発表）

発表場所：中央大学

発表年月：2023年12月

発表標題：再発見される東京の島一泊浮港の近代化と集落の拡張

発表者：高道昌志

学会等名：『シンポジウム 島からみた江戸東京～交流・広がり・領域』：法政大学江戸東京研究センターほか主催

発表場所：法政大学マルチメディアセンター

発表年月：2023年12月23日

著作について書かれた書評

評者名：長谷川香

媒体名：「東京の都市史」、「建築史学」第八十号

書評掲載年月：2023年3月

対象著書（著者）：「江戸東京研究センター叢書、『水都学』I～Vのすべて」（陣内秀信、高村雅彦他）

評者名：上田隆穂

媒体名：イノベーション・マネジメント
書評掲載年月：2023年3月
対象著書（著者）：イタリアのテリトリー戦略
（木村純子・陣内秀信）

評者名：畢 滔滔
媒体名：マーケティング・ジャーナル
書評掲載年月：2023年4月
対象著書（著者）：イタリアのテリトリー戦略
（木村純子・陣内秀信）

評者名：温井亨
媒体名：『都市史研究』10、都市史学会、p.132
書評掲載年月：2023年10月20日
対象著書（著者）：『トスカーナ・オルチャ渓谷のテ
リトリー 一都市と田園の風景を読む』（植田暁
/陣内秀信/M・ダリオ・パオルッチ/樋渡彩、古小鳥
舎、2022年

その他

標題：「水都東京ものがたり」外濠（取材）
インタビュー：福井恒明
雑誌名：読売新聞都内版
発行年月：2023年1月8日

標題：八王子千人同心塩野適齋の葬送—古谷家文書
「勇荘院殿葬送式記録」より—
著者名：馬場憲一
雑誌名：多摩のあゆみ 第189号
発行年月：2023年2月

標題：瀬戸内テリトリー研究会—歴史・文化・
産業資産発掘の試み
著者名：樋渡彩
雑誌名：報告書(ISBN 978-4-9911971-8-5)
発行年月：2023年3月

標題：疫病除けの護符文書とその伝播—川島家文書
「疫病神の詫び証文」より—

著者名：馬場憲一
雑誌名：多摩のあゆみ 第190号
発行年月：2023年5月

標題：「日本の銭湯」世界遺産並みの価値が認められ
た訳
著者名：栗生はるか（インタビュー）
雑誌名：東洋経済オンライン
発表年月：2023年5月

発表標題：「都市史としての酪農～みんなで一緒に
街を歩きませんか～(近代京都の搾乳業史)」
発表者名：金谷匡高
学会等名：ミルク一万年の会交流会
発表場所：秋葉原レンタルスペース 203
発表年月：2023年5月20日

標題：守るべきは安全、そして地域の暮らし・文
化・風景
著者名：福井恒明
雑誌名：LANDSCAPE DESIGN, No.150
発行年月：2023年6月

標題：水神から読む江戸東京の都市と領域
著者名：高村雅彦
発表場所：NHK文化センター青山教室
発表年月：2023年6月9日

標題：「玉川上水・分水網関連遺構100選の展示」
における外濠関連以降の執筆
著者名：高道昌志
団体名：玉川上水・分水網を生かした水循環都市東
京連絡会
発行年月：2023年7月

標題：銭湯から考えるまちづくり
著者名：栗生はるか
雑誌名：区画再開発通信 vol.643
発行年月：2023年7月

標題：人・土地・建物の流動と再縫合
著者名：栗生はるか他（インタビュー）
雑誌名：建築雑誌
発行年月：2023年7月

発表標題：歴史的な建築デザインを学ぶ（西洋の建築様式と秋田の近代建築を中心に）
発表者名：石渡雄士
学会等名：大学コンソーシアムあきた令和5年度前期高大連携授業
発表場所：カレッジプラザ
発表年月：2023年7月1日

発表標題：寺町の景観デザインについて
発表者名：石渡雄士
学会等名：秋田商工会議所寺町観光研究会
発表場所：秋田商工会議所
発表年月：2023年7月11日

標題：イタリア大使館敷地の水環境総合調査～調査結果と今後に向けて～
講演者名：神谷 博
講演名：イタリア大使館調査報告会
発行年月：2023年7月20日

標題：世襲代官支配下の年貢徴収の仕組み—下師岡吉野家文書「年貢受取状」「年貢小手形」より—
著者名：馬場憲一
雑誌名：多摩のあゆみ 第191号
発行年月：2023年8月

標題：「せんとうとまち」が取り組む東京・滝野川
稲荷湯の再生と地域活性化
著者名：栗生はるか他（インタビュー）
雑誌名：NTT Sustainable Smart City Partner
Program
発行年月：2023年8月

標題：瀬戸内テリトリーオ研究—酒造業から見えるテリトリーオの構造
著者名：樋渡彩、田中碧衣
雑誌名：報告書(ISBN 978-4-911121-01-6)
発行年月：2023年9月

標題：野川の歴史とグリーンインフラ
講演者名：神谷 博
講演名：野川流域連絡会総会講演
発表年月：2023年9月11日

標題：野川の生態と河川整備の現状
講演者名：神谷 博
講演名：小金井市公民館講座
発表年月：2023年9月15日

標題：巨星墜つ—渡部與四郎先生の思い出
著者名：高見公雄
雑誌名：都市計画364号
発行年月：2023年9月15日

標題：第3回 田中村が何故京都の一大搾乳地域となったのか
著者名：金谷匡高
雑誌名：日本の酪農・歴史さんぽ【京滋（京都・滋賀）地域編】（webコラム）
発行年月：2023年9月15日

標題：第4回 「牛乳搾取営業願」から明治期京都の牧場の様子を垣間見る
著者名：金谷匡高
雑誌名：日本の酪農・歴史さんぽ【京滋（京都・滋賀）地域編】（webコラム）
発行年月：2023年9月22日

標題：豊かな社会を創る地理的表示(GI)
著者名：木村純子
雑誌名：Tokyo Slowly Slowly, No.2
発行年月：2023年10月

発表標題：野鳥と緑を通してみるちよだ

著者名：高田雅之

講座名：九段生涯学習館講座

発表年月：2023年10月

標題：銭湯の匂いのする温かいまちをどう守っていくのか

著者名：栗生はるか

雑誌名：コンフォルト 193号

発行年月：2023年10月

標題：雨と地下水から読み取る水都の源流～東京の水系と水循環～

講演者名：神谷 博

講演名：エクセレント講座

発行年月：2023年10月17日

発表標題：秋田市の都市形成と空間の返遷

発表者名：石渡雄士

学会等名：中央図書館明德館開館40周年記念市民文化講座

発表場所：秋田市立中央図書館

発行年月：2023年10月22日

発表標題：都内最長の用水路をもつ日野市の歴史とその活用

発表者名：石渡雄士

学会等名：狭山池シンポジウム2023「狭山池と水—史跡から考えるくらしと水環境—」

発表場所：大阪府立狭山池博物館

発表年月：2023年10月28日

標題：日本の湿地の魅力とその保全

著者名：高田雅之

学会等名：豊田市湿地保全連絡会

発行年月：2023年11月

標題：日本の生物多様性と自然を生かした防災

著者名：高田雅之

雑誌名：中国大学生友好交流訪日団環境・防災に関するセミナー

発行年月：2023年11月

標題：江戸時代前期武蔵野新田の年貢上納の実態—上連雀井口家文書「年貢納払勘定書」より—

著者名：馬場憲一

雑誌名：多摩のあゆみ 第192号

発行年月：2023年11月

標題：神が潜むデザイン「神の繕い」

著者名：栗生はるか

雑誌名：Professional design web

発行年月：2023年11月

標題：下北沢～三軒茶屋 建築まち歩きツアー

案内人：金谷匡高

主催：東京アクセスポイント

開催日：2023年11月5日

論題：つながりによる豊かな社会の実現

著者名：木村純子

発表：第3回飼料・畜産セミナー

発表日：2023年11月8日

論題：Il Valore delle Produzioni a Marchio DOP e IGP in Giappone

著者名：Junko Kimura

発表：IL Bello e il Buono della Cucina Italiana: A Tavola con Pellegurino Artusi e le Eccellenze dell'Emilia Romagna

発表日：2023年11月14日

発表標題：豊かな森づくりにつながる木材利用推進公開セミナー、パネリスト参加

発表者名：石渡雄士

学会等名：秋田経済同友会

発表場所：ANA クラウンプラザホテル秋田

発行年月：2023年11月22日

標題：日本の都市に宿る水の神々～島原・大坂・江戸を例に

著者名：高村雅彦

雑誌名：かわさき市民アカデミー

発行年月：2023年11月28日

標題：巻頭言：都市の野鳥の変化は私たちに何を語りかける？

著者名：高田雅之

雑誌名：URBAN BIRDS

発行年月：2023年12月

標題：湿地に眠る人ーボッグピープル

著者名：高田雅之

雑誌名：三番瀬市民調査報告会

発行年月：2023年12月

標題：楽しみたい、残したい、Tokyoのお風呂屋さん 若手経営者らと語る

著者名：栗生はるか他（インタビュー）

雑誌名：朝日新聞デジタル

発行年月：2023年12月

発表標題：横浜と川崎の水から見た都市と地域の空間構造

発表者名：石渡雄士

学会等名：2023年度後期かわさき市民アカデミー講座

発表場所：Web 講座

発行年月：2023年12月5日

論題：アグロエコロジーと都市農業

著者名：木村純子

発表：経済産業省近畿経済産業局令和5年度地域団体商標等を活用したブランディング支援事業 第3回検討会議

発表日：2023年12月12日

書評

評者名：馬場憲一

雑誌名：文化経済学 第20巻第1号

発表年月：2023年3月

対象書籍：松本茂章編著『ヘリテージマネジメント 地域を変える文化遺産の活かし方』学芸出版社 2022年5月

評者名：根崎光男

雑誌名：『関東近世史研究』第93号

発表年月：2023年9月

対象書籍：安田寛子『幕末期の江戸幕府鷹場制度ー徳川慶喜の政治構想ー』（河出書房新社）

6 活動報告

Activity Report

活動報告

(2023年1月～2023年12月までの活動)

○第4回雨水基準制度シンポジウム 「雨水活用の現状と基準や制度を考える」 ～グリーンインフラの進展を見据えて～

【日時】2023年5月17日

【会場】法政大学 市ヶ谷キャンパス ポアソナードタワー26階

【開催者】主催：法政大学エコ地域デザイン研究センター、公益社団法人雨水貯留浸透技術協会、特定非営利活動法人雨水まちづくりサポート、日本建築学会あまみずのこれからを考える小委員会。後援：国土交通省

【プログラム】

10:00 開会

- ・主催者挨拶・趣旨説明 雨水基準制度研究会
- ・挨拶 国土交通省
- ・基調講演

講演1:「NbS(自然を基盤とした解決策)としての雨庭都市を目指して」/森本幸裕(京都大学名誉教授)

講演2:「水循環の改善と雨水活用の役割(仮題)」/榎原 隆(八千代エンジニアリング統括技師長)

12:00～13:30 昼食及び展示セッション

- ・報告1 自治体分科会「京都市における雨庭の取り組み」*リモート講演/豊田幸宏(京都市建設局みどり政策推進室)
- ・報告2 雨にわ分科会「誰でもできる雨庭づくりWS」/角屋ゆず(世田谷トラストまちづくりセンター主任)
- ・報告3 製品分科会/「雨水循環型壁面緑化システム」大林修一((株)プラネット代表取締役)

16:00

・パネルディスカッション「雨水活用の現状と基準や制度を考える」

パネリスト:報告登壇者 及び 屋井裕幸(雨水貯留浸透技術協会常務理事)

コーディネーター:神谷 博(NPO 雨水まちづくりサポート理事長, 法政大学エコ地域デザイン研究センターおよび江戸東京研究センター客員研究員)



○シンポジウム

「島からみる江戸東京— 交流・広がり・領域—」

【日時】2023年12月23日

【会場】法政大学市ヶ谷田町校舎5階
マルチメディアホール

【開催者】主催：法政大学江戸東京研究センター、
共催：法政大学エコ地域デザイン研究センター

【プログラム】

基調講演 13:10~13:50

—江戸時代までの江戸東京の島々

田中優子（法政大学江戸東京研究センター特任教授
／法政大学名誉教授）

[報告第一部]

島に関する研究発表 13:50~15:40

—可視化される江戸の島、東京の海・地図にみる伊豆諸島

米家志乃布（法政大学江戸東京研究センター長／法政大学文学部地理学科教授）

—再発見される東京の島—波浮港の近代化と集落の拡張

高道昌志（東京都立大学助教／法政大学江戸東京研究センターおよびエコ地域デザイン研究センター客員研究員）

—新島のコーガ石産業と集落景観

金谷匡高（世田谷区教育委員会／法政大学江戸東京研究センターおよびエコ地域デザイン研究センター客員研究員）

—神津島と本州のネットワーク／柳田國男『鳴』と島々の変容

前畑明美（法政大学沖縄文化研究所国内研究員）

—宮沢賢治と伊豆大島

岡村民夫（法政大学江戸東京研究センター研究プロジェクト・リーダー／法政大学国際文化学部教授）

[報告第二部]

現地・島からの発信 15:40~16:00

—八丈島の酪農再生

歌川真哉（八丈島乳業社長）

—「東京の島」への旅の魅力

倉本英治（法政大学研究開発センター）

ディスカッション 16:10~17:00



【センター長】

高見 公雄 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授

【兼任研究員】

高村 雅彦 法政大学デザイン工学部 建築学科 / 教授
 岩佐 明彦 法政大学デザイン工学部 建築学科 / 教授
 網野 禎昭 法政大学デザイン工学部 建築学科 / 教授
 小堀 哲夫 法政大学デザイン工学部 建築学科 / 教授
 川久保 俊 法政大学デザイン工学部 建築学科 / 教授
 道奥 康治 法政大学デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 / 教授
 福井 恒明 法政大学デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 / 教授
 鈴木 善晴 法政大学デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 / 教授
 今井 龍一 法政大学デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 / 教授
 根崎 光男 法政大学人間環境学部 / 教授
 小島 聡 法政大学人間環境学部 / 教授
 高田 雅之 法政大学人間環境学部 / 教授
 木村 純子 法政大学経営学部 / 教授

【特任研究員】

陣内 秀信 法政大学 / 特任教授

【客員研究員】

石神 隆 法政大学 / 名誉教授
 高橋 賢一 法政大学 / 名誉教授
 西谷 隆亘 法政大学 / 名誉教授
 永井 進 法政大学 / 名誉教授
 森田 喬 法政大学 / 名誉教授
 馬場 憲一 法政大学 / 名誉教授
 出口 清孝 法政大学 / 名誉教授
 宮下 清栄 法政大学デザイン工学部 / 名誉フェロー
 北山 恒 法政大学デザイン工学部 / 名誉フェロー
 有限会社 awn / CEO
 横浜国立大学 / 名誉教授
 神谷 博 特定非営利活動法人 雨水まちづくりサポート / 理事長
 岡本 哲志 岡本哲志都市建築研究所 / 代表
 金谷 匡高 世田谷区教育委員会 / 学芸員
 浅井 義泰 (株)エキープ・エスパス / 取締役
 阿部 彰 A+A 美來研究室、建築家・都市環境プランナー、
 東京ウォーターフロント協議会、国際観光施設協会専門委員
 猪野 忍 (有)猪野建築設計 / 代表取締役
 大隈 哲 建築家・(株)イーソーコ総合研究所 / 特任研究員

小松 妙子 マヌ都市建築研究所
 酒井 哲 TownFactory 一級建築士事務所 / 代表
 佐々木 政雄 (株)アトリエ74 建築都市計画研究所 / 代表取締役
 清水 淳 北川かっぱの会代表
 菅原 圭子 大成建設(株)
 鈴木 知之 写真家
 高松 巖
 鳥越 けい子 青山学院大学総合文化政策学部 / 教授
 難波 匡甫 Lueur 場所と空間の研究所 / 所長
 堀川 洋子 法政大学デザイン工学部 / 兼任講師
 水田 恒樹 社会福祉法人 小茂根の郷 / 監事
 横内 憲久 日本大学名誉教授
 恩田 重直
 長野 浩子 一級建築士事務所 SOO-Lab 暮らしとまちの研究室
 石渡 雄士 秋田公立美術大学 美術学部 美術学科 景観デザイン専攻 / 助教
 稲益 祐太 東海大学工学部 建築学科 / 准教授
 法政大学デザイン工学部 / 兼任講師
 樋渡 彩 近畿大学工学部建築学科 / 講師
 高道 昌志 東京都立大学 都市環境学部 都市政策科学科 / 助教
 ディエゴ・コサ・フェルナンデス
 一般社団法人キタ・マネジメント・建築文化研究所 / 所長
 森屋 雅幸 淑徳大学地域創生学部 / 准教授
 栗生 はるか 一般社団法人せんとうとまち / 代表理事
 法政大学デザイン工学部 / 兼任講師
 金子 俊之 株式会社福山コンサルタント
 金井 翔哉 日本工営株式会社

【客員研究員（海外）】

神田 駿 マサチューセッツ工科大学建築+都市計画学科 / 教授
 阮 儀三 同済大学国家歴史文化名城研究センター / 所長
 Richard Bender カリフォルニア大学バークレー校 / 名誉教授
 Rinio Bruttomesso ヴェネツィア水都国際研究センター / 元所長
 Donatella Calabi ヴェネツィア建築大学建築史学科 / 名誉教授
 Paola Falini ローマ大学建築学部都市計画学科 / 教授
 Giuseppe Gargano アマルフィ歴史文化研究所 / 歴史家
 Ekhart Haln ドルトムント工科大学客員 / 名誉教授
 Milan Konecny マサリェク大学地理情報学科 / 教授
 Matteo Dario Paolucci ヴェネツィア建築大学 / 講師
 Suwattana Thadaniti チュラロンコン大学社会科学研究所 / アドバイザー・准教授
 Paul Waley リーズ大学環境学部地理学科 / 教授
 Roderick Wilson イリノイ大学 / 助教
 Olimpia Niglio パヴィア大学 / 教授

以上

法政大学エコ地域デザイン研究センター

本研究センターは、「環境の時代」を切り開く真の「都市と地域の再生」のための方法を研究することを目的とし、2004年4月にエコ地域デザイン研究所を設立、2016年4月にエコ地域デザイン研究センターと改名しました。環境のバランスと文化的アイデンティティを失いつつある日本の都市や地域を持続可能で個性豊かに蘇らせるために、〈エコロジー〉と〈歴史〉を結びつける独自のアプローチをとるところに大きな特徴があります。

国内外の専門家とネットワークを形成し、多角的な理念と手法を探求することにより問題解決に取り組んでいます。他の国や地域と比較しながら都市とテリトリー（地域）の水辺空間や自然環境を歴史的な視点を取り入れつつ深く研究し、その再生の具体的な方法を積極的に提言していきます。

特に今後は、都市とその周辺に広がる地域を、歴史文化・社会経済・水循環などのまとまりを持つ新たな領域概念「テリトリー」として提示する活動に重点を置きます。東京周辺・瀬戸内・新潟などをその対象としています。

法政大学エコ地域デザイン研究センター

2023年度報告書

発行日 2024（令和6）年3月

発行 法政大学エコ地域デザイン研究センター

（代表）〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1（市ヶ谷キャンパス）

（所在地）新見附校舎1階 研究開発センター内

<http://eco-history.ws.hosei.ac.jp/wp/>

E-Mail：ecohistory-jimu@ml.hosei.ac.jp 電話 03-5228-1266

印刷 藤原印刷株式会社

協賛 総合資格学院